

山 梨 県

村 上 遺 跡

—東八代横断広域農道建設に伴う発掘調査報告書—

昭和55年

山梨県教育委員会

山 梨 県

村 上 遺 跡

—東八代横断広域農道建設に伴う発掘調査報告書—

昭和55年

山梨県教育委員会



曾根丘陵上村上遺跡付近の
縄文時代中期及び平安時代の主要遺跡（村上遺跡は最古）
(甲府盆地とハケ岳、南アルプスを眺む)

村上遺跡(点線内)遺影 甲府盆地、八ヶ岳、南アルプスを望む



序 文

甲府盆地の東側に連なる曾根丘陵といくつかの扇状地は、甲府盆地の西側にある八ヶ岳山麓とともに、山梨県の二人遺跡包蔵地といえます。

盆地の東側は豊かな純農村地帯で、今まで村落を横に連絡する道路が少なく、道路は盆地中央部から放射状に広がっておりましたが、交通機関が発達し、農産物が商品化した現代では、駿東地方を横断する道路が必要となり数年前から工事が始められております。

村上遺跡は、この道路の中間部にあたる中道町地内の曾根丘陵上に在り、周知の遺跡とは言い難い場所でありましたが、試掘をした結果、縄文時代中期・平安時代後期の住居址などを検出しました。

幸い地元や関係者の協力が得られ、また大師にも恵まれて順調に発掘調査が出来、ここにその報告書を刊行する次第です。

昭和55年7月31日

山梨県教育委員会

教 育 長 神宮寺 誠

例　　言

1. 本書は昭和51年度東八代横断広域農道建設に伴う発掘調査報告書である。
2. 遺構等の実測は標高で表わさなかった。遺跡の標高は365mである。
3. 発掘調査は文化課文化財主事 森 和敏が担当した。
4. 遺構・遺物の実測は森と古屋が、写真撮影は森が行った。
5. 執筆は下記以外は森があたった。第一章第四節は県企画管理局技師 和田・山本氏および第一章第二節の(イ)は山梨県遺跡調査団調査員渡辺礼一氏による。
6. 編集は森が行った。
7. 発掘調査及び整理参加者は次のとおりである。

調査員折井忠義（発・六郷町）渡辺礼一（表探、整・甲府市）調査補助員池谷正志（発・日大）
池谷百代（発・中道町）込山鶴代（発・豊富村）古屋房子（整・山梨市）小林たつ子（トレース
・編集）

目 次

序 文

例 言

挿 図 目 次

図 版 目 次

第一章 遺跡の位置と周辺の状況	1
1. 遺 跡 の 位 置	1
2. 村 上 遺 跡	4
(イ) 地 理 的 環 境	4
(ロ) 村上遺跡の表面採集調査	4
3. 遺跡付近及び甲府盆地東部にある遺跡・遺物	10
4. 遺跡周辺の地形・地質	11
第二章 調 査 の 経 過	12
第三章 調査地区的層序・遺構・遺物	13
1. 調査地区の層序	13
2. 繩文時代中期の遺構・遺物	14
3. 平安時代の遺構・遺物	50
4. 集 石 遺 構	52
第四章 考 察	54
付 遺物実測の方法	
参考資料 土器実測図 (三体)	

挿図目次

- 挿図1 遺跡の位置図 1
挿図2 遺跡の付近図 2
挿図3 山梨県内考古遺物分布図 3
挿図4 村上遺跡遺物分布図 5
挿図5 村上遺跡表面採集土器拓影 8
挿図6 村上遺跡表面採集土器拓影 8
挿図7 村上遺跡 959番地の2表面採集
土器拓影 9
挿図8 村上遺跡表面採集土器拓影 9
挿図9 村上遺跡発掘遺構全体測量図 13
挿図10 東西セクション 14
挿図11 J 1住居址微細図 15
挿図12 J 1住居址平面図 15
挿図13 J 1住居址出土土器実測図 16
挿図14 J 1住居址床面直上土器拓影 17
挿図15 J 1住居址床面直上出土土器 17
挿図16 J 1住居址床面直上出土土器 18
挿図17 J 1住居址床面上出土土器 19
挿図18 J 1住居址出土石器実測図 22
挿図19 J 1住居址覆土出土石器実測図 22
挿図20 J 2住居址遺物出土状況平面図 23
挿図21 J 2住居址出土土器実測図 25
挿図22 J 2住居址出土土器実測図・土器拓影 26
挿図23 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 28
挿図24 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 28
挿図25 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 29
挿図26 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 29
挿図27 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 30
挿図28 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 31
挿図29 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 31
挿図30 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 32
挿図31 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 32
挿図32 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 33
挿図33 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 33
挿図34 J 2住居址覆土上層出土土器拓影 34
挿図35 J 2住居址覆土上層出土土器拓影 34
挿図36 J 2住居址覆土下層出土土器拓影 34
挿図37 J 2住居址出土石器実測図 34
挿図38 B 3・29A(A3グリッド拡張部
J 1・J 2) 覆土出土土器拓影 34
挿図39 4C・31Aグリッド覆土
出土土器拓影 34
挿図40 B 3・31A・A 3グリッド
覆土出土土器拓影 34
挿図41 B 3・35A・A 3グリッド拡張部
J 1・J 2住居址出土土器拓影 34
挿図42 B 3・28A・A 3グリッド拡張部
J 1・J 2住居址出土土器拓影 34
挿図43 B 3・35A・A 3グリッド拡張部
J 1・J 2住居址出土土器拓影 34
挿図44 第3址(1~3)・第4址(4~5)
出土土器拓影 34
挿図45 平安時代住居址(H 1住)平面図 34
挿図46 平安時代住居址出土灰釉陶器(A64)
土師器(A62・3)・須恵器(A61・5)
実測図・拓影 34
挿図47 築石造構平面図・セクション図 34
挿図48 参考資料 牧丘町倉科 岡俊彦監修
山上土器実測図 34
挿図49 参考資料 東八代郡一宮町国分小字
南条 215番地出土の底部穿孔土器
(曾利II式)実測図 34
挿図50 参考資料 境川村寺尾北原遺跡
出土土器見取図 34
(上寺尾3136 桑原弥六氏所蔵)
挿図51 参考資料 境川村小山西原出土 34
(境川村三門 清水信吾氏所蔵
・底部穿孔土器 昭和40年代発見)

図版目次

- 図版1 J-1 住居址上器出土状況
図版2 J-1 住居址ベルト内土器出土状況
図版3 J-1 住居址土器出土状況
図版4 J-1 住居址ベルト内上器出土状況
図版5 J-2 住居址上器出土状況
図版6 J-2 住居址上器出土状況
図版7 J-2 住居址
図版8 J-2 住居址土器出土状況
図版9 平安時代住居址(II-1)
図版10 平安時代住居址内露出グリーンタフ
図版11 平安時代住居址内露出グリーンタフ断面図
図版12 平安時代住居址炉址断面図
図版13 平安時代住居址セクション図
図版14 集石址
図版15 集石址断面図
図版16 発掘参加者
図版17 J-1 住居址床面直上出土土器
図版18 J-1 住居址床面直上出土土器
図版19 C-2・5 A他グリッド・J-1 住居址床面直上出土土器
図版20 C-2・5 A他グリッド・J-1 住居址床面直上出土土器
図版21 C-2・7 A・8 Aグリッド・J-1 住居址床面直上出土土器
図版22 C-3・24 Aグリッド・J-2 住居址覆土下層出土土器
図版23 C-2・7 A・8 Aグリッド・J-1 住居址床面直上出土土器
図版24 第3址・第4址出土土器
図版25 J-2 住居址覆土下層出土土器
図版26 J-2 住居址覆土下層出土土器
図版27 J-2 住居址覆土下層出土土器
図版28 J-2 住居址覆土下層出土土器
図版29 J-2 住居址下層出土土器
図版30 J-2 住居址下層出土土器
図版31 J-2 住居址下層出土土器
図版32 J-2 住居址覆土下層出土土器
図版33 J-2 住居址下層出土土器
図版34 B-1・1 Aグリッド・J-2 住居址覆土下層出土土器
図版35 C-4・26 Aグリッドの一部・J-2 住居址覆土下層出土土器
図版36 C-3・22 Aグリッド・J-2 住居址覆土下層出土土器
図版37 C-4・35 Aグリッド・J-2 住居址覆土下層出土土器
図版38 J-2 住居址覆土下層出土土器
図版39 J-2 住居址出土人体文土器
図版40 J-2 住居址出土人体文土器
図版41 同 上
図版42 J-2 住居址覆土下層出土土器
図版43 B-1・3 Aグリッド・J-2 住居址覆土下層出土土器
図版44 J-1 住居址拡張部床面直上出土土器
図版45 B-3・31 A・A3グリッド覆土出土土器
図版46 B-3・28 A・A3グリッド拡張部・J-1・J-2 住居址拡張部出土土器
図版47 B-3・29 A・A3グリッド拡張部・J-1・J-2 住居址拡張部出土土器
図版48 C-3・20 Aグリッド・J-2 住居址拡張部覆土上層出土土器
図版49 B-3・34 A・A3グリッド拡張部・J-1・J-2 住居址拡張部出土土器
図版50 B-3・35 A・A3グリッド・J-1・J-2 住居址拡張部出土土器

- 図版51 B 2・17A グリッド・J-2 住居址拡張部覆土下層他出土土器
- 図版52 B 1・9 A グリッド・J-2 住居址拡張部覆土下層出土土器
- 図版53 B 1・5 A グリッド・J-2 住居址拡張部覆土下層出土上器
- 図版54 J-2 住居址拡張部下層出土土器
- 図版55 J-2 住居址覆土出土石器
- 図版56 J-2 住居址覆土出土石器
- 図版57 J-2 住居址出土石器
- 図版58 J-2 住居址覆土出土石器
- 図版59 J-2 住居址床面直下出土土偶・土器
- 図版60 J-2 住居址床面直下出土土偶頭部
- 図版61 J-2 住居址床面直下出土土偶
- 図版62 平安時代住居址床面直上出土上器・須恵器
- 図版63 村上遺跡表面採集石器・土器等
- 図版64 村上遺跡表面採集土器
- 図版65 村上遺跡表面採集土器
- 図版66 村上遺跡表面採集土器
- 図版67 村上遺跡表面採集土器
- 図版68 村上遺跡表面採集土器
- 図版69 4 C・31A グリッド出土土器(J-2 住居址より南へ30m 隔離した場所である)
- 図版70 村上遺跡表面採集土器
- 図版72 村上遺跡表面採集土器
- 図版73 牧丘町倉科 岡 俊彦
一宮町国分小字南条215 出土の土器

第一章 遺跡の位置と周辺の状況

1. 遺 跡 の 位 置

村上遺跡は山梨県東八代郡中道町中畑にあり、発掘地点は同931番地である。

昭和30年3月31日に町村合併をする以前は右左口村中畑である。

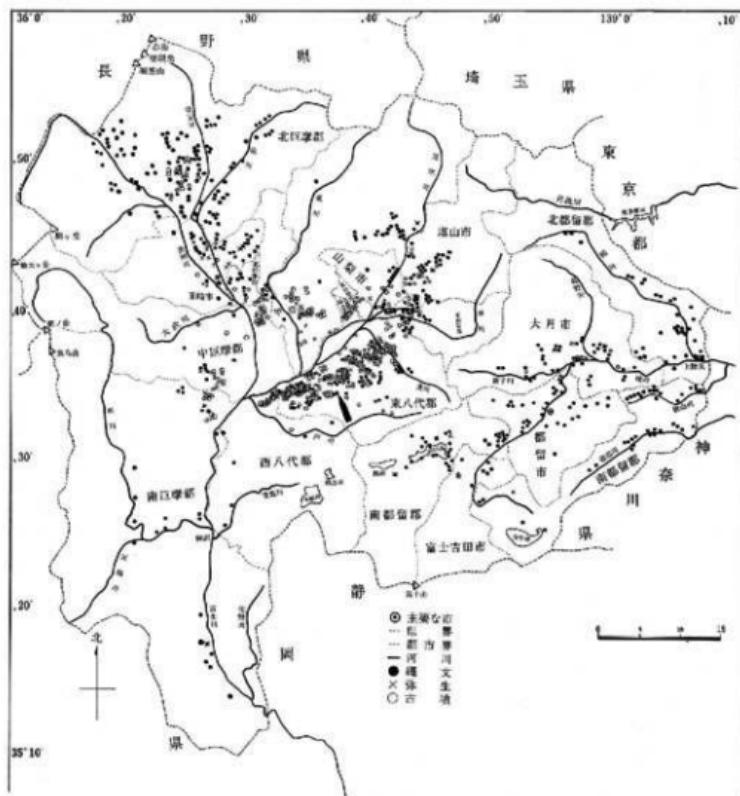
地理的位置は、甲府盆地東南の曾根丘陵上で、御坂山脈の山麓に位置する。標高は365mで、温帶と暖帶の境界上にある。



挿図1 遺 跡 の 位 置 図



挿図2 道路の付近図



挿図3 山梨県内考古遺物分布図

山梨県遺跡地名表（昭和38年 山梨県教育委員会）
に追加訂正したるものである。

2. 村上遺跡

(イ) 地理的環境

本遺跡は、曾根丘陵の最奥部に位置し、滝戸川の支流である不動河原右岸にある。不動河原か心経寺川の氾濫と思われる小砾が混入した地層で、崖錐の上を被覆されていて、西にやや傾斜している平坦な地城である。標高 365m である。西には心経寺山が曾根丘陵を切るように張り出し、東には駒山の支脈があり、南には滝戸山の支脈である城山（中世城郭の出城的遺構）があって、山塊になっている。中畠部落の上部で、県立甲陽学園に行く道の北側になっている。

村上遺跡はこのような地形にあって、ほぼ南北150m、東西180mの範囲に、藤内式、井戸尻式、曾利式土器片や石器や土師器、陶器が少し散布している。縄文式土器については、散発的に遺物が散布しているので、各時期毎に集落が形成されたかどうか疑わしい。

縄文時代の住居址が検出された当該地区の南には遺物は、散布しているが、入れたトレンチには遺構はなかった。また、この遺跡の遺物分布調査については、同項「(ロ)表面採集を中心として」で後述するところである。ここの一帯に上野原遺跡は、ほぼ 600m の地点にある。甲府一精進湖有料道路建設に伴って発掘した結果「その中心となる遺跡は縄文中期を主体とするものであって、住居址の数は完全なプラン 15軒、破壊を受けていたプラン 7 軒を数え、その他敷石遺構・配石遺構と考えられる場所数ヶ所に及ぶ。さらに土括と考えられるような無数の円形ピット・埋甕の類など多数発見されたのである。さらに、住居址の多くは層位的に前後関係をもつものが多く」と中道町史に記載し、また、分布調査によても多量の藤内式、井戸尻式、曾利式土器が採集出来たので、その拓影を載せたところである。またこの遺跡の縁辺部に敷石遺構（敷石住居址）も昭和 43 年に山梨大学歴史学教室で発掘している。村上遺跡との関連については結語で述べるつもりであるが、さらに周囲にある曾根丘陵上の縄文中期の遺跡について、観察すると次のようである。台地上で約 700m 南に、七覚の供養寺遺跡がある。縄文中期中葉から後半にかけての土器が少ないが散布していて、曾利式の底部穿孔土器が倒立したまま発見されたこともあるので、遺跡と考えてよいであろう。これより西方にも少しの散布地が散在している。もう二ヶ所隣接して、濃厚に散布している場所が、東山台地上にある。村上遺跡の 1,500m 西で、縄文中期前半から後半にかけての土器を中心とする。東山の北東の台地上にもやや濃厚に中期土器が散布している場所がある。

村上遺跡の北東には心経寺山があって、さらにその北東は境川村になるのであるが、曾根丘陵を大きく分断しているので、遺跡もまた分断されているのである。

南西は豊富村になるのであるが、丘陵上に三ヶ所濃厚な遺跡があり、そこから山側にも少しづつ散布地がある。

このように見てくると現状では（多くの人の表面採集によって、散布が薄くなっている所もあることが考えられる）曾根丘陵上にある村上遺跡付近の遺跡は、濃厚な散布地がいくつかあり、薄い散布地も散在しているようである。御坂山脈の山麓に沿って、遺跡が分布していることは特徴的と見られるようである。

(ロ) 村上遺跡の表面採集調査

発掘地点は東八代郡中道町中畠小字村上 731 番地に所在する。当遺跡に散布する遺物を表面採集し

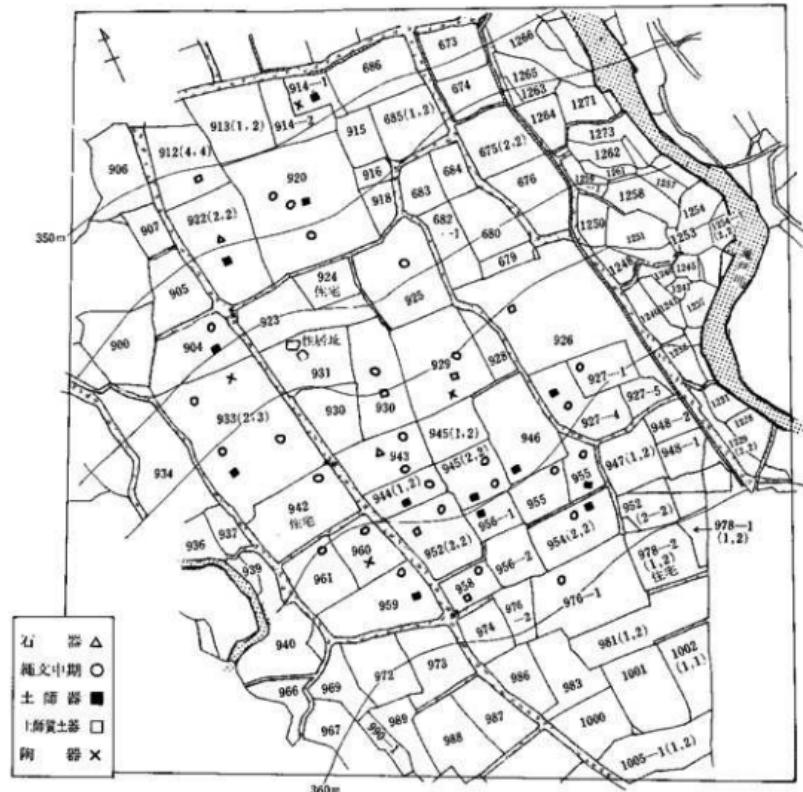
その詳しい分布図を作製してみると、繩文時代の住居址はその集落の北（下）方に占地したものと推定できるが、平安時代の住居址はどんな位置にあったものか判然としないのである。平安時代の住居は繩文時代のそれより広い範囲に散在していたのかも知れない。

村上遺跡周辺の表面採集による遺跡範囲の確認のための調査を目的として、地表面に散布する考古学的遺物を細片残さず採集する方針でのぞんだ。

調査は、まず現地の分間図を参考にして、各一筆毎の土地、約129か所を調査対象とした。そのうち56か所は、宅地、瀧戸川添いの田、西側の西川に面した傾斜地などは、表採不能であり、調査は、台地上の蔬菜類の畑、ぶどう畑、桃畑、桑畑を中心に行った。

その結果、この調査方法で採集された、考古学的遺物は、石器、繩文時代中期土器、平安時代土器および七師質土器、陶器などの各時代の文化遺物の資料を採集することができた。

これらの遺物について、拓本（5～8回）写真（63～72回）で資料報告とした。



插図4 村上遺跡遺物分布図

表採遺物の表採地点、数量等については、別表のとおりである。

すべてが破片で完形品になるものはなかった。

(1) 縄文時代中期土器

中期の土器は、中葉から中期末にかけてのもので、井戸尻期の土器片及び特に櫛目状条線を地文として沈線により区画したものと、沈線による文様区画とその中に綾杉文（八の字文）をもつ土器で曾利式系統が大半を占めていた。

959～960番地から大量に採集した土器は数年前土地所有者が耕作中発見し、畑のすみに一括置きざりにしたもの今回採集した。土器破片は大きく、曾利期の要の破片である。

(2) 土師器

土師器は、すべて小破片で図示しなかったが、国分期が大半を占めていた。

(3) 土師質土器

土師質土器も、小破片で図示しなかったが、キメ細かい胎土を用い、焼成が「甘い」「やわらかい」印象を受け、杯の破片であろう。

(4) 陶器

2点であったが、いずれも瀬戸系の破片で、時期は特定できない。1点は楕円の茶碗の高台の破片で他は、織部焼の破片ではないかと思われる。

(5) 石器

打製石斧2点であり、1点は短筒形で頭部と刃部の巾がほぼ一致し、基部付近にくびれを有し、側面に打痕をもっており、粘版岩製である。他の1点は打製石斧の欠損品で安山岩製である。

凹石は破片で輝石安山岩製である。

ま　と　め

表採遺物の概略を記述したが、本遺跡は瀬戸川の西側から西川の東側にかけた北に向ったゆるやかな傾斜地で、東西約100m、南北約200mの範囲を調査した。その結果、今回の発掘地点のやや南よりにかけて土器の分布がみられ、その範囲は、発掘地点を中心に、東西約70m、南北約90mに発掘地点を囲むように、南、北、西方向に半月形に分布している。この地区が特に遺物の分布が他の遺跡より濃厚とはいえないが、少規模の住居址が散在したものと思われる。959、960番地付近から、一括出土した遺物から、この地区に曾利期の住居址があったことを物語っている。また、この表採地域は曾根丘陵の他遺跡と同様に縄文時代中期の生活環境としての条件を備えていたことがうかがえる。

土師器は、縄文土器とは同じ地域から表採されており、おそらく縄文期の住居址の上層に住居址が存在しておるものと推測され、時期は国分期である。

土師質土器から、遺跡の東方、約750mの地、心経寺部落に、悟道山安國寺があり、甲斐国史に、この寺は元和年間（1615～1623）に再興され、それより以前、暦応2年（1339）にこの付近に創建されていることが記述されており、これらのことを考えれば、何等かの係わりあいがあるのではないかと、今後の発掘調査のさいは、この点を踏え調査すべきであろう。

この項を終るにあたり、地元・土地所有者の御協力により表面採集ができたことを感謝する次第であります。

村上遺跡周辺表採遺物数量表

地番	地点	縄文期	土師	土師質器	陶器	石器	備考
895	1		2				
"	2	4					
"	3		1				
904		2		1			
912			1	1			
914			1				
915の2	2		1			1	
920	2	6					
"	3	1	5				
"	4			1			
922の2	2	2					
925		2					
926						1	
927		10	8				
929		3		1	1		
930		4		1			
933	1	7					
"	2					1	
"	3	7					
"	4	10	4				
942	1	1					
943	2	6				1	
"	1	2					
944の2	2	2	2				
945の2	2	4					
"	3	4	2				
946			2				
947	1	3					
954		1	1				
955	1	1	1				
956			1				
957	1	2					
"	2	5					
958		1					
959		22	2				
960		6					
961		13					
976		12					
計		143	34	5	2	3	

参考文献

藤森栄一「井戸尻」 中央公論美術出版 (1965)

山梨県教育委員会「辻遺跡と前在家遺跡」(1974)

山梨県教育委員会「勝沼氏館跡発掘調査報告 I II III」(1975—1977)

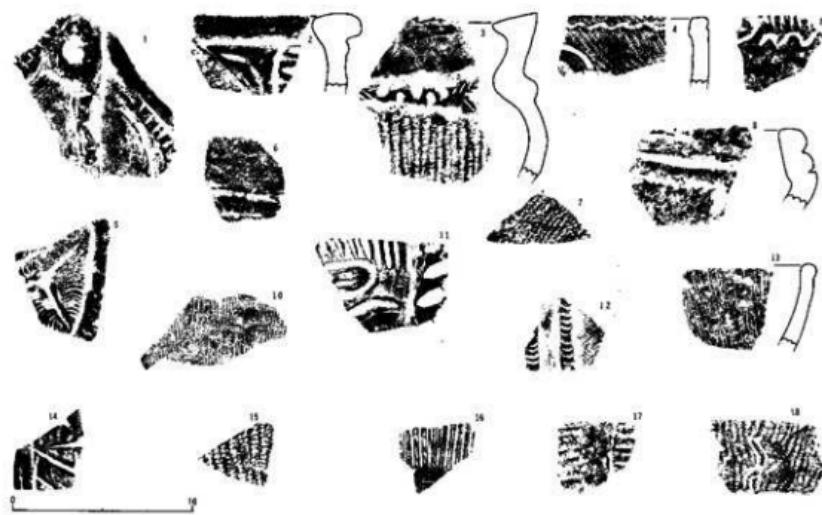


插图5 村上遗址表面采集土器拓影

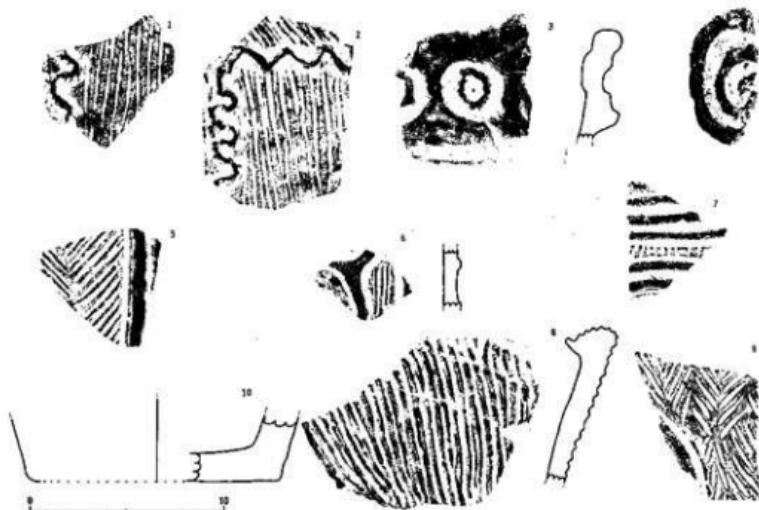
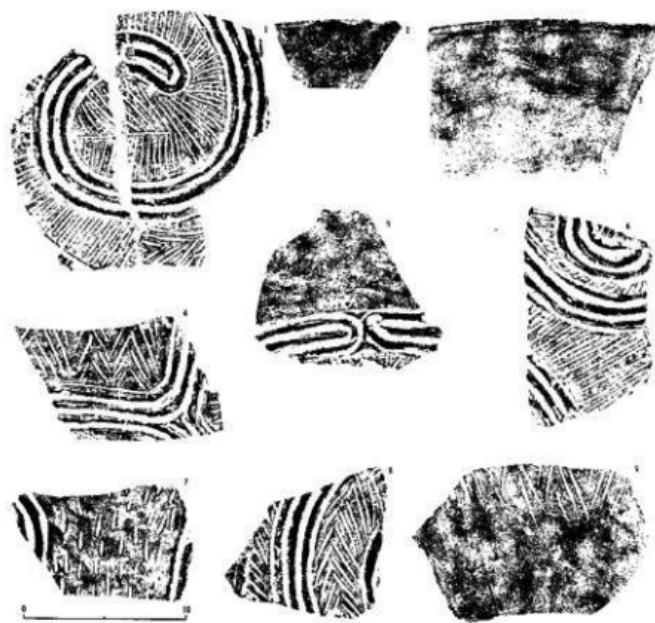
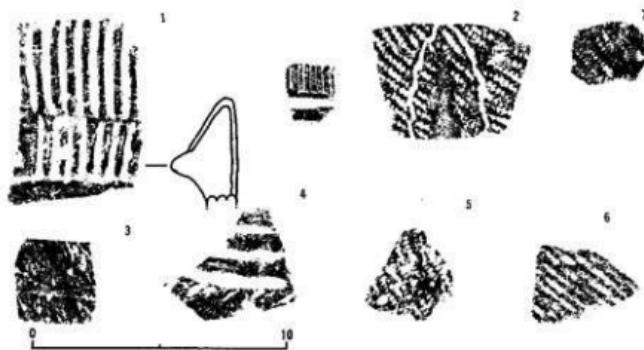


插图6 村上遗址表面采集土器拓影



插図7 村上遺跡959番地の2 表面採集土器拓影



插図8 村上遺跡表面採集土器拓影

3. 遺跡付近及び甲府盆地東部にある遺跡・遺物

甲府盆地には底部、山ろく、山岳地帯にそれぞれ、繩文・弥生・古墳・奈良・平安時代に栄えた遺跡があるのであるが、ここでは向井遺跡を理解する資料として、繩文時代中期と平安時代に限って記述することにする。

(1) 繩文時代中期一甲府盆地には、曾根丘陵と八ヶ岳・茅ヶ岳山ろくに広く、濃密に遺跡が分布していく、二大中期繩文遺跡地帯ということが出来るのである。この外にも勿論多くの遺跡があり、その多くは盆地縁辺部、すなわち山ろくとそれよりやや高い地帯に分布がみられるのである。⁽²⁾ 遺跡がある立地条件は一として、盆地東部にある曾根丘陵、西部にある一之瀬台地や八ヶ岳・茅ヶ岳の大火波で出来た台地上などの台地状地形の眺めのよい上部である。微地形を観察すると、平か又は南に暖傾斜をするある程度の広さがあるフラットな地形で、多くはローム層に被覆され、二次堆積土がある肥沃土に位置する。北面傾斜に位置する遺跡は盆地東部にある御坂町桂野遺跡などは例外的で、ほとんど見当らない。二として山岳部にある遺跡は水流のある沢を近くに接する高い場所や、山間部の河岸段丘上や山ふところ的地形になっている平な所で、広さは台地上のものよりやや狭い遺跡である。やはり眺めのよい肥沃土に位置していることが多い。⁽³⁾ 三として、多くは盆地東部に発達した扇状地上にある遺跡で、扇頂から扇端に近い地域までの間に広く分布している。微地形的にみると近くに水流があるやや高めの所で、多くはローム層に覆われておらず、水害の被害のない所を選んで居住している。⁽⁴⁾ 集落は台地上のものよりやや広めであるようである。集落形態が環状であるかどうかは解明されていないので興味あるところである。発掘例もほとんどなく、勝沼バイパス路線内の一宮町地内で昭和38年に一軒と笛吹川扇状地上にある⁽⁵⁾ 塩山市町田遺跡で昭和52年に相当数発掘されたに過ぎない。盆地底部では例外的に⁽⁶⁾ 甲府市上石山遺跡がある。

中期の遺物は他の時期のものよりもはるかに多量である。

中期前半から中葉にかけては中部山岳地帯で最も豪華な土器が製作され、各地にこの影響を及ぼしている。八ヶ岳山麓と甲府盆地東部について、この時期に作られた土器を比較する文献資料としては、町村誌（史）や「重郎原遺跡」「坂井」「甲斐北原・柳田遺跡の研究」「上石田遺跡」「甲斐考古」「辻・蔚在家遺跡」や「井戸尻」「丘陵」等があり、また遺物は県文化課・三浦町考古館・八代町郷土館・御坂東小学校・一宮町国分深山重武氏・山梨市小原東古屋善博氏・笛吹中学校・明野村公民館・越崎市徳坂小学校・御坂町坂井考古館や在野の集団家が所蔵しているものがある。これらを比較してみると中期のものは、八ヶ岳山麓が甲府盆地より土器は豪華で、特に把手はその傾向が顕著である。一般的には八ヶ岳山麓で出土したもののはうが豪放闊達である。

参考文献

- (1) 「山梨県文化財要覧」 山梨県教育委員会・昭和50年による。
- (2) 山梨県教育委員会が青山学院大学に発掘を依頼したものである。報告書は作成中であるが、その一部が中道町誌に掲載されている。
- (3) 「勝沼町誌」「一宮町誌」「御坂町誌」「八代町誌」など近年各町村から発刊された町誌を参照されたい。

- (4) 「八代町誌」(昭和50年、八代町役場)で筆者は遺跡範囲は扇状地より曾根丘陵・準曾根丘陵の方が広い旨記したが、その後の現地踏査等の経験で、むしろ逆であるように思われるに至った。
- (5) 本年、塙市が道路建設のために発掘した遺跡で、現在報告書刊行の準備をしていることである。
- (6) 「上石田遺跡」 甲府市教育委員会 1973年

4. 遺跡周辺の地形・地質

○中道町中畠、村上遺跡周辺の地質

本遺跡の地理的位置は、甲府盆地南縁部に帶状に分布する曾根丘陵上面に位置する。丘陵は盆地低位部との比高差50~100mであり、その南側に急峻な御坂山塊が丘陵と平行して走っている。

曾根丘陵は、甲府盆地の陥没によってできた断層崖下に甲府盆地北西側の火山から噴出した火山碎屑物や火山泥流が堆積したものであり、堆積物は起因する火山によって多少の差が見られる。が、全体的には輝石安山岩、角閃石石英安山岩などの火山岩を含有し、石基は半固結状の砂質凝灰物から構成されている。その上位に湖沼堆積物である砂礫層と粘土層の互層が乗っている。

本地域の地形は、御坂山塊に源を発する滝戸川と西川に挟まれた、扇状地地形を呈するが、両河川の侵蝕崖にみられるように、寺尾砂礫層と呼ばれる崖錐性砂礫層が厚く堆積しており下位層との関係は、地域内では確認できなかった。

礫は主に御坂山塊から供給された、石英閃綠岩、安山岩、砂岩からなり亜角礫~亜円礫で礫径は最大30cm程度で、礫径は不均一で、分級度が悪い。石基は凝灰質で粘質化が進み全体に礫が多く崖錐性砂礫層の特徴を示している。

この崖錐性砂礫層の上位にローム層と叫石層が乗っている。ローム層は、曾根ローム層と呼ばれるもので下部からクサレ礫を含み礫種は緑色凝灰岩、安山岩であるが、ほとんど風化が著しく、径は10~20cmが多く、石基は茶褐色ロームである。

クサレ礫層から漸移して、チョコ、ローム層になる。含有礫は小径で約2~3cm、凝灰岩が主で、下部の界面にタテ方向のクラックが多く発達し、上位部には恐らく鉄分と思われる優鉄質沈澱物薄層が数枚挟在されている。全体の厚さは20~30cmである。

チョコ、ローム層の上位には、豊富バーミス層と呼ばれる浮石層が70~100cmの厚さで露出しており、全体に灰白色を呈するが、チョコ、ロームとの界面には、乳白色の浮石(Pumice)層が見られる。

地形的には、扇状地状の形態を呈しているが、これを構成している崖錐性砂礫層は、分級が悪く、粘質化を呈しているため、地下水を賦存する地質条件ではない。(企画管理局開発計画班 和田技師)

第二章 調査の経過

東八代横断広域農道を建設するために、今までに記録保存を行った発掘調査場所は八ヶ所である。このうち、遺構・遺物が検出された遺跡は、東八代郡一宮町木本の車地蔵遺跡（43年度、国分寺）同郡境川村藤塙の辻・蔵在家遺跡（47年度、中期縄文住居址等曾利主体・土師住居址=鬼高）、同郡境川村小山の京原遺跡（48年度、土師住居址=五領）、同郡一宮町国分の築地一号墳（48年度後期）がある。⁽¹⁾村上遺跡がある中道町と隣接村でこれ以外に発掘した遺跡は中道町下向山の米倉山遺跡（42年度、早期縄文等）、境川村原の八乙女塚古墳（43年度、前期）、中道町右左口の城越遺跡（43年度、中期縄文=曾利敷石住居址）、⁽²⁾中道町右左口の上の原遺跡（45・6年度、中期縄文=藤内・井戸尻・曾利）や中道町下向山の大丸山古墳（46年度、前期）などがある。

本県では八ヶ岳・茅ヶ岳とともに考古学的に明治時代から注目されてきた甲府盆地東部であったため、本県としては発掘調査も多く行なわれた地域である。

今回行った村上遺跡発掘調査は九ヶ所目である。中道町地内のこの建設予定地決定が遅れており、決定後も地権者との売買契約が進まなかったようであるが、十月になって急にこれが進行し、工事をしたいとの旨、県耕地課の出先機関である県土地改良事務所から連絡があったので、急撫発掘することにしたものである。

10月29日文化課職員山崎金夫と筆者で現地踏査を行い、表探をして、試掘箇所を選定したのである。とりあえず11月24日と25日に1m×7mのトレントで遺構がありそうな箇所を試掘した。有料道路甲府精進湖線と滝戸川との間に12ヶ所、滝戸川と本遺跡との間に2ヶ所掘り、本遺跡には六ヶ所を掘った。精進湖線と滝戸川との間は、曾根丘陵上にある典型的な小さな緩い馬の背状台地であって、谷との比高は2~5m、巾は20~30mである。ここには遺構は全く認められず、遺物は中期縄文式土器破片2片、土師質土器破片3片が出上しただけである。層序は精進湖線に近い地域（西方）では耕土が30~40cm、その下に黒褐色土が20~30cmあり、その下はソフトローム層であった。滝戸川に近い地域（東方）では耕土が20~30cmで、その下はハードローム層であった。滝戸川より東にはほとんど土器の分布はみられなかつたが、トレントを掘ったところ、遺物や遺構と思われる箇所が検出されたので改めて本発掘をすることにしたのである。

本遺跡の発掘は昭和51年11月30日から12月14日まで日曜日を除いて、13日間行い、中期縄文時代の住居址2軒と平安時代末の住居址1軒及び集石遺構を検出した。

初日、2月30日にトレントを拡張し遺構と思われる落込み（J1住居址、H1住居址）を検出し、藤内式前半期の土器片が出土した。12月1日からグリッドに切り替え、遺構の掘り下げ作業を行い始めたところ、A2・A3グリッドで耕作上の直下にある黒色土-30cmくらいの層から、中期縄文式土器片が多量に出土しはじめた。これは間もなく住居址であることが判明したので、続けて記録をとりながら発掘したのであるが、A1とB1グリッドに見えていた落込みは何の遺構であるか不明であった。これは後でも遺物が発見されなかつたので、平安時代の住居址であることが判ったのは、発掘期間の中頃であった。J1住居址は12月3日に発掘を終了し、記録をとったのだが、柱穴らしいものは1ヶしか検出出来なかつた。後でJ2件の状況と比較して、柱穴はない判断した。

平安時代の住居址は12月4日から9日までの間に掘り下げた。その深さは56cmで比較的深く、床面

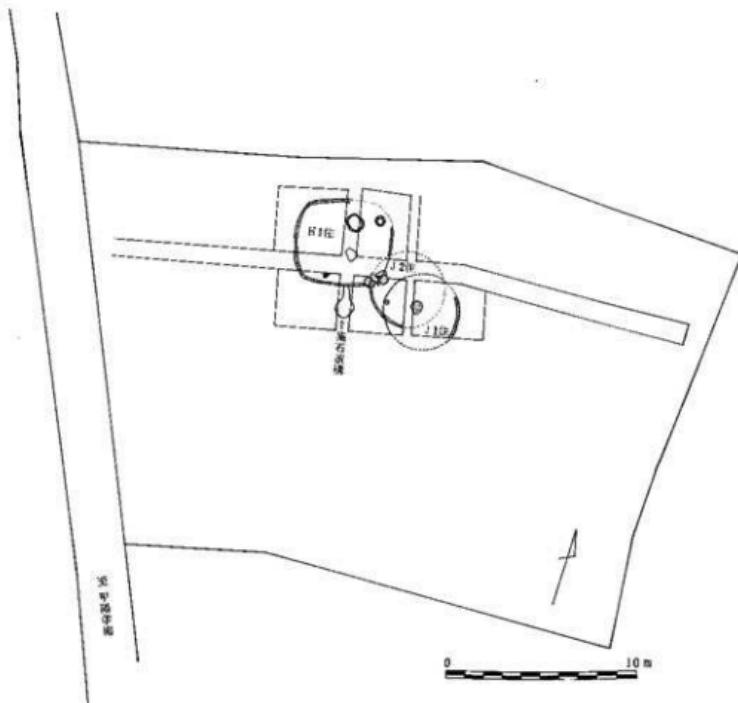
は軟弱であった。9日に住居址中央で、床面に露出しているグリーンタフを検出した。住居址の東側に石組のカマド、西側に貯蔵用と思われるピットを2ヶ検出した。遺物は灰陶陶器・須恵器・土師器が少量出土した。

中期縄文時代の2住居址（J2住）は、12月9日より14日までの間に掘り下げた。住居址は御方があり、柱穴は検出出来ず、炉石は一部が取り去られ、一部が散乱していた。土器は投げ込まれた状態で大量に出土し、石器も12ヶ土器に混入して出土した。11日と12日に、下層から人形陶形土器片の胸部分と13日に土偶頭部1ヶも検出した。なお、この住居址は予定路線の外に統くため、完掘出来なかった。前記以外に円型集石遺構及び、若干の中期縄文式土器が発見出来た。12月21日に村上遺跡の範囲と性格を調査するため遺物を表面採集し、縄文式土器、土師器及び中世陶器を得た。

遺物洗浄、遺物実測、拓本、遺物撮影は52年春に行った。

第三章 調査地区の層序・遺構・遺物

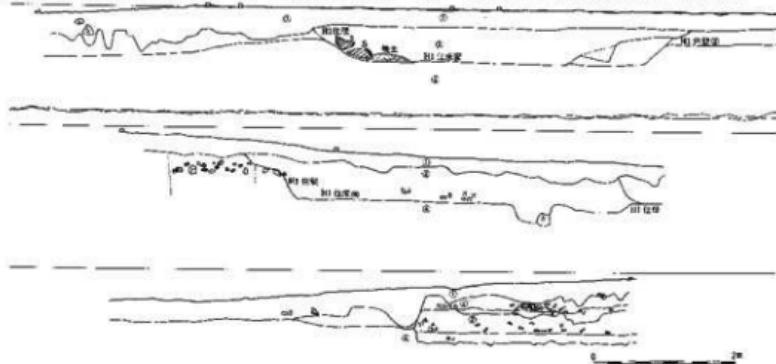
1. 調査地区の層序



插図9 村上遺跡発掘遺構全測図

基本層序は上から、①耕土（小砾が若干混入した黒褐色土）、③ロームの二次堆積土（黒色土が少し混入した褐色土＝二次堆積土の漸移層）で遺物包含層、④グリーンタフを含む地山漸移層（地山）である。②は住居址の覆土（上部に小砾が少し、混入し、下部に小さなロームブロックを含む黒色土）である。

縄文時代・平安時代の住居址は③と④を掘り込んでいる。地表と④地山層との間は浅いところで25cmくらいであるので、前述したように耕作によって、遺構が著しく破壊されている箇所もある。③の遺物包含層に遺構があり、その中の土層、層序は、土質・色調等甚しく区分が困難であった。



挿図10 東西セクション

- ①耕 土 小砾が若干混入した黒褐色土
- ②耕土漸移層 ①の中にわずかに小ロームブロックが混入
- ③黒 色 土 小砾若干混入ロームブロックが点々と混入
- ④地山漸移層 漸移層褐色土に黒色土が混入(木の根が腐蝕したため)
- ⑤地 山 褐色はグリーンタフが多量に混入

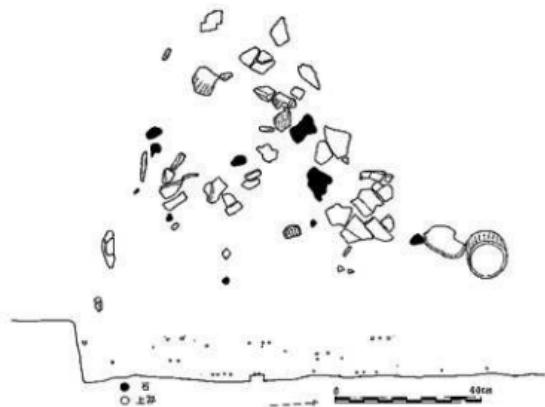
2. 縄文時代中期の遺構・遺物

第1号住居址（J1住）

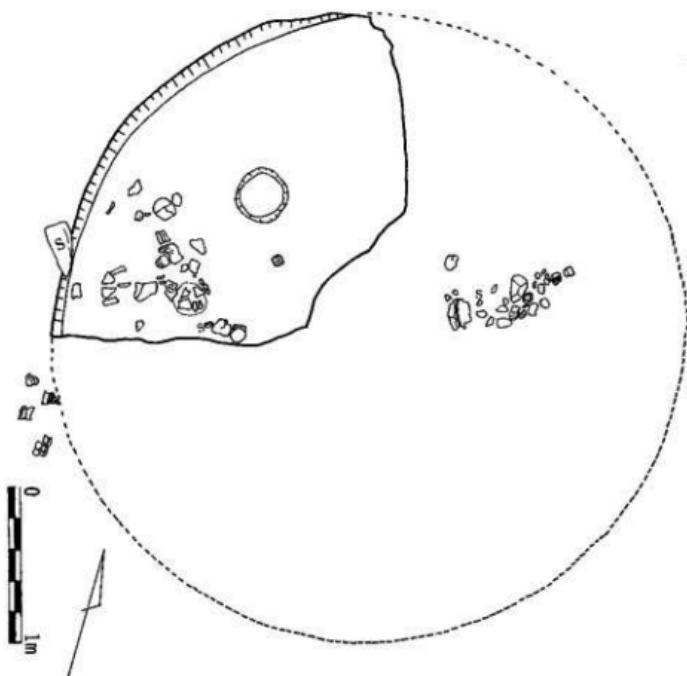
J2住より約32cm上に重複して、構築されていた。床面が地表下平均35cmと浅かったため、遺構の遺存状況が悪かった。床面はすこし残っていず、炉址も破壊されてなかった。

その残存部でこの遺構を推定すると次のようである。住居形態は円形の堅穴で、深さは8cmくらいだったが、壁の上部が耕作によって破壊されたものと思われるので原型をとどめていないと思われる。床面の直径は約400cmであったから、床面積は12.6m²となる。円筒形ピットが一ヶあり、直径35cm深さ54cmであったから、法量は26.5m³であったが、使用目的は判定出来なかった。壁は前記のように遺存状況が悪く、確実な測定が出来なかったが、法^{のり}があった。床面は軟弱で、それを検出し難かしかった。層位は、耕土の直下にある黒褐色土（第1層）の中に住居址があったため、その断面が非常に見分けにくく、壁や床面を確定するに困難であった。従って、第1号住居址全体が不明確なものであった。遺物の出土状況は第11図・第12図の平面図、図版4と第10図セクション図に示した。土器は集中的に出土し、床面に近いグループとそれより7~8cm高いグループとに分けることができる。また残っていた床面から離れて、土器・石器が集中していた箇所もあった。吹上バターンとは違った感がある。

この住居址が使用された時期は後述するように、井戸尻期前半と見られる。柱穴らしきものが第2号住居址と同様に、どうしても発見出来なかったことや、比較的小さい形態であったことなどに、この住居址の性格がある程度表われているように思われる。



挿図11 J 1 住居細図



挿図12 J 1 住居址平面図

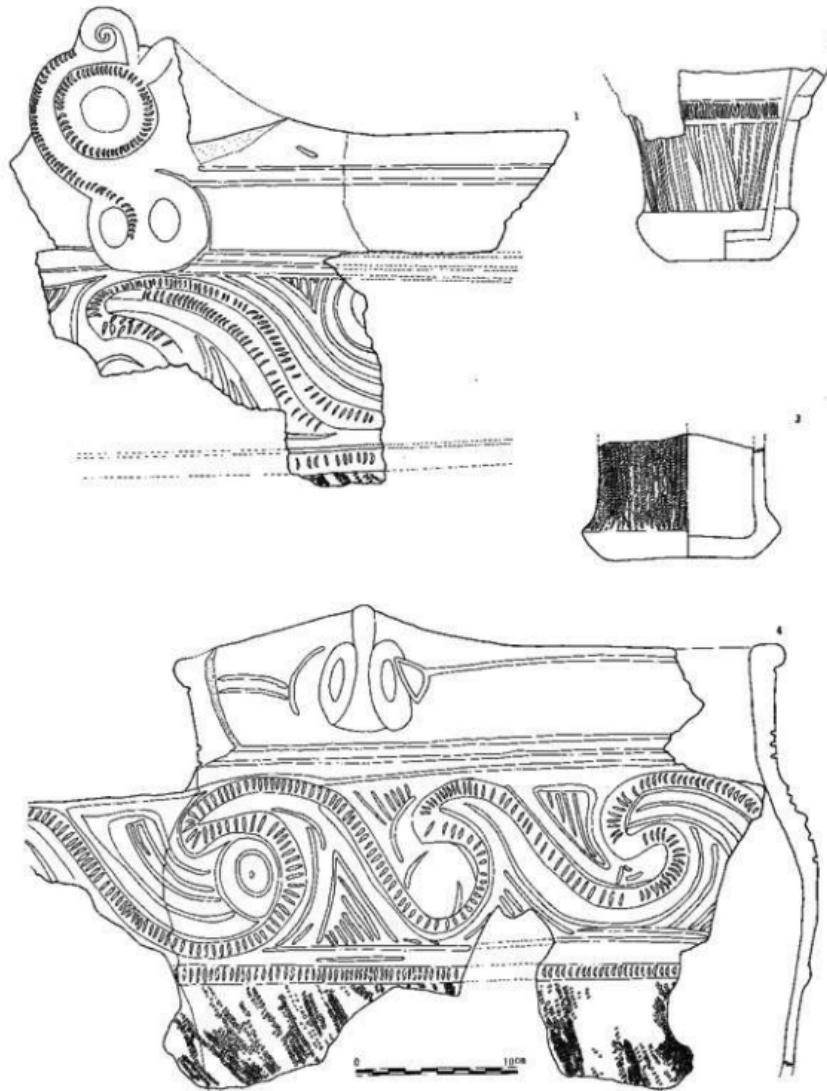


插图13 J-1 住居址出土土器実測図 (1, 2, 3, 4 (床面直上))

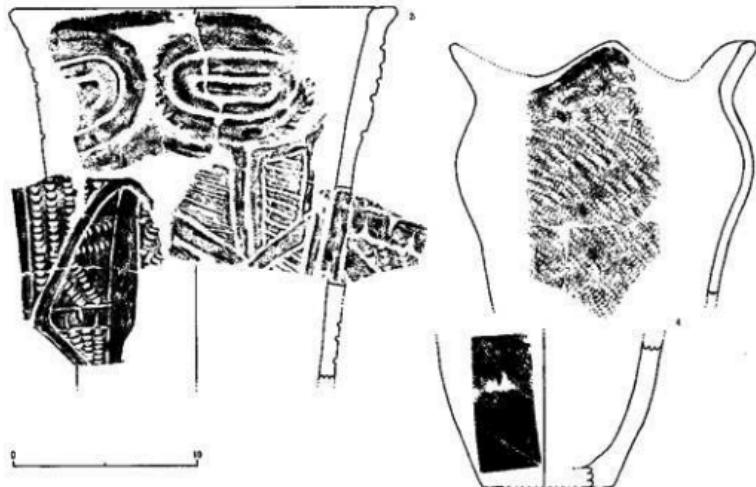


插圖14 J 1 住居址床面直上土器拓影

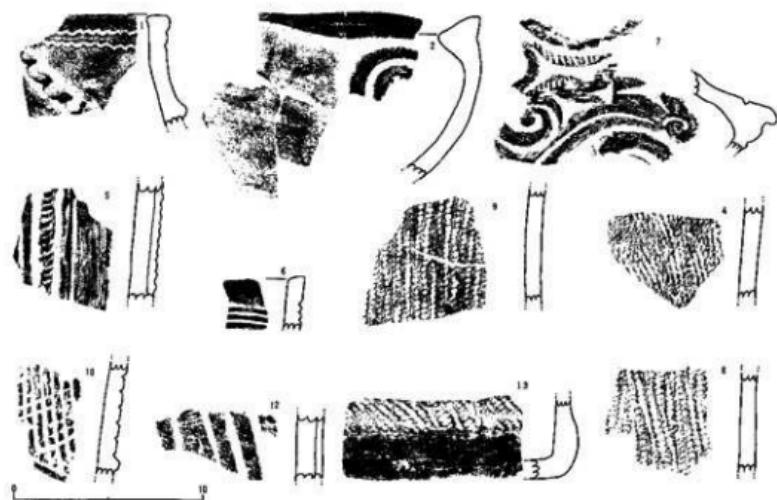


插圖15 J 1 住居址床面直上出上土器

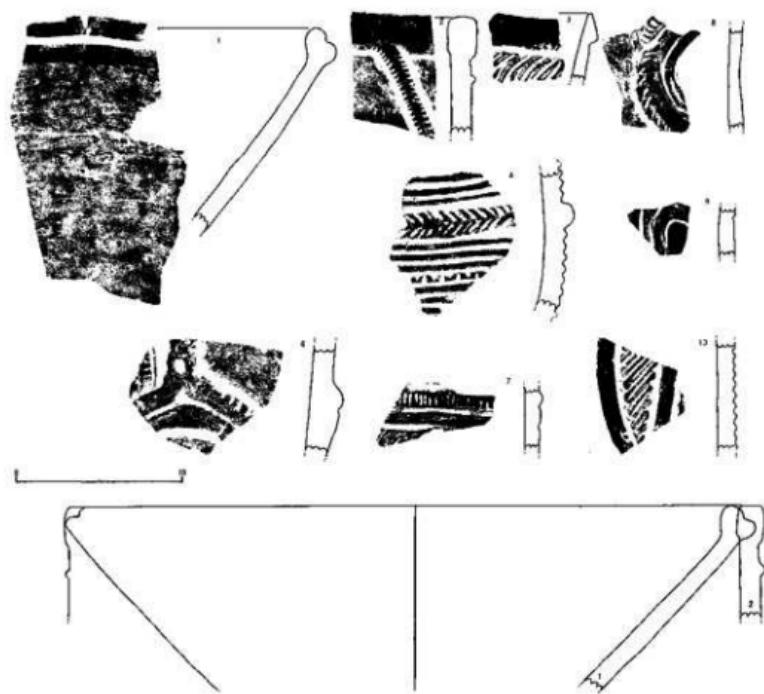


插图16 J 1 住居址床面直上出土器

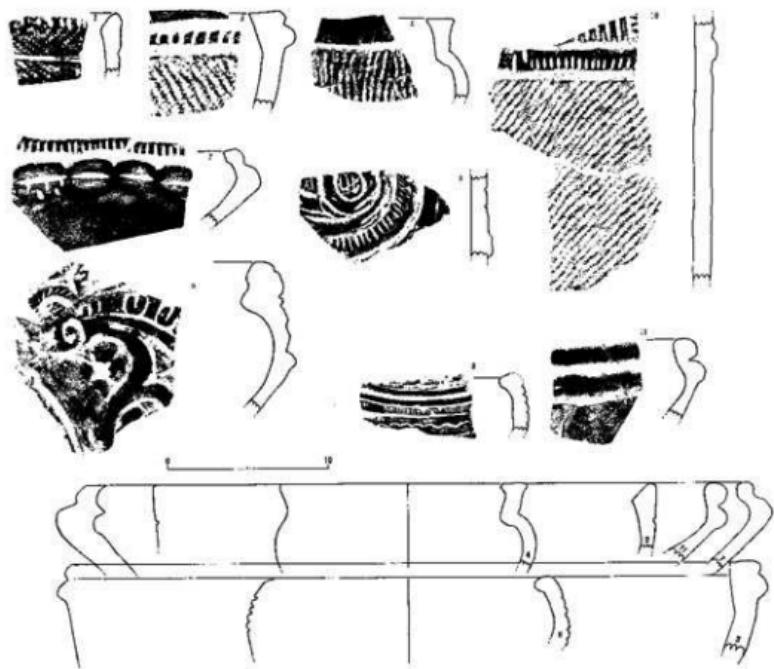


插圖17 J 1 住居址床面直上出土土器

擇図 13 の説明

番号	出土地点	部分	色調	胎土	器壁	器厚
1	J-1住居址床 面直上					
2	"	表下部	褐色	胴部に精製土、底部は 石英、白雲母を含む	内面に炭火物付着	9mm
3	"	鉢・底部	"	白雲母等の砂粒を含む	内面に(草の)織縫痕 あり	8mm
4	"	上半部	緑 直 絆 30cm	褐色、白雲母等を含む	内面口唇部、ヘラで研磨。内面下部に炭火物付着	口縁部 1.4cm 胸部 9mm

擇図 15 の説明

番号	出土地点	部分	色調	胎土	器壁	器厚
1		口縁部 内側直 径10cm	褐色	砂粒が混入、やや堅緻	外面に煤が付着	1cm
2		口縁部 内側直 約30cm	黒褐色	白雲母等を含む	内側口唇部をヘラで研磨	"
5		胴部	褐色	普通	内面に炭化物が付着	"
6		口縁部	"	精製土	外面に煤の付着か、黒色の塗料か	6mm
7		口縁裝 飾	"	多量の砂粒を含む		
8		胴部	暗褐色	細かい胎土	内面を草状物で研磨、表面滑らか、やや堅緻	8mm
9		"	褐色	普通	内面はざらざらしてい る	"
10		"	"	"	外面に煤付着	9mm
11		"	赤褐色	多量の白雲母、石英等 を含む	内面に炭化物付着	1.2cm
12		底部	褐色	砂粒を含む	普通	1cm

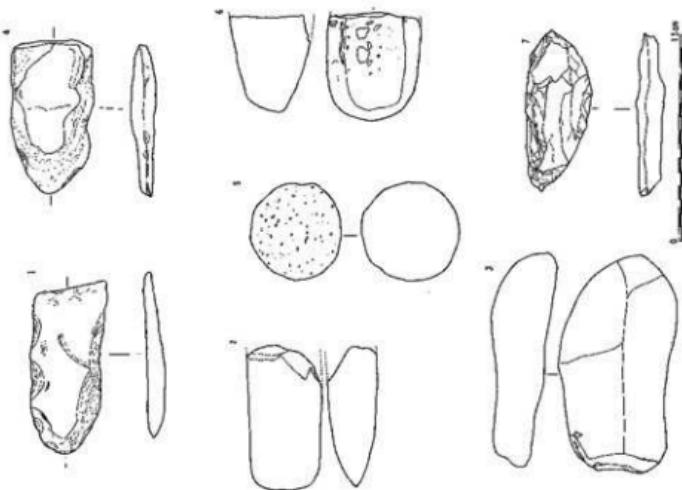
擇図 16 の説明

番号	出土地点	部分	色調	胎土	器壁	器厚
1	J-1住居址床 面直上	口縁部 内側直 径36cm	褐色	白雲母等を含む	外面に擦痕が多くある 内面にヘラ研磨あり	1.1cm
2	"	口縁部 内側直 径40cm (円塔 式土器 のもの)	"	砂粒を多量に含む、 堅緻	内面はヘラで研磨	1.3cm

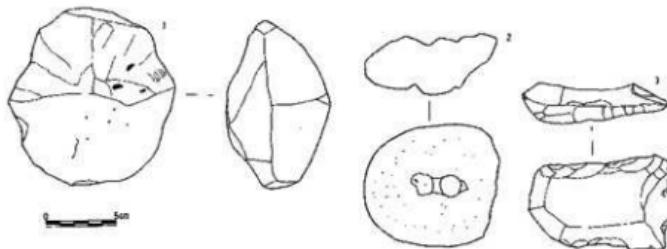
番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
3	J-1住居址床	口縁部	暗褐色	精製土か、堅緻	口唇部を研磨	8 mm
4	"	胴 部	褐 色	多量に細かい白雲母を含む	普通	1.3 cm
6	"	"	"	白雲母、石英等を含む もろい	"	1.2 cm
7	"	"	"	白雲母、石英等を含む 多孔質	"	8 mm
8.9	"	"	暗褐色	精製土、やや堅緻	外面を研磨	"
10	"	"	赤褐色	白雲母等を含む	"	1 cm

捕 図 14・17 の 説 明

番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
2	J-1住居址床 面直上	口縁部 内側直 径30cm 口唇部 に縁取	褐 色	細かい石英、白雲母、 黒雲母等を含む	外面に煤付着	8 mm
3	"	口縁部 内側直 径40cm	"	白雲母等を多量に含む	口唇部をヘラで研磨、 外面に少し煤付着	1.2 cm
4	"	口縁部 内側直 径11cm	"	精製土か	口唇部をヘラで研磨、 口唇部に縁取あり	7 mm
5	"	口縁部 裝飾	暗褐色	白雲母、砂鉄等を含む	普通	1 cm
7	"	口縁部 内側直 径40cm	褐 色	白雲母等を含む	内外面ともよく研磨	"
8	"	口縁部 内側直 径16cm	"	白雲母等を少し含む、 やや堅緻	内側を研磨	9 mm
9	"	胴 部	"	普通	普通	1 cm
10	"	"	"	多量に細かい白雲母、 砂鉄等を含む	外面に少し煤が付着	1.2 cm
11	"	口縁部 内側直 径36cm	"	黒雲母を多量に含む	よく内外とも研磨、外 側口唇部に煤が付着	1 cm



挿図18 J 1 住居址 出土石器実測図
1, 4, 6 (床面直上)
2, 3, 5, 7 (覆土)

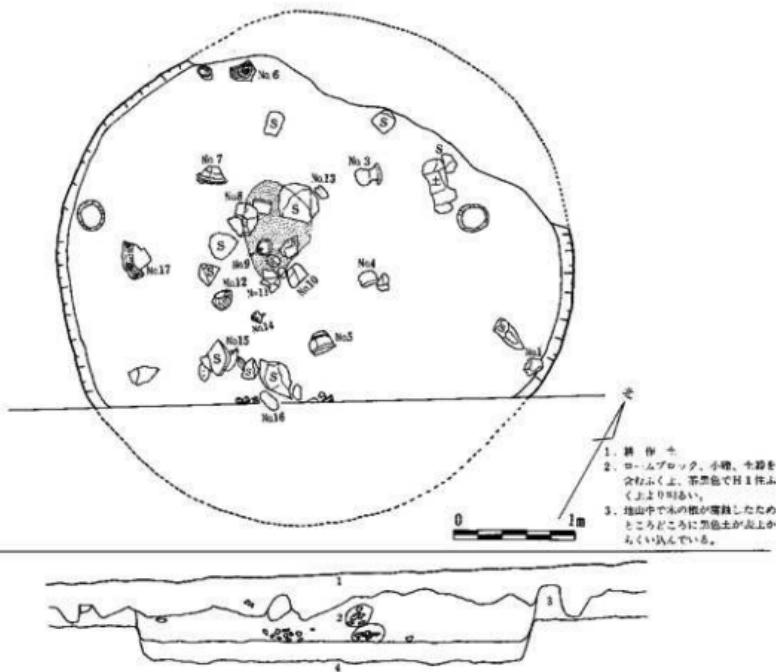


挿図19 J 1 住居址 覆土出土石器実測図 1, 3 グリーンタフ

第2号住居址（J 2 住）

J 1 住より約32cm下に重複して、構築されていた。北側の一部が耕作によって破壊され、南側の一部は道路敷地予定外に出ていたので、面積にして約その半分しか発掘出来なかった。検出したプランの遺存状況、遺物の残存状況はやや良好であったといえるのである。

その検出できたプランで、この遺構を推定すると次のようである。住居形態は円形の竪穴で、深さは45cmであるが竪の上部が耕作によって破壊されていたとも考えられる。床面の直径は約410cmであったから、床面積は 13.2m^2 となる。床面の下には深さ約15cmの掘方があり、その土質はJ 2 住の覆土と類似していた。床面は軟弱で、それを確定し難かった。柱穴などのピットはなく、あったのは上のJ 1 住から穿たれたピットだけであった。床面が軟弱だったので、注意深く精査し、掘方の土を除去し、地山面に掘込があるかどうかを調査したにもかかわらず、検出できなかったところから、この住



挿図20 J 2 住居址 遺物出土状況平面図

居址には柱穴がなかったものと考えられる。それが考えられる理由として、住居が小さいので柱穴を掘る必要がなかったことと、地山にグリーンタフの大小の礫があって掘り込めなかつたことが考えられる。実際に地山は礫が混入していて、掘り込める状態ではなかつた。炉石は原位置ではなく、抜かれて二ヶばかりあり、焼土が東西55cm・南北85cmの広さで堆積しており、その一部分が地山まで続いて堆積していた。壁は茶黒色の腐触上が25cmくらいと、その下の地山が35cmくらいであった。

層位はJ 1住と重複しているため非常に分けにくかつた。遺物の出土状況は第20図の平面図・図版4と第10図のセクション図に示した。出土量は多く、層位的にも規則性はなかつた。この中からソケット(嵌入式)型土偶頭部や人体文壺型土器が床面近くから出土した。

この住居址が使用された時期は後述するように、森内期とみられる。この住居址の性格を考える材料として、型態が小形であること、柱穴がないこと、覆土下層に土偶頭部・人体文壺型土器があつた

ことなどが上げられる。

小括 前述二基の縄文時代中期の住居址は茶黒色土の中で重複していたため層位的にも、平面的にも、非常に分けにくく、しかも J 1 住はその上しか床面が遺存していなかったので、重複状況がよくつかめなかった。二基の住居址が確かに重複していたのだが。

平面図では一部重複しているだけだが、その大きさや層位をみると全く重複していることも考えられる。なんとなれば、J 2 住が廃絶後、一定期間を経て、J 2 住のあった凹を利用して、再び J 1 住を構築したことも考えられるからである。また、前述したように、この地域では礫が多く、土地が非常に掘りにくいことからも、再利用したことが考えられるのである。

土器の観察点

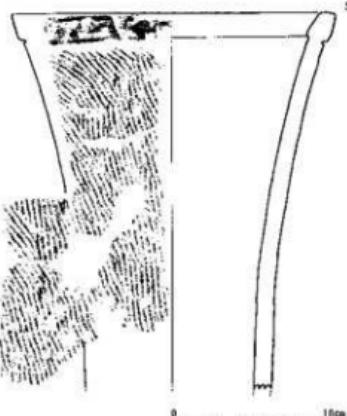
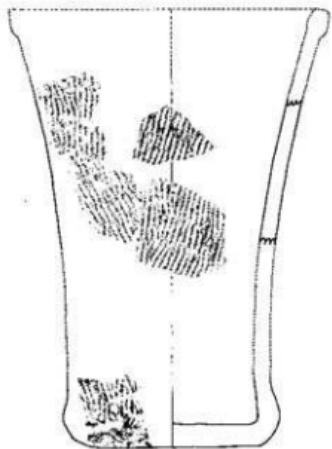
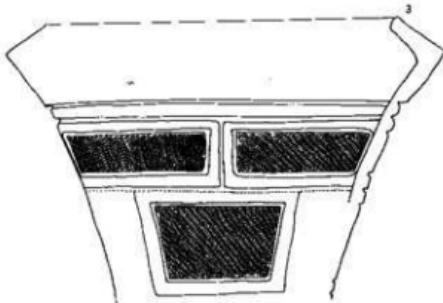
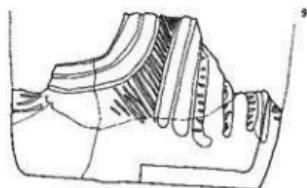
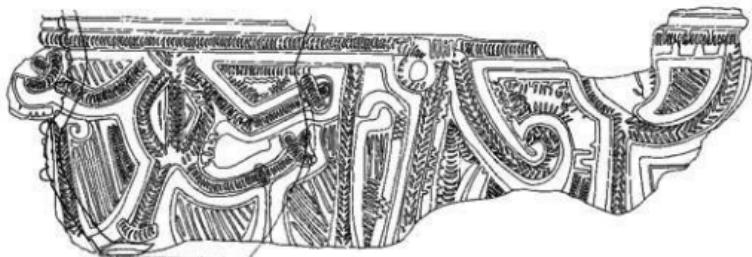
イ. 破片の部分 土器の部分名、内壁の直径、形状等について説明

ロ. 色調 内・外面の色調

ハ. 胎動土 坚さ、精製土か粗製土か、混入物の有無

ニ. 器 燐 付着物（煤、こげ付き等）の有無、塗付物の有無、研磨、ヘラ削り等の有無、使用痕の有無、二次焼成を受けているかどうか、化粧粘土の使用

ホ. 器厚 mmで表示した



挿図21 J 2 住居址出土土器実測図 3,4,5,9 (覆土下層)

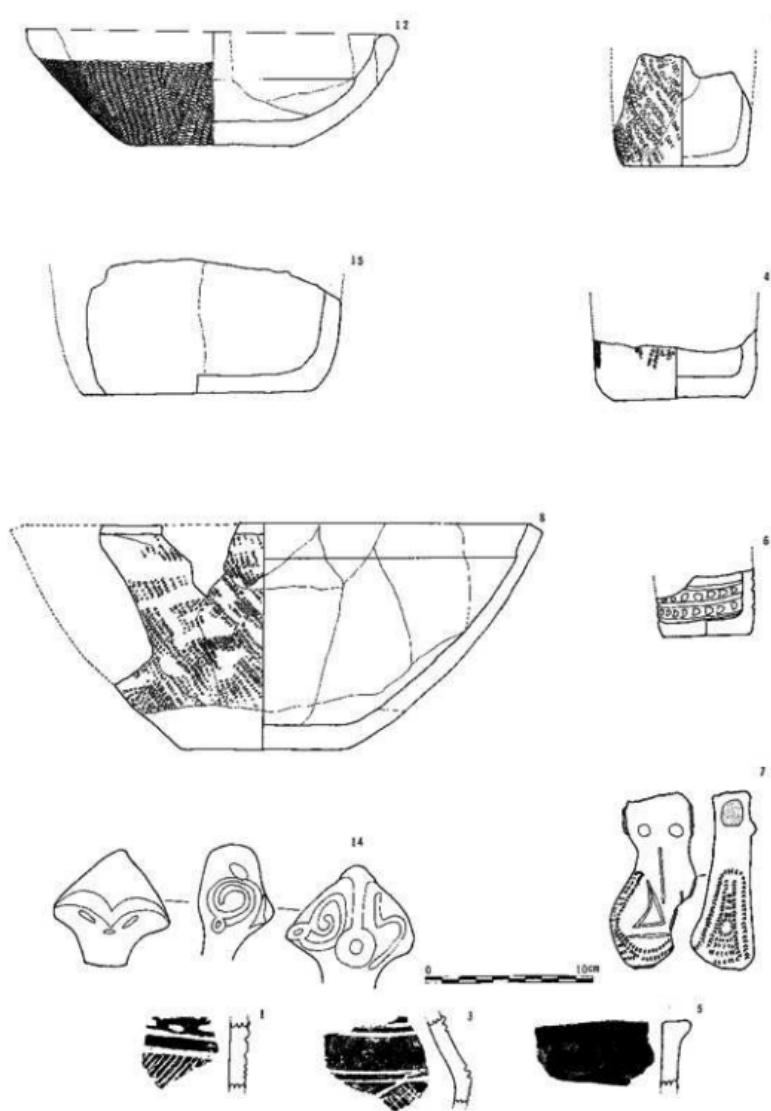


插圖22 J-2 住居址出土土器実測図・土器拓影 12,2,15,4,8,6 (覆土下層)
7,14 (床面上)

擇図21の説明

番号	出土地点	部分	色調	胎土上	器壁	器厚
1	J-2住居址			化粧粘土を使用。白雲母等を少し含む。	普通	9 mm
9	J-2住居址覆土下層	裏底部	赤褐色	もろく、底部の内面黒く炭化物付着あり		普通
3	"	蓋上部	"	石英、白雲母等を含む		1 cm
4	"	胴部底 部	褐色	大きい石英、白雲母等の砂粒を含む、もろい	内面底部に炭化物付着	"
5	"	上部	"	石英、白雲母等を含む	内外面が縁取りされていて、指頭でなでられている。内面下半分多量の炭化物を含む、外面上半部に煤が付着	"

擇図22の説明

番号	出土地点	部分	色調	胎土	器壁	器厚
1	J-2住居址覆土下層	胴部	褐色	細かい粒子	内面黒色、継ぎ目で調整痕あり	1 cm
2	"	裏底部	"	普通		普通
3	"	口縁部 内側直 径16cm による)	黒色(環 元炎による)	黒雲母を含む精製土に 少し大きい砂粒を含む	外面に少し煤付着	1 cm
4	"	裏底部	褐色	もろい白雲母少々混入	炭化物の付着	普通
5	"	頭部	"	やや堅微		9 mm
6	"	裏底部	"	普通、白雲母混入		普通
7	J-2住居址床 面直下	土偶胴部	灰褐色 裏は黒褐色	精製土	胴部に粘土の芯が入っている	
8	J-2住居址覆土下層	約半分 が欠損 した浅鉢	褐色	白雲母等の砂粒を含む	内面はヘラで研磨	1 cm
12	J-2住居址覆土下層	浅鉢	赤褐色 内面焼成時に 黒くなつた	普通、白雲母と砂粒 が混入	ヘラ研磨あり	胴部 1.5cm 厚手、 一部欠損
14	J-2住居址床 面直下	土偶頭部	表、黒色(環 元炎による) 裏褐色	精製土に細かい黒雲母を含む	上部に穴があいている 裏は粘土紐を使用	
15	J-2住居址覆土下層	裏底部	褐色	もろい、白雲母を少々混入		普通

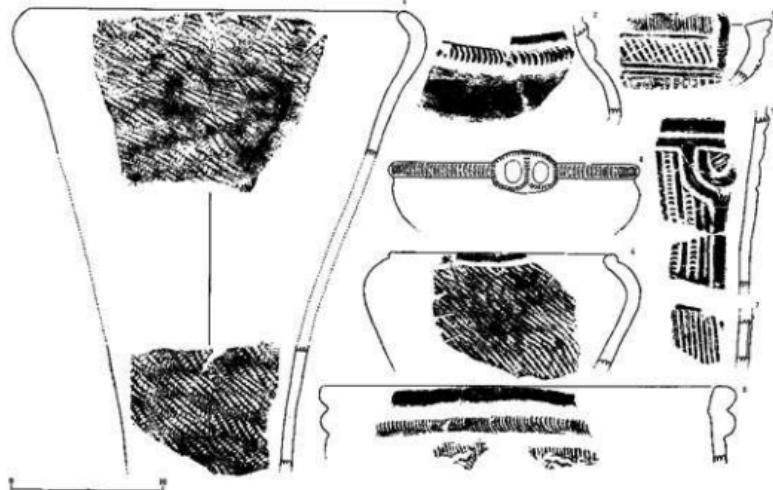


插圖23 J 2 住居址 覆土下層出土土器拓影

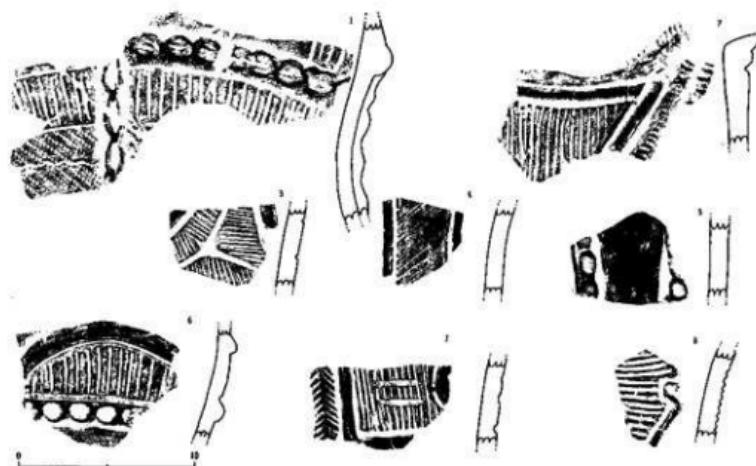


插圖24 J 2 住居址 覆土下層出土土器拓影

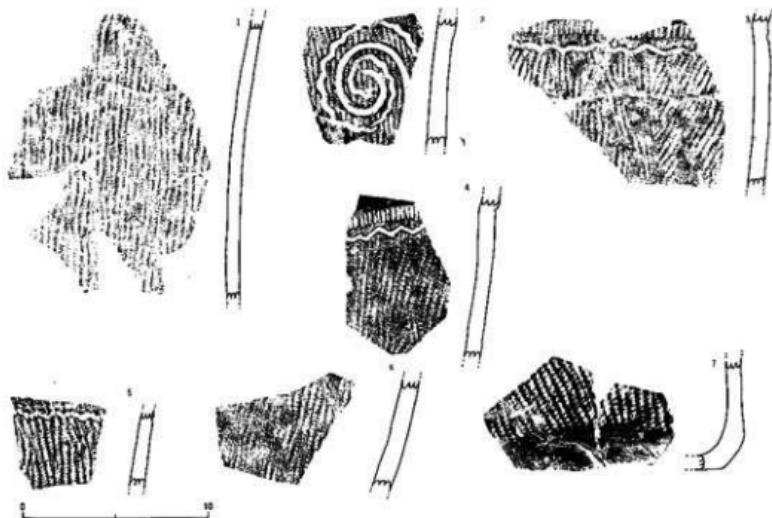


插图25 J 2 住居址覆土下层出土器拓影

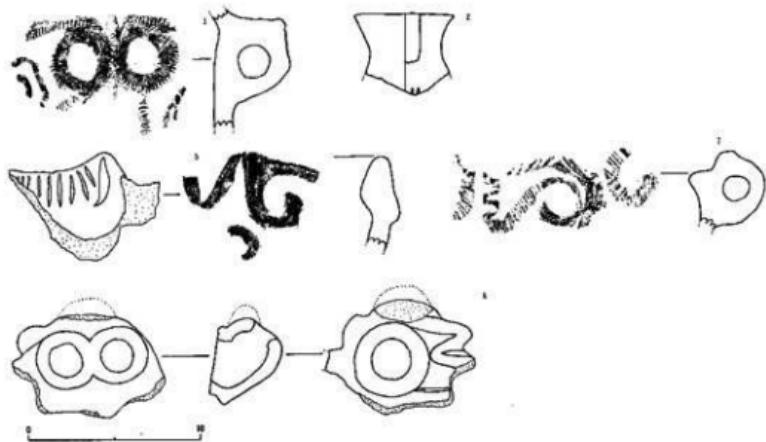


插图26 J 2 住居址覆土下层出土上层器拓影

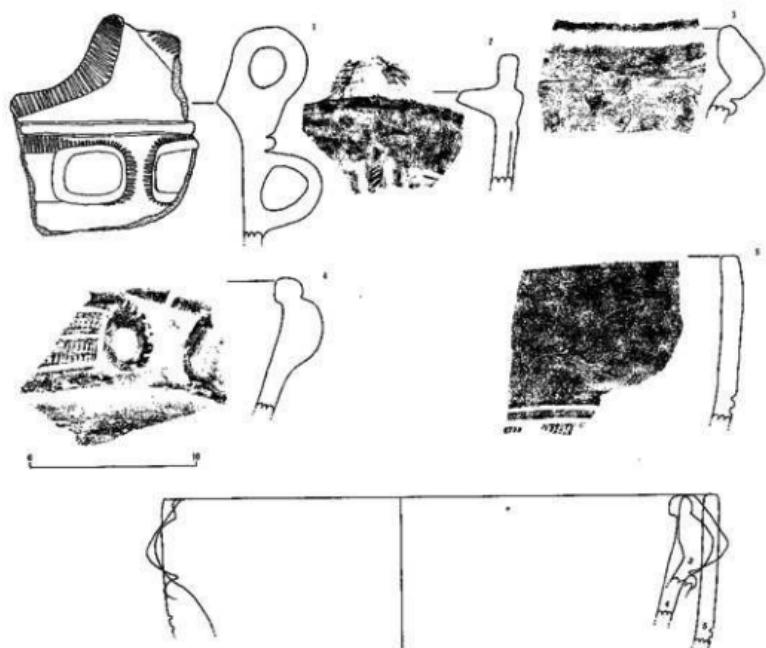


插图27 J-2 住居址 瓦土下层出土土器拓影

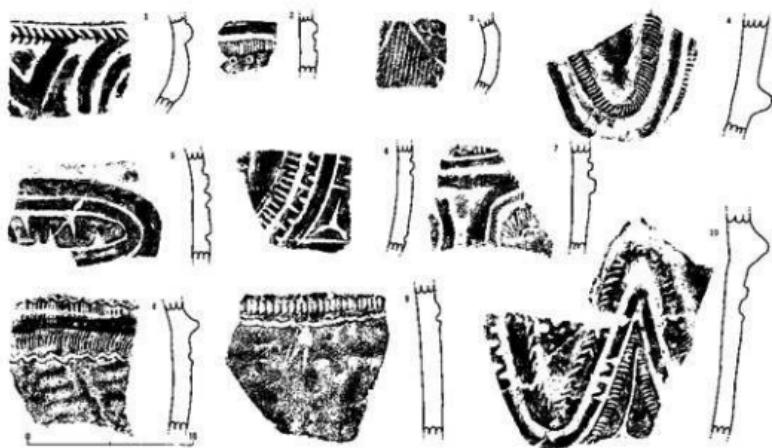


插圖28 J 2 住居址 覆土下層出土土器拓影

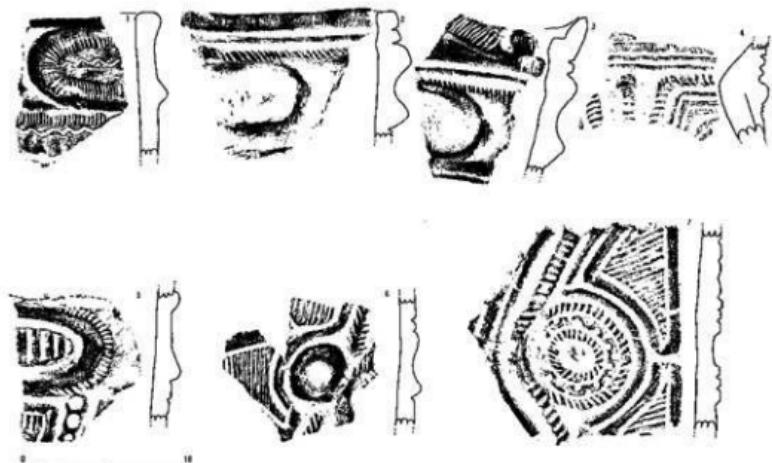


插圖29 J 2 住居址 覆土下層出土土器拓影

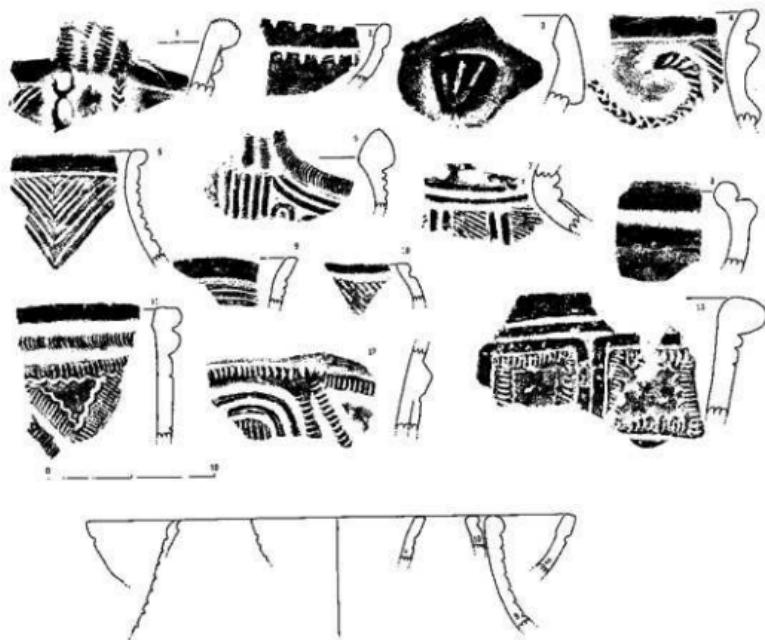


插图30 J 2 住居址 覆土下层出土土器拓影

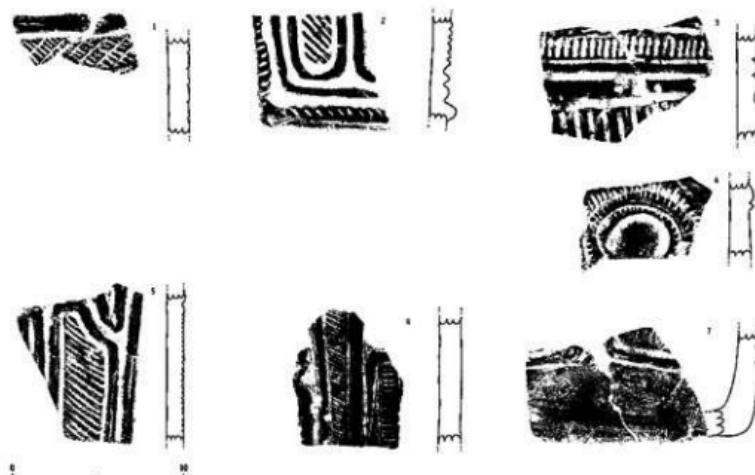


插图31 J 2 住居址 覆土上下层出土土器拓影

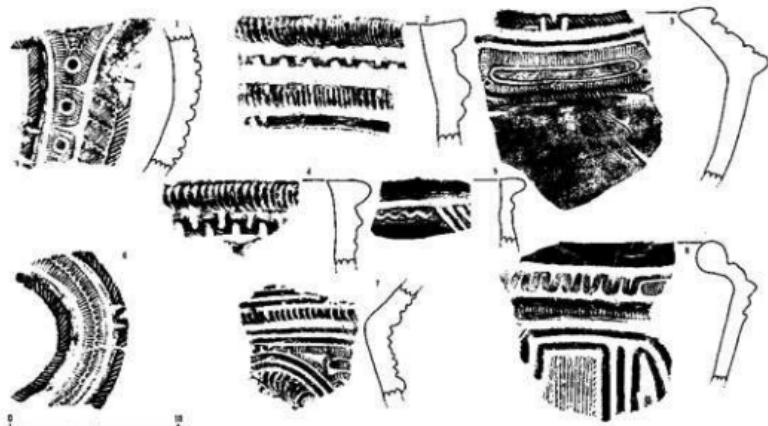


插圖32 J 2 住居址 覆土上層出土土器拓影

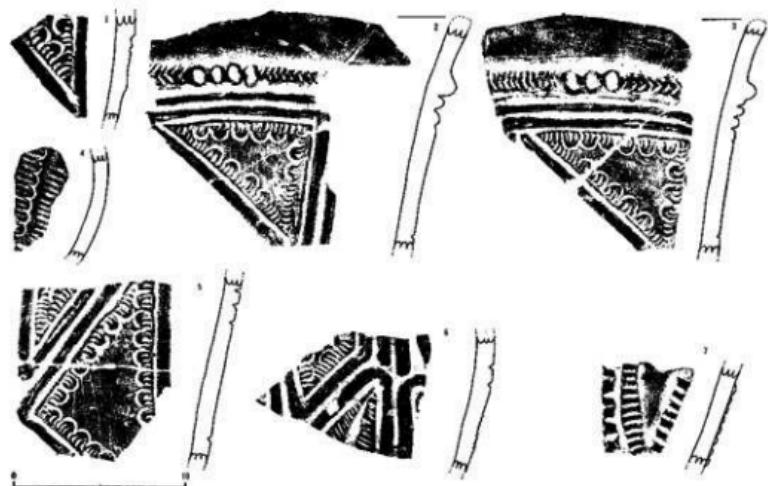
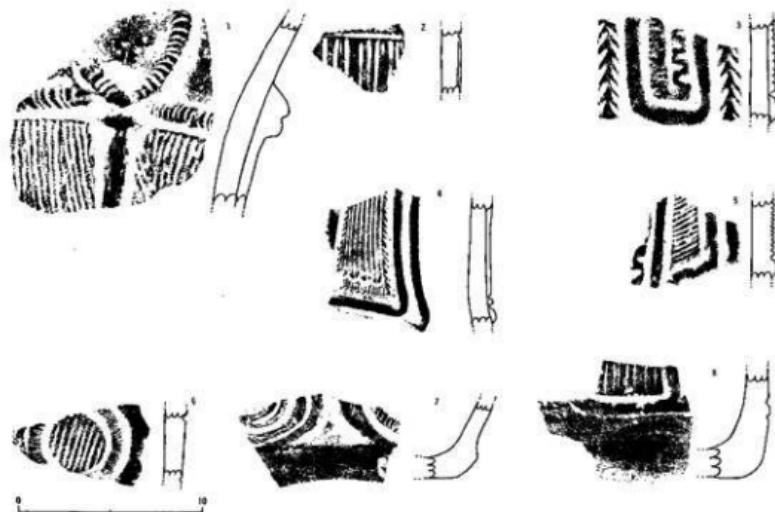
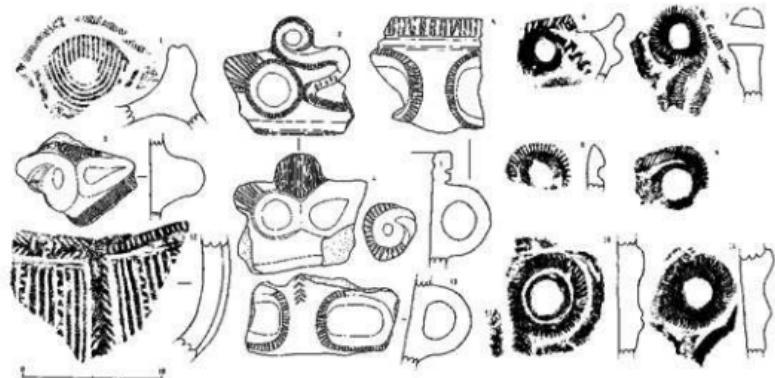


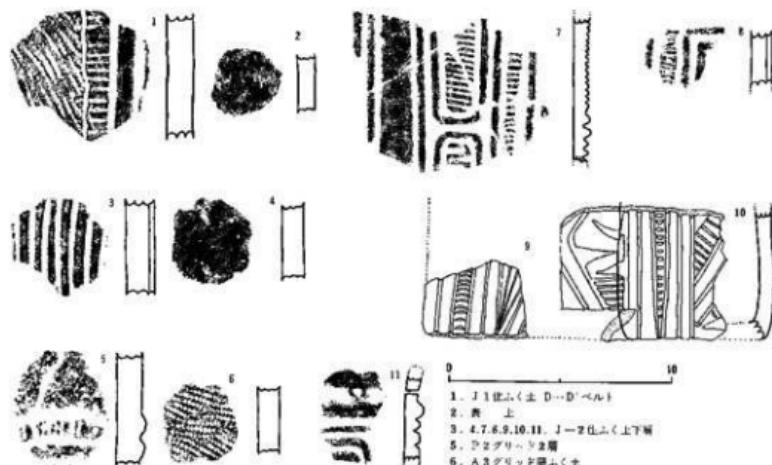
插圖33 J 2 住居址 覆土下層出土上器拓影



挿図34 J-2 住居址 覆土上層出土土器拓影



挿図35 J-2 住居址 覆土上層出土土器拓影



挿図36 J 2 住居址 覆土下層他出土土器拓影

挿図 23 の 説 明

番号	出上地點	部分	色調	胎 土	器 壁	器 厚
11 A-1 4	B-1、11A、 8A	口縁部 側部内 側口縁 直径24cm	明褐色	精製土に少し細い砂粒 が混入	口唇部に磨耗痕あり (使用痕)	9mm
11 A-3	"	口縁部 約15cm	褐色、 処々に 煤が付 着	細かい雲母、砂鉄等の 粒子を含む、ざらざら している	内面をヘラで研磨	7mm
8 A-1	"	口縁部 直径10cm	褐色	少し黒雲母等を含む		"
18 A-2	"	口縁部 に近い 部分	黒褐色	白雲母等を含む	内外面ともヘラで研磨	8mm
8 A-3	"	側 部	"	砂粒を少し含む		9mm
8 A-4	"	口縁部 内側直 径16cm	"		外表面をヘラで研磨	8mm
8 A-5	"	側 部	褐色	精製土	内面をヘラで研磨	"
8 A-7	"	口縁部直 径約26cm内 面に縫取	"	白雲母等を含む	外表面に煤が付着、内面 をヘラで研磨	9mm

擲 図 24 の 説 明

番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
1	J-2住居址覆土下層	口縁部に近い部分	褐色	やや堅緻、表面滑らか		8mm
2	"	口縁部	"	普通、白雲母等を含む	外面に煤が付着	1cm
3	"	胴 部	"	普通	普通	9mm
4.5	"	"	"	内外とも黒褐色	白雲母等を含む	1cm
6	"	"	"	精製土		8mm
7	"	"	黒褐色	砂粒を含む	内面をヘラで研磨	1cm
8	"	"	褐色	普通	普通、内面をヘラで研磨	"

擲 図 25 の 説 明

番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
1.2.	J-2住居址覆土下層	調 部	褐色	白雲母を含む	1は、内外にすすぐ付着	7mm~9mm
4.6.	"	"	"	白雲母、石英等を多量に含む、もろい	5は、外面に煤が付着、7は、内面に煤が付着	"
3.5.						
7.						

擲 図 26 の 説 明

番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
1	J-2住居址覆土下層	口縁装飾 獸面把手 直径内側 20cm中型	黒褐色	堅緻、砂粒(白雲母等)を含む	内面はヘラで研磨	普通
2	"	把手、円筒状	褐色	普通、白雲母等を含む	草の纖維痕がついている	"
5	"	口縁装飾	"	堅緻、細かい土に大きい雲母等を混入	ヘラで研磨、表に少し煤が付着	"
6	"	獸面把手(内側無) 中型	"	精製土		"

擲 図 27 の 説 明

番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
1	J-2住居址覆土下層	口縁装飾 部約28cm	褐色	普通	内面をヘラで調整	1cm
2	"	口縁部 約32cm	黒褐色	普通、大小の砂粒が混入	表はヘラで研磨	1.1cm
3	"	口縁部 35cm	茶褐色	もろい、精製土、白雲母混入	少し煤が付着	9mm
4	"	口縁部 内面縁 取34cm	赤褐色	普通	内面をヘラで研磨	1.1cm
5	"	口縁部 36cm	褐色	粒子細かい		1.2cm

播 図 28 の 説 明

番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
1	J—2 住居址覆土下層	口縁部に近い破片	褐色	やや堅緻、黒雲母を少々混入	内側、ヘラ研磨	普通
2	"	"	"	粗製土、もろい、金、白雲母を多く含む	"	"
3	"	胴部破片	黄褐色	もろい、砂粒少々混入	"	"
4	"	"	褐色	堅緻、雲母の混入	ヘラ研磨あり	"
5	"	口縁部にやや近い破片	"	やや堅緻	"	"
6	"	胴部破片	"	堅緻、白雲母が多く混入	"	"
7	"	口縁部に近い破片	"	粗製土、もろい、白雲母の混入が多い	"	"
8	"	胴部の破片	"	堅緻	"	"
9	"	口縁部に近い破片	"	堅緻、白雲母の混入少々あり	ヘラ研磨あり	"
10	"	胴部の破片	赤褐色	堅緻、白雲母の混入	"	"

播 図 29 の 説 明

番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
1	J—2 住居址覆土下層	口 縁 32cm	褐色	普通	内面をヘラで研磨	1.1cm
2	"	口 縁 20cm 口唇縁取あり	"	細かい土	"	1 cm
3	"	口 縁 22cm	黒褐色	堅 細	"	1 cm
4	"	口縁に近い部分	褐色	"	"	1.3cm
5.6	"	胴 部	"	普通	"	9 mm
7	"	"	"	雲母、砂鉄、石英を多量に含む、普通	"	1.1cm

揮図 30 の説明

番号	出土地点	部分	色調	胎、土	器壁	器厚
1	J—2住居址覆土下層	口縁装飾、内側直径22cm中型	黒褐色 焼成時の環元によると思われる	やや堅密、少し砂粒を含む	ヘラ研磨あり	普通 1cm
2	"	口縁部 直径20cm中型	褐色	普通、多量に黒雲母を含む	口唇部の内面を縁取りしてある	7mm
3	"	口縁部	"	ややもろい、白雲母、砂鉄等を含む	"	1.1cm 普通
4	"	口縁部 直径25cm	"	やや堅密	口唇部をていねいに、ヘラで研磨	1cm 普通
5	"	口縁部 直径約18cm	褐色、すすと思われるもの付着	堅密、小さい砂粒を多量に含む	表面が滑らか	9mm 普通
6	"	口縁装飾内側 直径約23cm	暗褐色	やや堅密		8mm
7	"	口縁部に邊色 に近い部分	褐色	普通	内面をヘラで研磨	1.3cm
8	"	口縁部内側 直径約35cm	"	普通、黒雲母を少し含む		"
9	"	口縁部内側 直径約10cm	"	普通、精製されていると思われ、比較的細かい粒子	少し炭化物の付着がある	8mm
10	"	口縁部内側 直径約18cm	"	普通、細かい白雲母等を多量に含む		7mm
11	"	口縁部 内側直径約25cm	"	普通、白雲母等を含む	少しそうが付着、口唇部の内面を縁取りしてある	9mm
12	"	頸部	赤褐色	堅密、粒子が細かい精製土か		8mm
13	"	口縁部 内側約37cm	明褐色	ややもろい、胎土が非常に白い、細かい砂粒を多量に含む		1.3cm

擇図31の説明

番号	出土地点	部分	色調	胎土	器壁	器厚
1	J-2住居址覆土下層	胴部	褐色	白雲母等を少し含む、もろい(精製)	ざらざらしている	1.3cm
2	"	"	"	細かい粒子で堅緻	内面に植物(草)の纖維痕がある。	1cm
3	"	胴部、大型	黒褐色	普通	普通	"
4	"	胴部	黒褐色 すすの付着か	"		1.2cm
5	"	"	褐色	白雲母を多く含む普通	内面は黒い	1cm
6	"	"	褐色、煤が付着	大きい石英などを、少し含む、やや堅緻	内面に指痕による調整痕あり	1.2cm
7	"	底部直徑12cm	褐色	普通	内面がやや黒くなっている	1.1cm

擇図32の説明

番号	出土地点	部分	色調	胎土	器壁	器厚
1	J-2住居址覆土下層 4C-27A	把手、大型	赤褐色	堅緻、白雲母少々混入	内側ヘラ研磨あり	普通
2	"	口縁部 破片内側直徑35cm	"	粗製土、白雲母を多く含む	ヘラで研磨してある	普通 1cm
3	"	口縁部 破片部直徑26	褐色	堅緻、白雲母少々混入	"	普通 9mm
4	"	口縁部 破片直徑34cm	"	粗製土、白雲母を多く含む	"	普通 1.2cm
5	"	口縁部 破片直徑32cm	"	堅緻	"	8mm
6	"	把手、中型	赤褐色	堅緻、白雲母を多く含む	内側、ヘラ研磨あり	普通
7	"	口縁部 破片	褐色	堅緻	ヘラ研磨あり	"
8	"	口縁部 破片直徑30cm	赤褐色	"	"	普通 1.1cm
1-5	"	胴部破片	"	粗製土、白雲母が多く混入 もろい		普通

挿図 33 の 説 明

番号	出土地点	部分	色調	胎 土	器 壁	器 厚
1	J-2住居址覆土下層 4C-29A	胴部破片	黒褐色	普通、黒雲母が少し混入		普通
2	"	口縁部破片	"	"		"
3	"	"	"	"		"
4	"	胴部破片	褐色	"		"
5~6	"	"	"	"		"
7	"	"	墨褐色	普通、白雲母が少し混入		"

挿図 34 の 説 明

番号	出土地点	部分	色調	胎 土	器 壁	器 厚
1. 2 5. 6	J-2住居址覆土	胴 部	褐色	普通	普通	9 mm
3	"	"	"	白雲母を多量に含む、粗製土もろい	ざらざらしている	1.2cm
4	"	"	"	白雲母等を含む、堅緻	内外とも研磨されている。表面滑らか	8 mm
7	"	底部、中型	黒褐色 環元炎の為か	細かい粒子	内外とも研磨されている	9 mm
8	"	底 部	褐色	雲母等を含む	外面の底は研磨、内面はざらざらしている	1.2cm

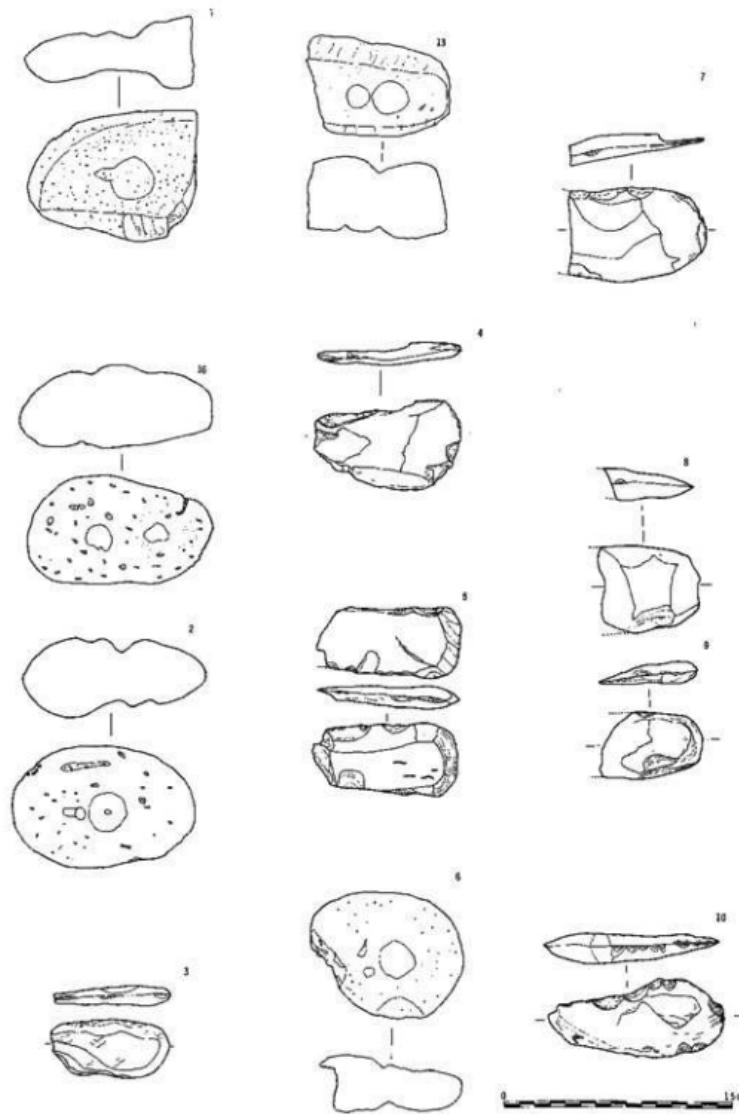
挿図 35 の 説 明

番号	出土地点	部分	色調	胎 土 上	器 壁	器 厚
3	J-2住居址覆土上層	口縁部飾部分	褐色	黒雲母等を含む		
4	"	"	"	白雲母、石英等を含む		
6	"	"	黒褐色	石英を多量に含む		
7	"	"	褐色	黒雲母、石英等を含む		
10.11	"	胴 部	"	石英、白雲母を多量に含む		1.3cm

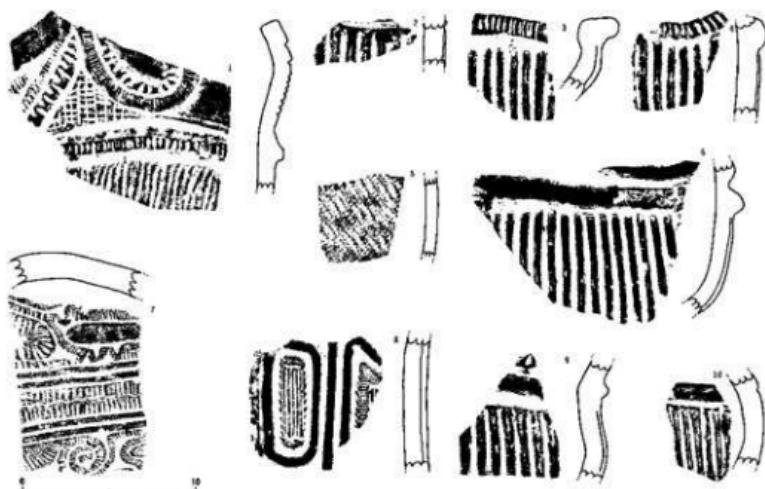
挿図 36 の 説 明

番号	出土地点	部分	色調	胎 土	器 壁	器 厚
1	J-1住居上 (D-D'ベルト中)	めんこ	赤褐色	白雲母等が混入	普通	1.1cm
2	表 土	"	黒 色	細かい粒子	環元炎のため黒くなつたか	
3	J-2覆土下層	"	暗褐色	白雲母等を含む	普通	1.3cm

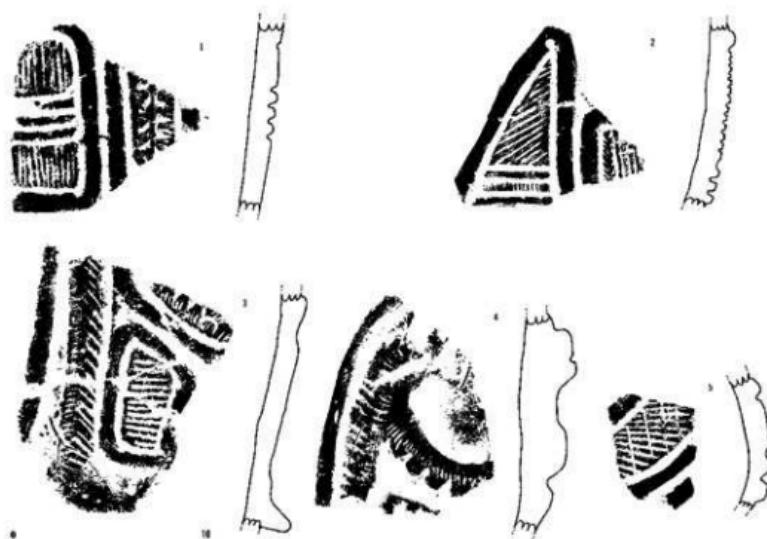
番号	出 度 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
4	J-2 下層	めんこ	褐 色	白雲母、砂鉄、石英等を含む、もろい	表面滑らか	1cm
5	D 2 グリッド 2層	"	黒褐色	白雲母、石英等を多量に含む、もろい	外面に煤が少し付着	1.1cm
6	A 3 グリッド覆土	めんこ 少し弯曲 している	褐 色	白雲母等を含む	普 通	1 cm
7	J-2 下層	胸 部	"	細かい雲母、石英、砂鉄等を含む	内面がすべすべしてい る	8 mm
9.10	"	"	外面褐色、内 面黑色	精製度にわずかに黒雲 母を含む、胎土が一部 黒い	外面はすべすべしてい る。内面は(草の)繊維 感があり、炭化物が付 着がある	"
11	"	口縁部 に近い 部分	褐 色	細かい砂粒を含む、穿 孔している	内面に少し赤色顔料が 付着、表面滑らか	7 mm



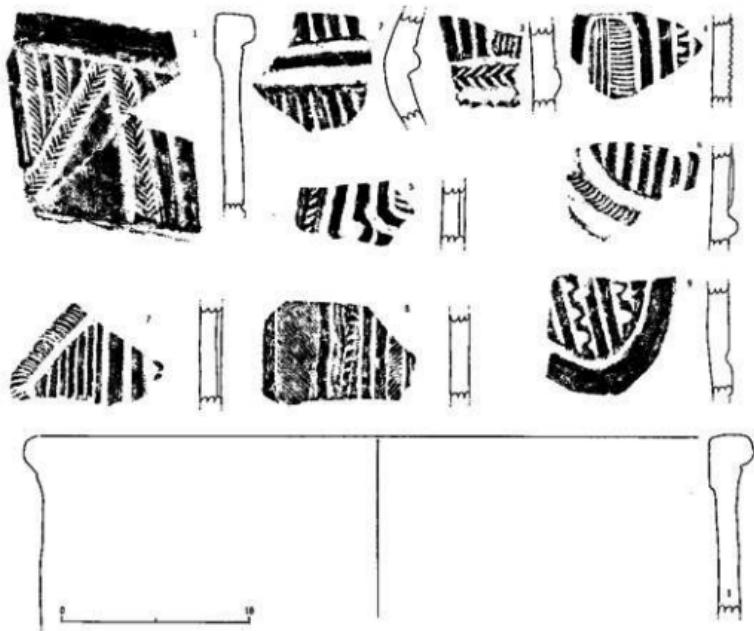
挿図37 J 2 住居址出土石器実測図 1,16,2,13,6,7,8,10 (覆上上層)
3,5,9 (覆上上層) 4 (床面直下)



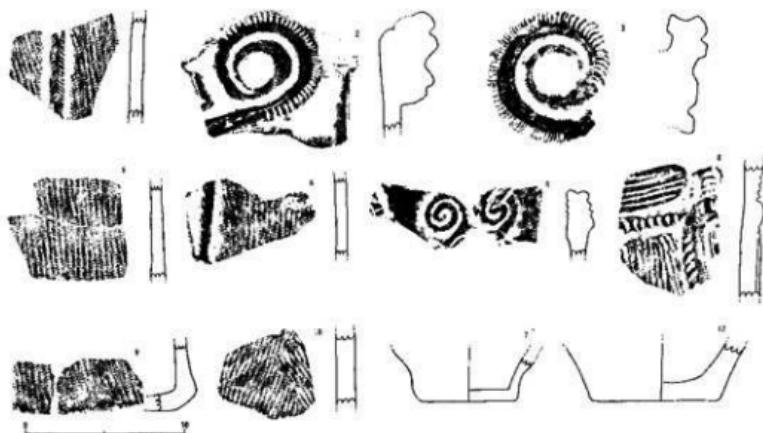
挿図38 B 3 - 29A (A 3 グリッド拡張部 J.1 J.2) 覆土出土土器拓影



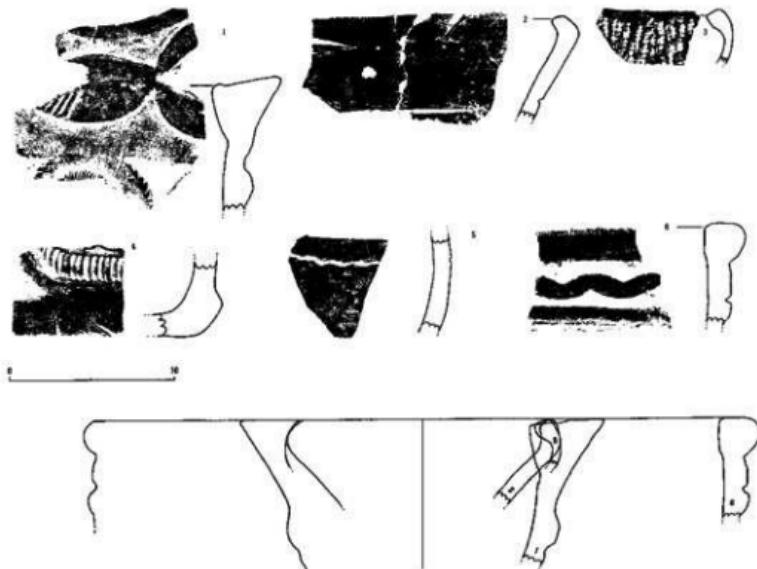
挿図39 4 C - 31A グリッド覆土出土土器拓影



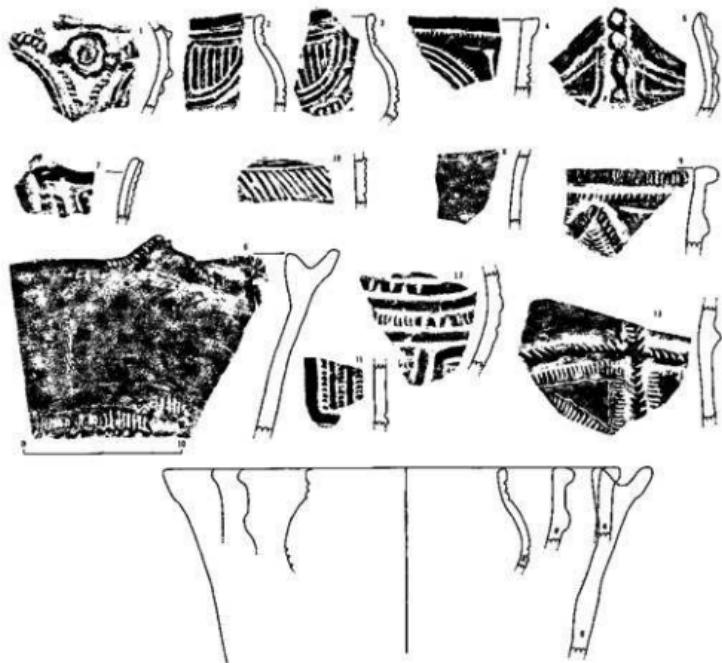
挿図40 B 3・31A・A 3 グリッド覆土出土土器拓影



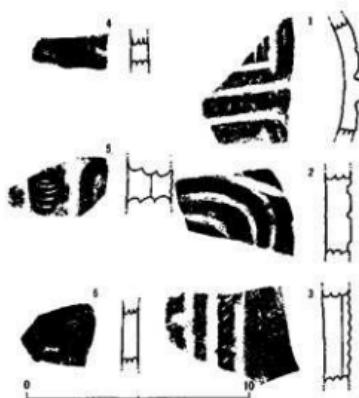
挿図41 B 3・35A・A 3 グリッド拡張部 J 1・J 2 住居址 覆土出土土器拓影



挿図42 B 3・28A・A 3 グリッド拡張部 J 1・J 2 住居址 覆土出土土器拓影



挿図43 B3-35A・A3グリッド拡張部J1・J2住居址覆土出土土器拓影



挿図44 第3址(1-3)・第4址(4-5)
出土土器拓影

挿図 38 の 説 明

番号	出土地點	部分	色調	胎 土	器 壁	器 厚
1	J-1、J-2 住括張部	口縁部	褐色	白雲母、石英等を含む	内面口唇部、ヘラ研磨	9mm
2. 9	"	胴 部	暗褐色	白雲母等を含む	内面をヘラ研磨	1.2cm
3. 4 6	"	口縁部 及び胴 部	"	石英、白雲母、黒雲母等を含む	内面をヘラ等で研磨	1.4cm
5	"	胴 部	外面黑色 内面暗褐色	砂粒を含む		6mm
7	"	"	褐色	白、墨雲母等を含む		1.4cm
8	"	"	"	白雲母、石英等を含む 堅緻	外面に少し煤付着	1.3cm
10	"	"	暗褐色	白雲母等を含む		1.2cm

挿図 40 の 説 明

番号	出土地點	部分	色調	胎 土	器 壁	器 厚
1	B3、31A、A3	口縁部内 側に線取 りあり、 内側直徑 36 cm	褐色	普通	普通、口唇部内外側は ヘラ研磨	1.1cm
2	"	頭 部	"	白雲母、砂鉄等を含む	普通、内側ヘラで研磨	"
3	"	胴 部	"	黒雲母を多量に含む		1.4cm
4	"	"	明褐色	精製土、やや堅緻	内側に炭化物付着、内 面を草状のもので器壁 をなでている	1.1cm
5	"	"	黒褐色	石英、雲母等を含む		1.2cm
6	"	"	褐色	白雲母、砂鉄等を含む	内面をヘラ研磨	"
7	"	"	"	"	"	1.1cm
8	"	"	"	精製土か	内面に炭火物付着	1cm
9	"	"	"	白雲母等を多量に含む	内面に草らしいれ痕あり	1.1cm

挿図 41 の 説 明

番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
1.5. 6	J-1、J-2 住居拡張部	胴 部	褐 色	白雲母、石英等を含む	内面に炭火物、外面に 煤付着	7 mm
2.3. 4	"	口縁装 飾	"	白雲母等を多量に含む	内面をヘラ研磨、4は 内外面に同一文様あり	1.1cm
8	"	胴 部	赤褐色 褐 色	白雲母、石英、砂鉄等 を含む	内面に多量の炭火物が 付着	"
9	"	底 部	褐 色	白雲母、砂鉄等を含む		7 mm
10	"	胴 部	"	石英等を含む	内面に炭火物付着	1.1cm
7	"	底 部	黒褐色	細かい白雲母等を含む	内面を研磨	7 mm
12	"	底部残片	褐 色	"	普通	1 cm

挿図 42 の 説 明

番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
1	J-1、J-2 住居拡張部	口縁部 内側直 径14cm	褐 色	細かい白雲母等を含む	内面ヘラで研磨	1.2cm
2	"	"	"	"	外面をヘラで研磨	9 mm
3	"	口縁部内 側直径14 cm、内側 剥取あり	"	精製度か		4 mm
4	"	底 部	赤褐色	細かい白雲母等を含む		1.4cm
5	"	頂 部	褐 色	石英、白雲母等を多量 に含む	外面に煤が付着	1.1cm "
6	"	口縁部 内側直 径36cm	黒褐色	白雲母、石英等を多量 に含む	内面口唇部をヘラで研 磨	"

挿図 43 の 説 明

番号	出 土 地 点	部 分	色 調	胎 土	器 壁	器 厚
1.2. 3.5. 7	J-1、J-2 住居拡張部	口縁部 内側直 径12cm	暖褐色	石英、黑雲母を含む、 やや堅緻	ごつごつした感じ、外 面に煤が付着	7 mm
4	"	"	"	石英等を含む、堅緻	口唇部をヘラで研磨	1 cm
6	"	口縁部	褐 色	白雲母等を含む	内外面ともヘラ調製	

番号	出土地点	部分	色調	胎土	器壁	器厚
8	J-1、J-2 住居址擴張部	口縁部 に近い 部分か	褐色	黒雲母、石英等を含む		5 mm
9	"	口縁部 内側直 径9 cm	"	精製土か		9 mm
10	"	胴部	"	石英等を含む		7 mm
11.12	"	"	黒褐色	石英、白雲母等を含む		"
13	"	"	黒褐色 (外面 だけ)	黒雲母を多量に含む	内側はヘラ調製 (褐色)	8 mm

挿図 44 の 説 明

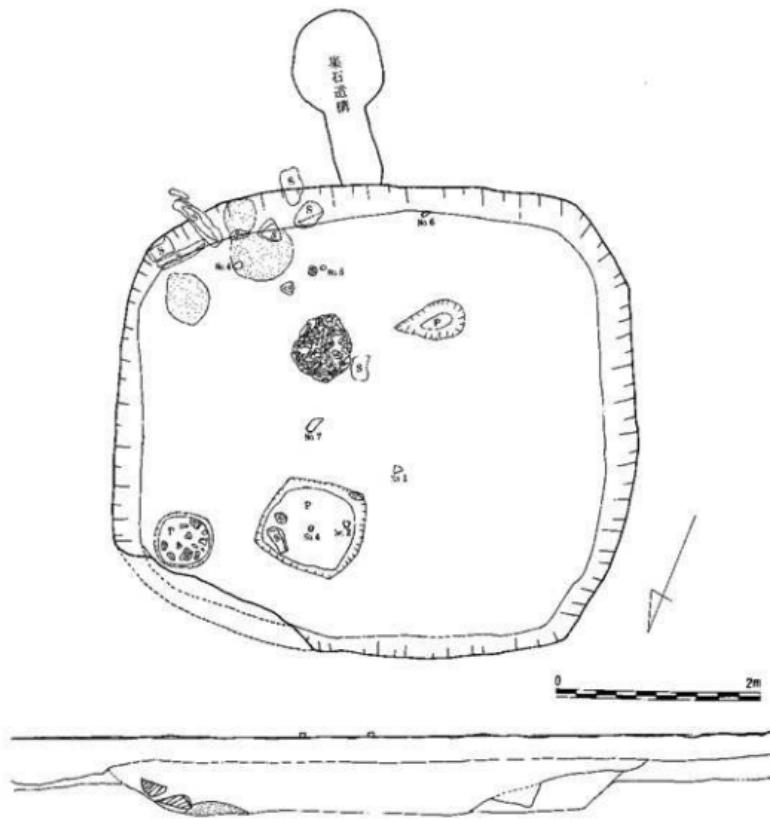
番号	出土地点	部分	色調	胎土	器壁	器厚
1	第3址	胴部	褐色	もろい	普通	9 mm
2	"	"	暗褐色	多量の白雲等が混入	"	1.3 cm
3	"	"	褐色	多量の石英、砂鉄等を含む	"	9 mm
4	第4址	"	黒褐色	細かい胎土(精選され ているか?)	"	1 cm
5	"	"	褐色	白雲母、黒雲母、石英等を多量に含む	"	1.2 cm
6	"	"	"	細かい砂粒を含む	普通、外面に少し煤が付着	1 cm

3. 平安時代の遺物・遺構

出土遺物は床面直上から出土した7点だけであった。この遺物による判断では、住居址の使用された時期は11世紀から12世紀にかけての平安時代とみられる。その他深い住居址にもかかわらず、その覆土から出土した遺物は縄文式土器が少量だけで、この住居址と同時期にあたる遺物はなかった。

7点の遺物のうちNo.1とNo.4は須恵器破片、No.3とNo.5は瓦器的な土師質土器破片とほぼ完形の瓦器的な黒色土師質杯及びNo.2は灰釉陶器破片であった。No.6は不定形石器、No.7は石斧状石器で、これらは縄文時代のものと思われ、投げ込みなどによって、床面直上にあったものであろう。

No.1は須恵器で、住居址のやや中心付近から出土した。胸部破片であるが器形は判定出来ない。内側にたたき目があり、胎土は石粒などが混入しており粗悪で、やや赤味を帯びているので、地元の窯で製造されたもの可能性がある。No.2は灰釉陶器で、No.1ピットの覆土上層から出土した。碗の口縁



挿図45 平安時代住居址(H1住)平面図

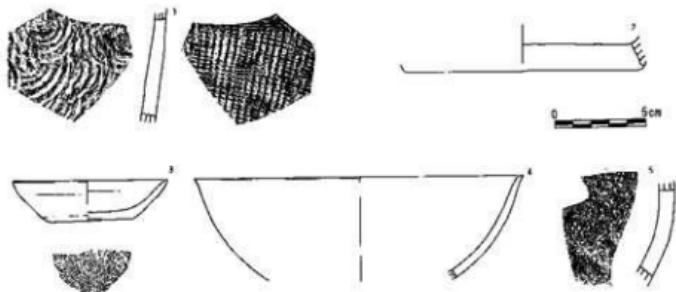
から脇部にかけての破片である。口径はほぼ17cm、深さは現状で5.2cmあり、器内は比較的薄く、口唇部はわずかに開いて、鋭く薄くなっている。胎土は緻密で黄色がかった白色である。灰釉が内外面全体に均一によくかけられていて、色は灰色がかった白色で、良質である。No.3は瓦器的な土師質の底部で、壺であろう。底部の直径は12.5cmである。No.4は須恵器でNo.1ピットの覆土上層から出土した。脇部破片であるが、器形は判定出来ない。胎土は緻密で、良く、外面は黒色を帯びている。No.5は杯でカマドの近くから出土した。内外面とも黒く、瓦器的な土師質の杯で、口縁部の一部が欠損している。口縁の直径9.5cm、底面直径4.5cm、深さ2cmで、器形は比較的立上りが鋭く、深いといえる。外面の中央よりやや上に縁があり、器肉は厚く、口唇部は比較的薄い。底部は糸切りで、やや上底である。この器形の資料が少なく時期を決定しかねるが、国分期の玉状口縁を有する杯に続く時代のものであろうか。

遺物の説明は以上のようにある。この内、直接時期を決定し得るものはNo.2の灰釉陶器とNo.5の瓦質土師器（杯）である。この二ヶ体の器形やその他の遺物の胎土等の状態を総合的に考えると、11世紀末以後から12世紀の間にに入るものと考えられ、すなわち、平安時代後期に比定出来るものであろうと思われる。

平安時代の住居址（H1住）

縄文時代住居址の西に隣接している。

北東の隅と西側の壁を少し搅乱されていたが、ほぼ完掘出来た。住居形態は隅丸方形の堅穴で、深さは平均65cmと深い。床面の長さは平均東西4.50m、南北4.20mであったから、床面積は約18m²となる。プランはローム層を深く掘り下げており、床面は非常に軟弱で、それを確定し得なかったが、遺物が出土した標高差が6mm以内のレベルであったので、これを床直上とみなせた。ピットは二つあり、No.1は、そのプランは住居址内の東北の隅にあり、円形で直徑55cm、深さ60cmで、底にこぶし大の自然石を敷いて突き壓めている。No.2はNo.1よりやや中央部にあり、そのプランは不正形な隅丸方形で、東西が100cm、南北が90cm、深さ50cmと大きく、容積約0.7m³である。このピットの床面レベルに須恵器が2片（No.2・No.4）と20cmくらいの自然石が三ヶ、こぶし大の石が約10ヶあったので、前述し



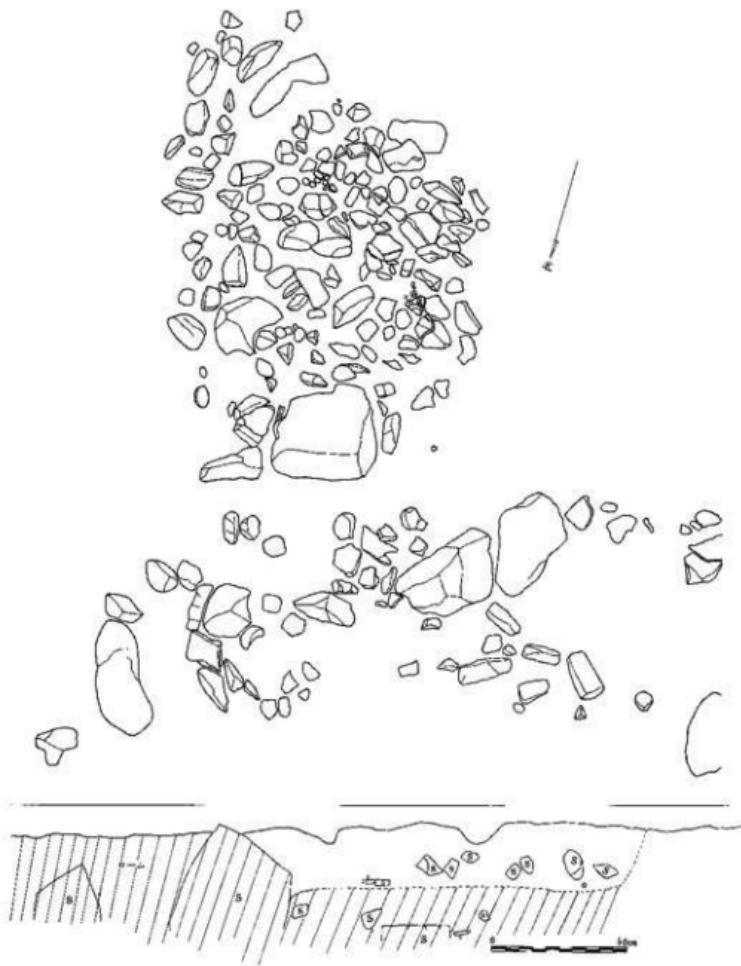
插図46 平安時代住居址出土灰釉陶器（A6.4）、土師器（A6.2,3）、須恵器（A6.1,5）実測図・拓影

たように床面が軟弱だったので推定であるが、後にこれを埋めて、床面としたものと考えられる。他に卵型で深さ10cmの凹みがあったが、これは擾乱によるものようである。カマドは東南の隅にあり、焼土の厚さは約10cmで、袖の芯に使用した石が三ヶあり、その中の二ヶは原位置に、二ヶは移動されている。焼土はカマドの中から搔き出されて床面に堆積していた。もう二ヶ所が壁と床面に1cmくらい堆積していた。中央やや南寄りに、地山に入っていたグリーンタフが円形に表わされていた。これは直径約55cm、深さが60cmくらいあり、セクションで見たところ、持ち込まれたものではない。前述したように、床面が軟弱であったため、この地山の石が床面上に露出していたものかどうか判断が難かしかったが、全体の状況を勘案すれば、露出していたものと見られる。壁は立上りが60°である。層位は、耕土の下が住居址の覆土になっており、住居址内西側に外から流れ込んだ黒色土がみられた。遺物出土状態は全て、床面直上にあり、灰釉陶器1片、須恵器2片、土師器2片であった。

時期は灰釉陶器によると平安時代後期と思われる。その性格は、グリーンタフが露出していたとすれば、それと遺物とで現わしている。

4. 集 石 造 構

H1住の南に隣接していて、H1住によって、その一部分が切られたと思われる。形状は直径約1mの円形部分から北に約2m舌状の張り出し部があった。円形部分は薄い集合で張り出し部の石は疎であった。層位は耕土の下で薄いローム層で被覆されていた。集石の中にはローム層が入っており、その下はグリーンタフを含む地山のローム層であった。集石の直上に中期繩文式土器が一片あったが、この遺構の時期や性格を決定づけるものではない。



博図47 集石造構平面図・セクション図

第四章 考 察

縄文時代・出土遺物のうち、第一住居址出土の土器は井戸尻式、第二住居址のそれは、藤内式に比定出来る時期のものである。発掘した全土器中、井戸尻期が少しだけで、他は藤内後半期のものである。これらの土器はこの時期に共通して口縁部の形態が多種多様である。胎土は精製したものから粗製のものまであり、口縁部についてみると、開いているものは精製した胎土であり、内窓しているものは比較的粗製であると言えよう。なかには第39図に示した人体文土器のように化粧粘土を貼りつけてその上に施文しているものもある。

住居址は柱穴がJ 1に一ヶ所あるだけで、他にはJ 1・J 2ともなく、貯蔵穴もなかった。穴跡がない住居跡は、井戸尻遺跡に一軒（中期）あり、他にも若干あるようである。床面は、この遺跡の南にある上野原遺跡のものと比較すると軟弱であるので、使用期間は短いと思われる。

村上遺跡は上野原遺跡の200m北に、東山遺跡の2,000m東にある。上野原・東山遺跡は遺構が濃厚で、しかも広範囲に亘って存し、村上遺跡と同時期にあたる。この二遺跡とは別に同時期のものが、この曾根丘陵上に小さい範囲で、希薄な遺跡が十数ヶ所、県で行った分布調査で確認されている。

前述してあるように村上遺跡は、厚い圧錐性砂礫層上にあり、住居址は小さく粗末な感じがあった。このように中道町史（上）にあるような上野原遺跡とは異なった性格を有する二種類の遺跡は、どのような相関関係があり、有機的な連絡があったであろうか。縄文時代中期の重要な研究課題にならないであろうか。

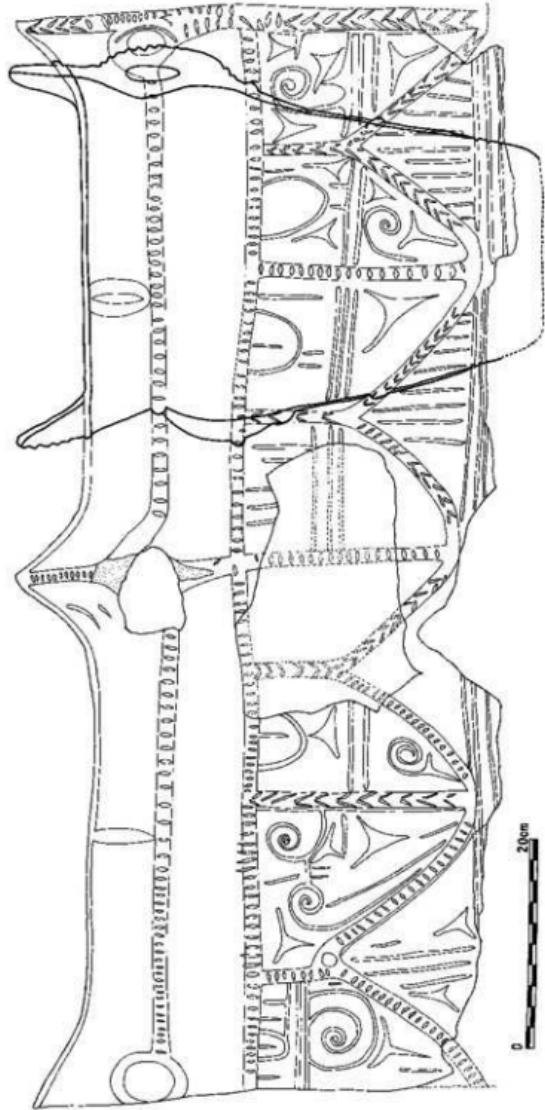
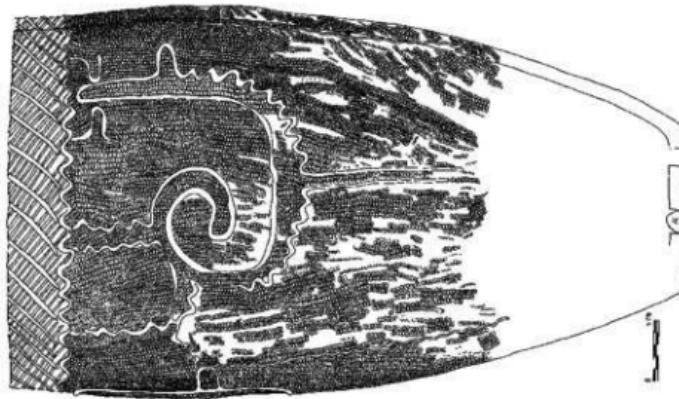


插圖48 參考資料
插圖48 參考資料 收丘町倉科 周 俊彦屋敷出土土器尖底鋤

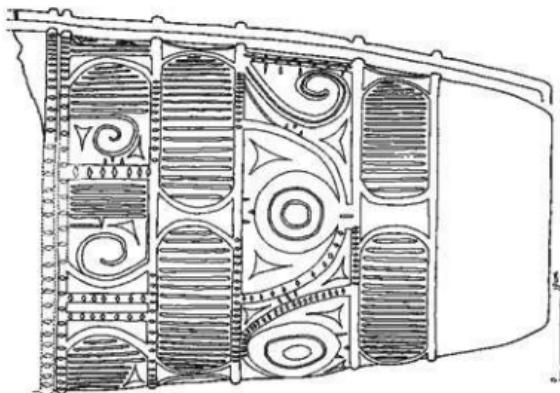
参考資料 東八代郡一宮町国分小字南条215番地出土の
底部穿孔土器（合利II式）実測図、
底盤部の縦横の寸法を示す。

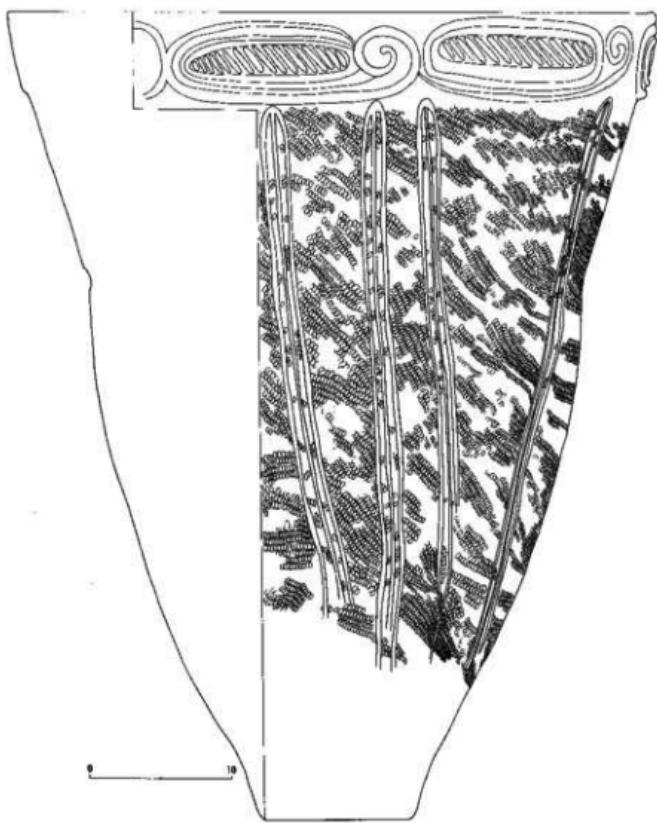
挿図49



参考資料 境川村牛尾北原遺跡出土土器見取図
(上寺尾3136号区第6氏所蔵)

10cm





挿図51 參考資料 境川村小山西原出土
(境川村三們清水信吾氏所藏・底部穿子(土器 昭和40年代発見))



図版 1 J-1 住居址土器出土状況



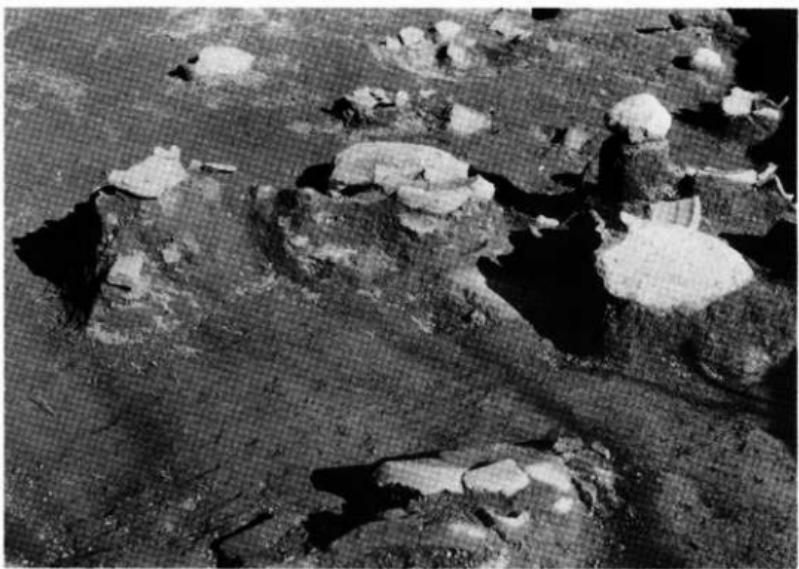
図版 2 J-1 住居址ベルト内土器出土状況



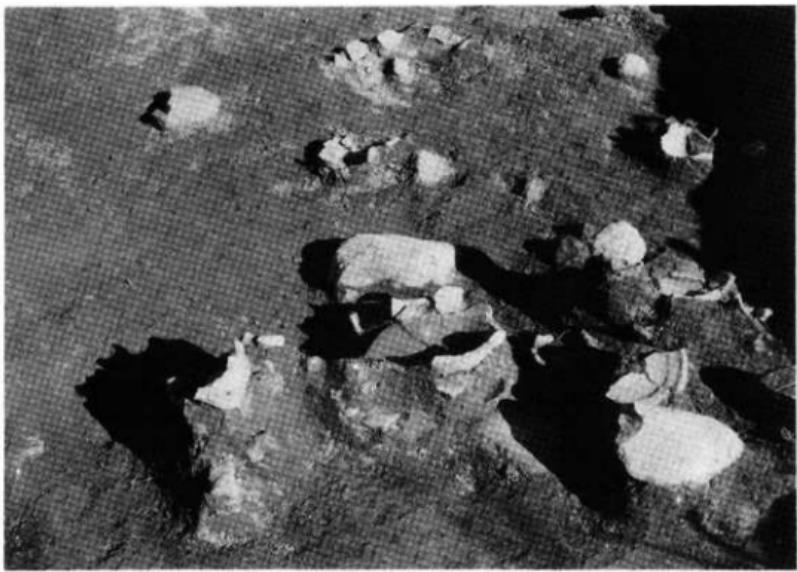
図版 3 J—1 住居址土器出土状況



図版 4 J—1 住居址ベルト内土器出土状況



図版 5 J-2 住居址土器出土状況



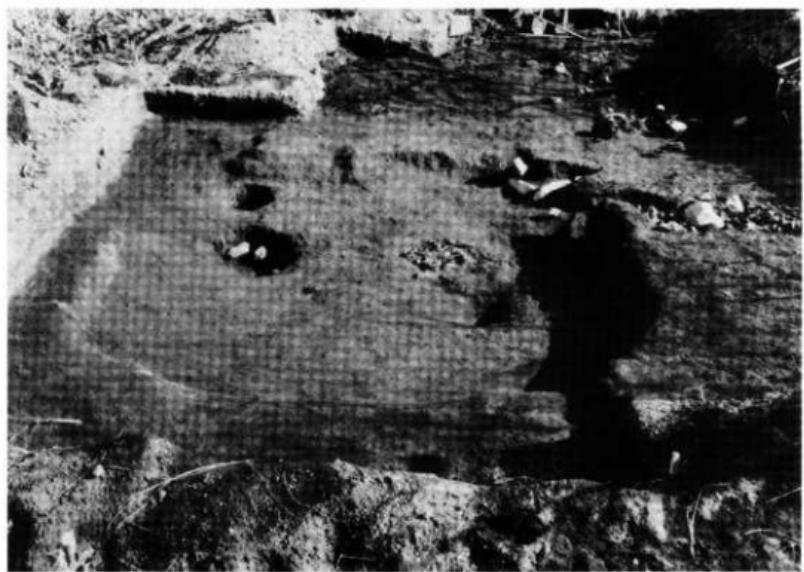
図版 6 J-2 住居址土器出土状況



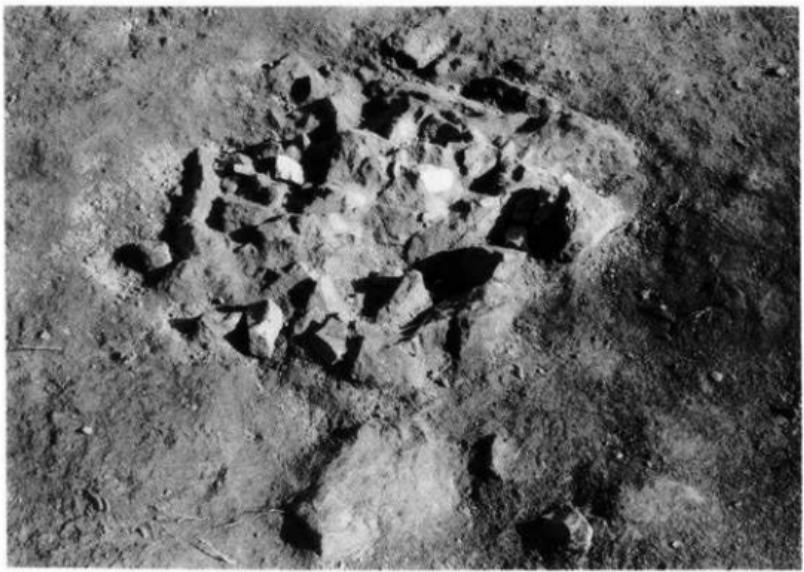
図版 7 J-2 住居址



図版 8 J-2 住居址土器出土状況



図版 9 平安時代住居址 (H-1)



図版 10 平安時代住居址内露出グリーンタフ



図版 11 平安時代住居址内露出グリーンタフ断面図



図版 12 平安時代住居址炉址断面図



図版 13 平安時代住居址セクション図



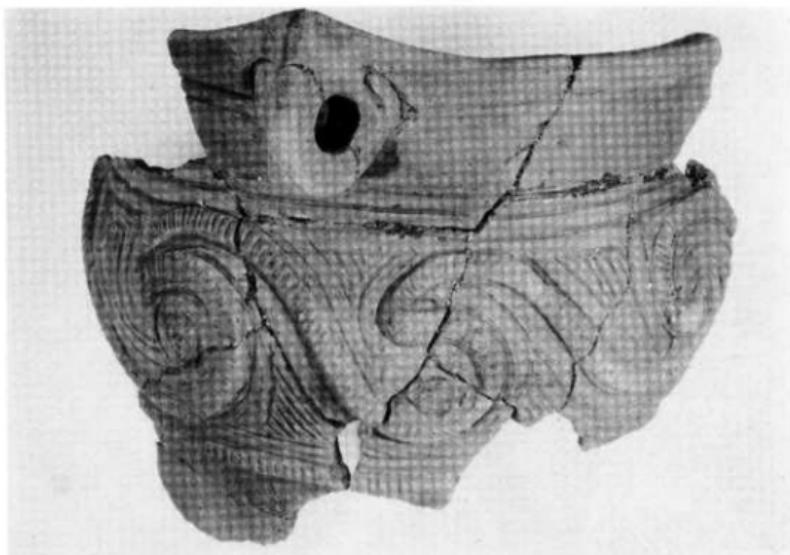
図版 14 集 石 址



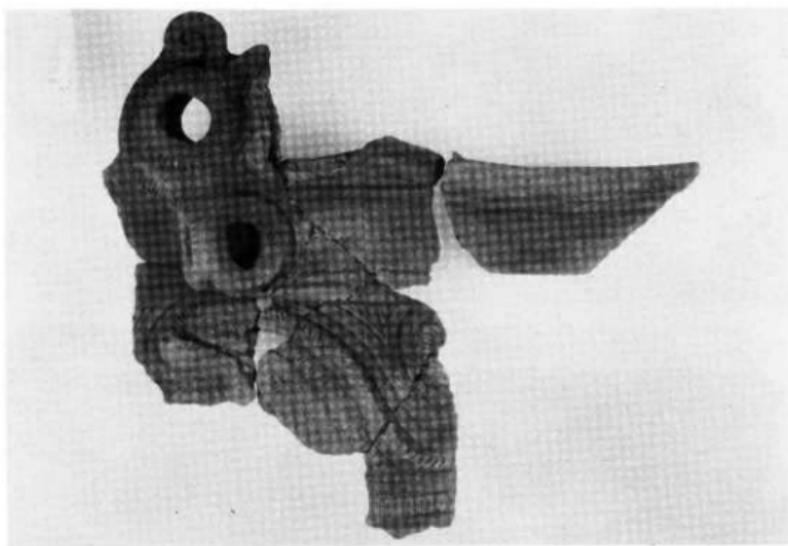
図版 15 集石址断面図



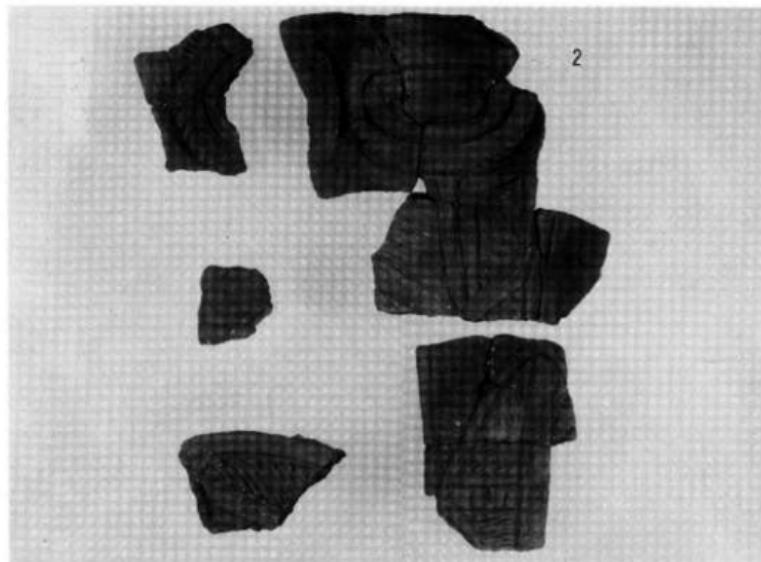
図版 16 発掘参加者 | 向って後列右より折井、池谷、森
| 前列右より池谷、
、



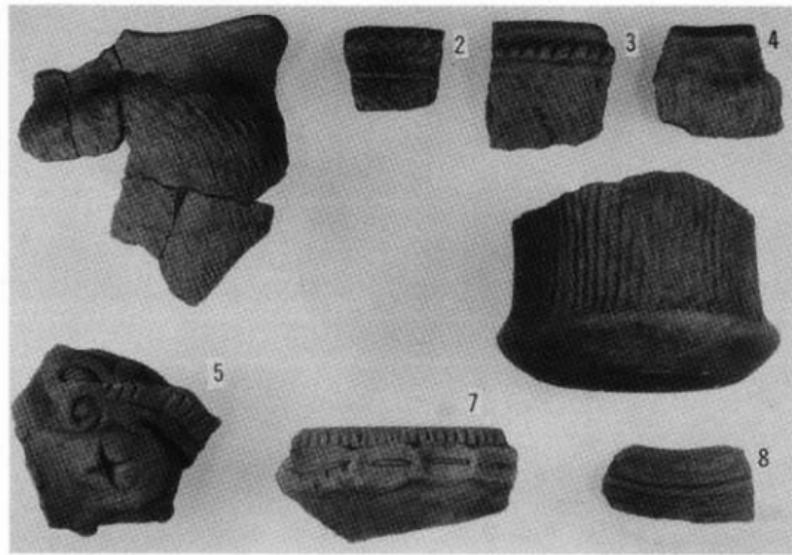
図版 17 J-1 住居址床面直上出土土器



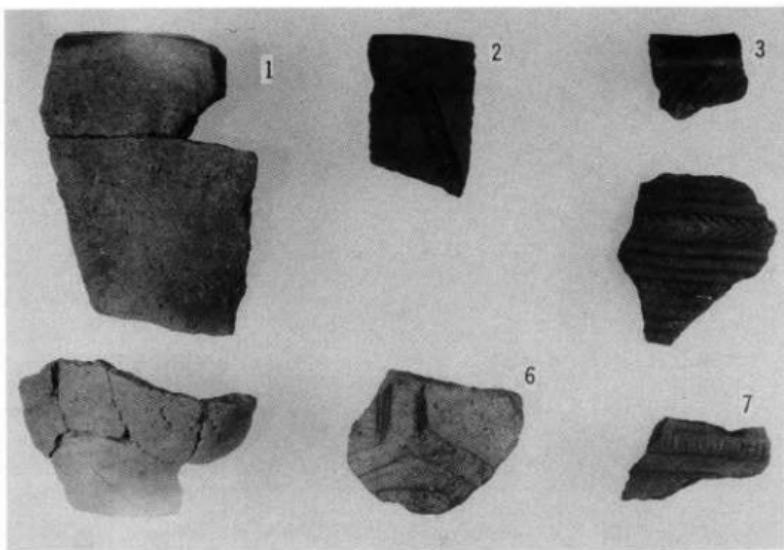
図版 18 J-1 住居址床面直上出土土器



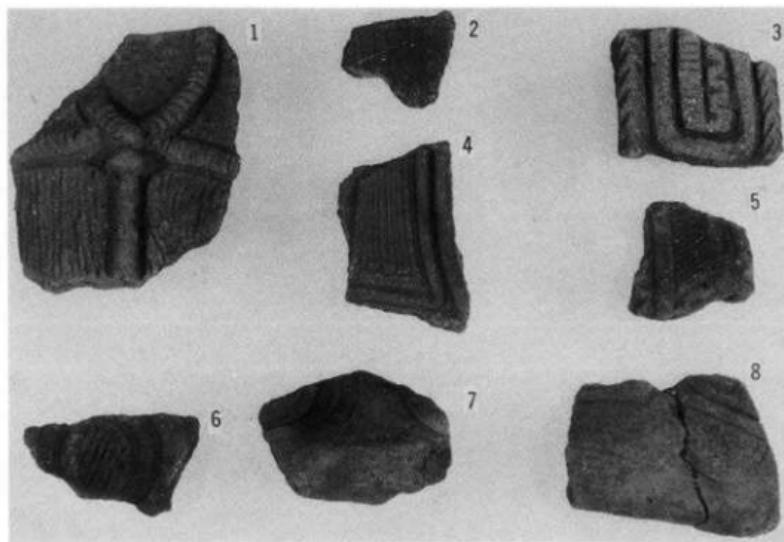
図版 19 C2-5A他グリッド、J-1住居址床面上出土土器



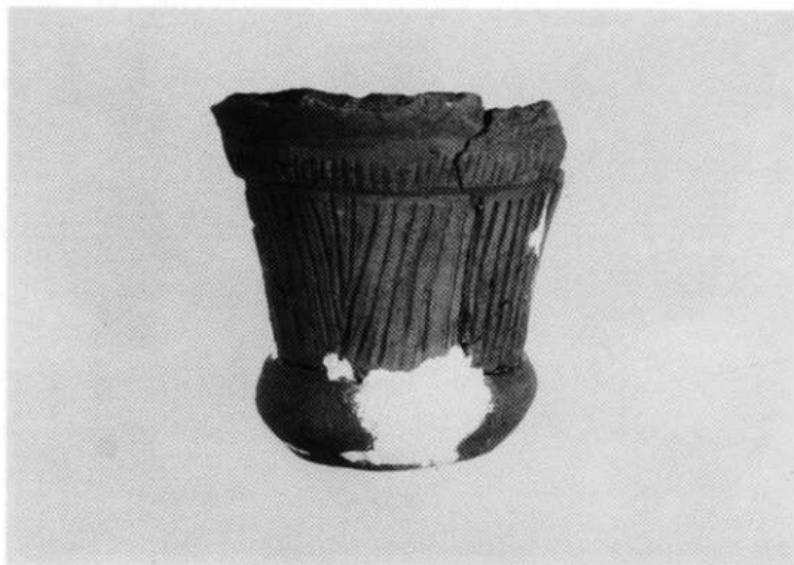
図版 20 C2-5A他グリッド、J-1住居址床面上出土土器



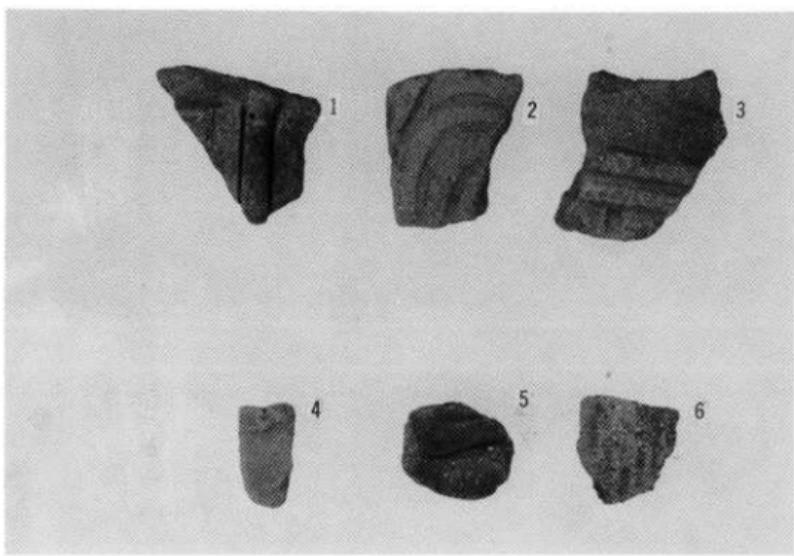
図版 21 C2-7A-8A グリッド、J—1 住居址床面上出土土器



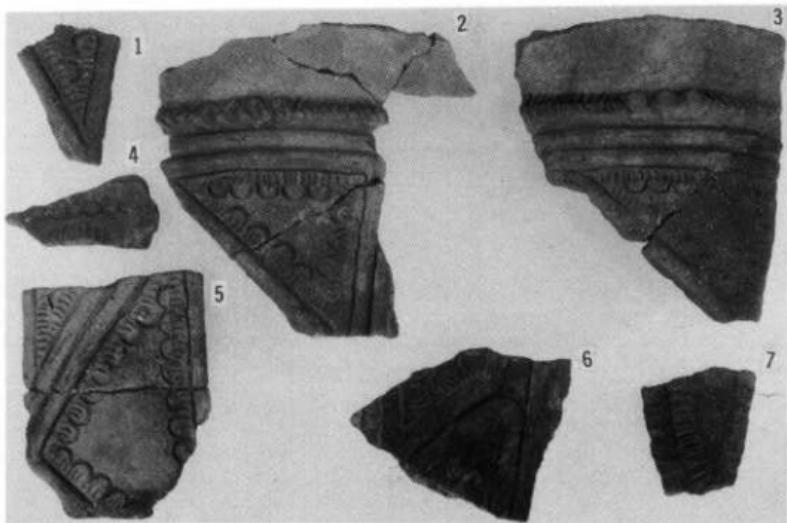
図版 22 C3-24A グリッド、J—2 住居址覆土下層出土土器



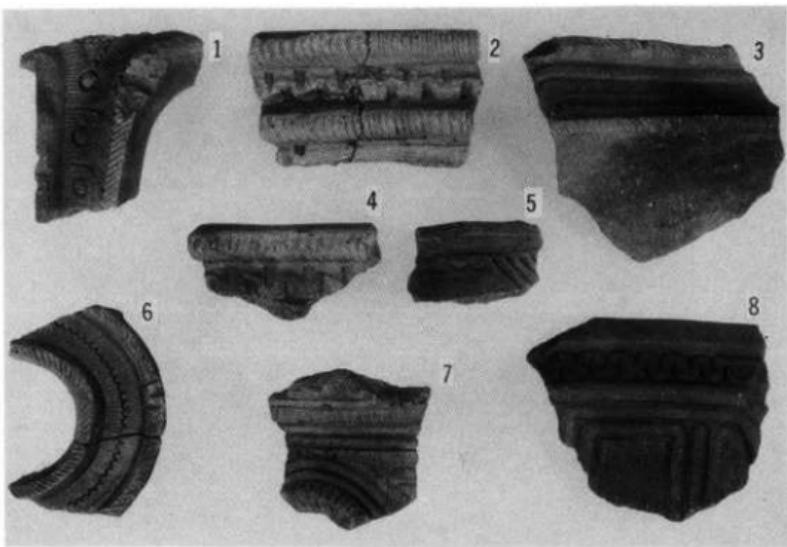
図版 23 C2・7A・8A グリッド、J—1 住居址床面上出土土器



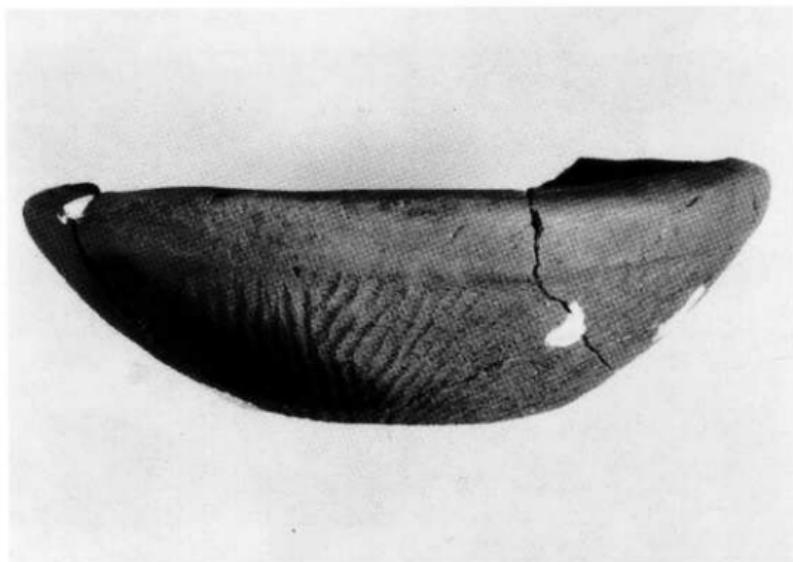
図版 24 第3（1,2,3）址、第4（4,5,6）址出土土器



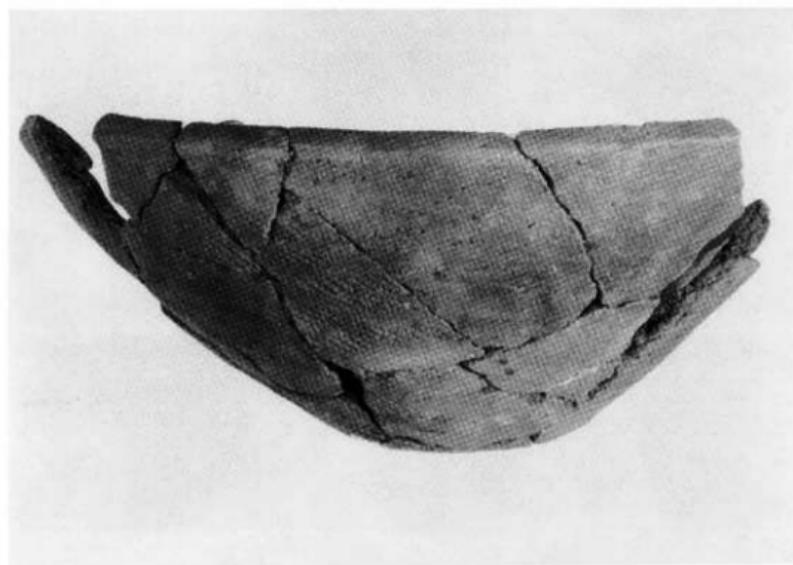
図版 25 J—2 住居址覆土下層出土土器



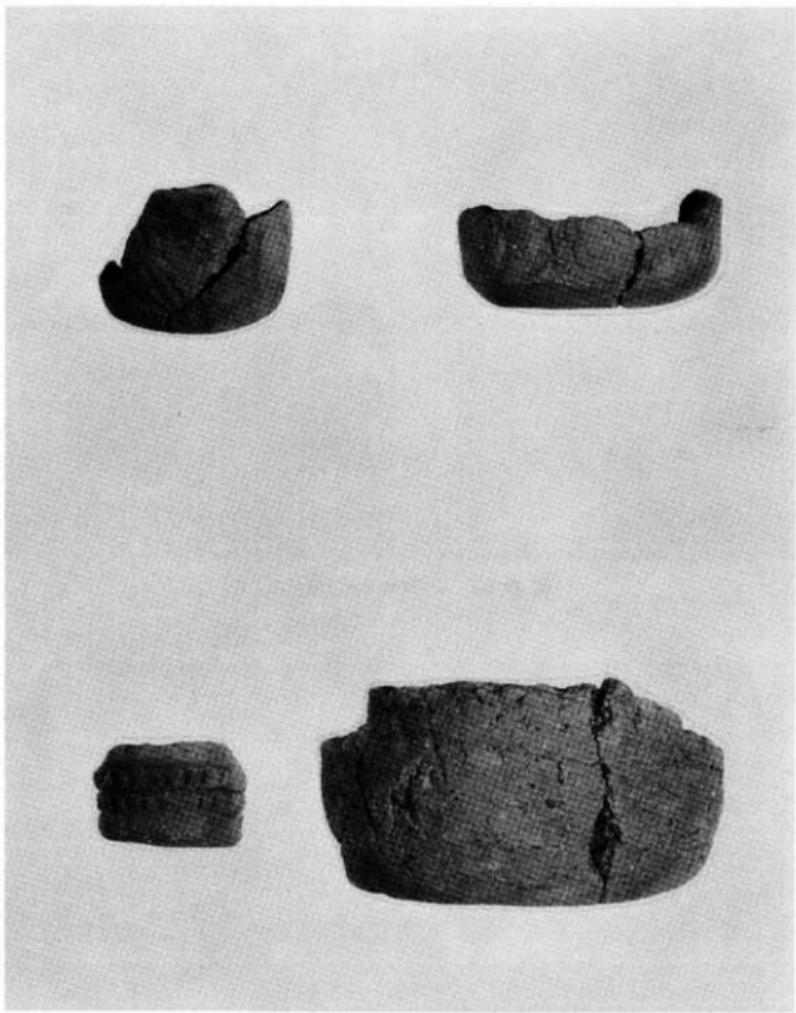
図版 26 J—2 住居址覆土下層出土土器



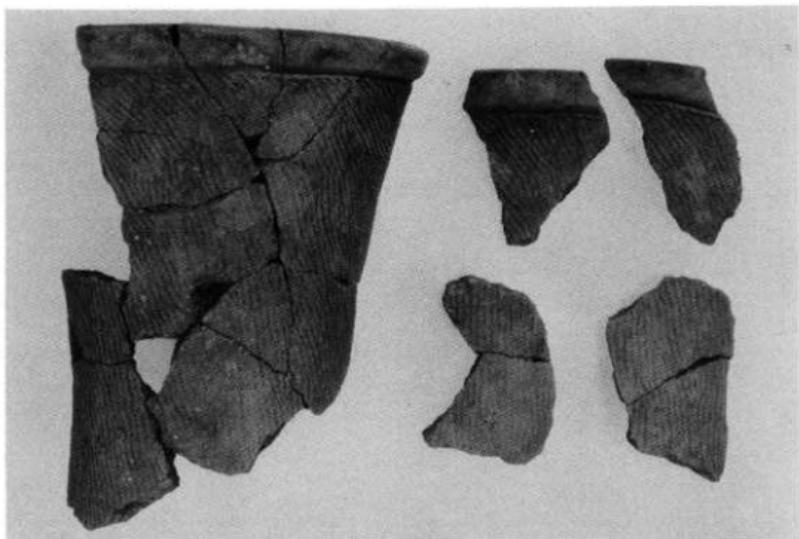
図版 27 J-2 住居址覆土下層出土土器



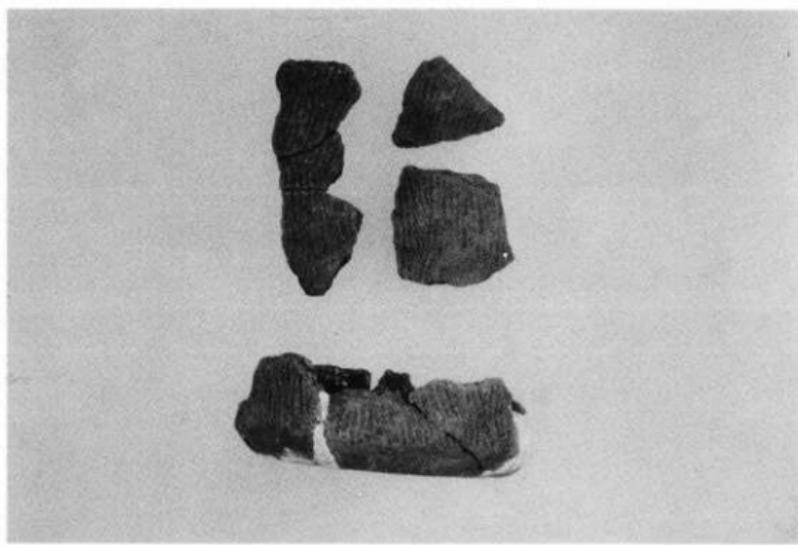
図版 28 J-2 住居址覆土下層出土土器



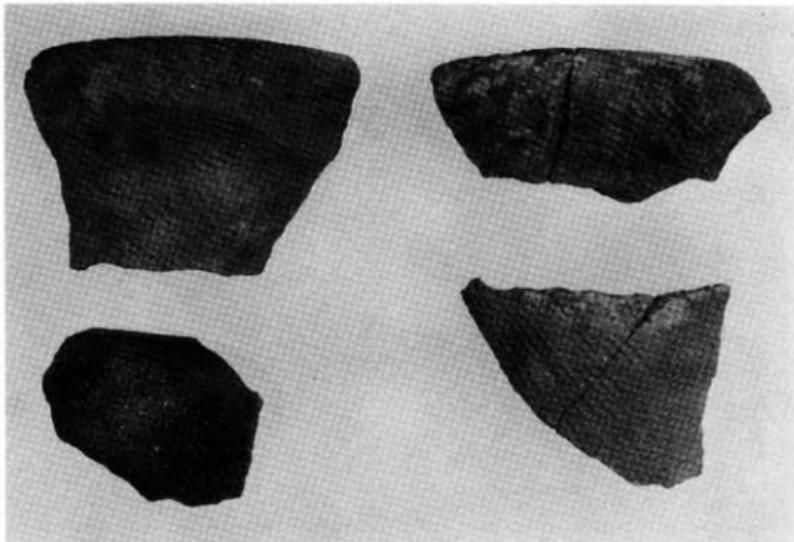
圖版 29 J—2 住居址下層出土土器



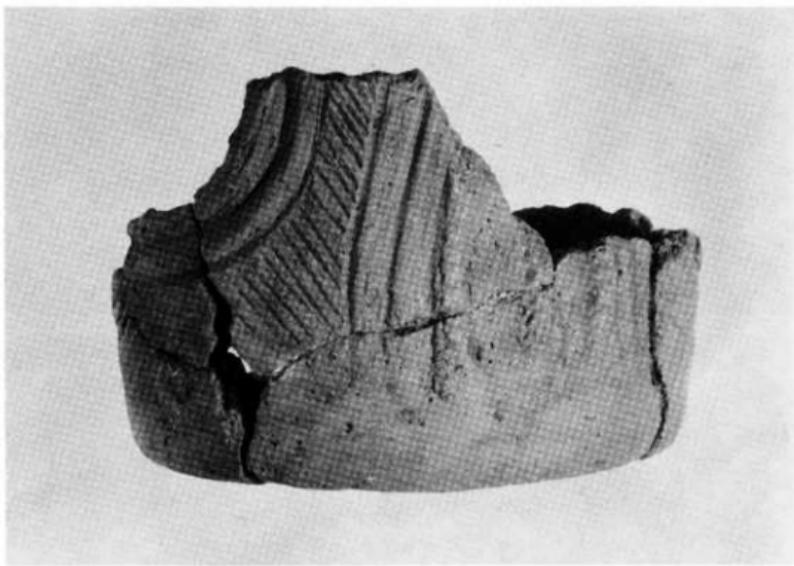
圖版 30 J—2 住居址下層出土土器



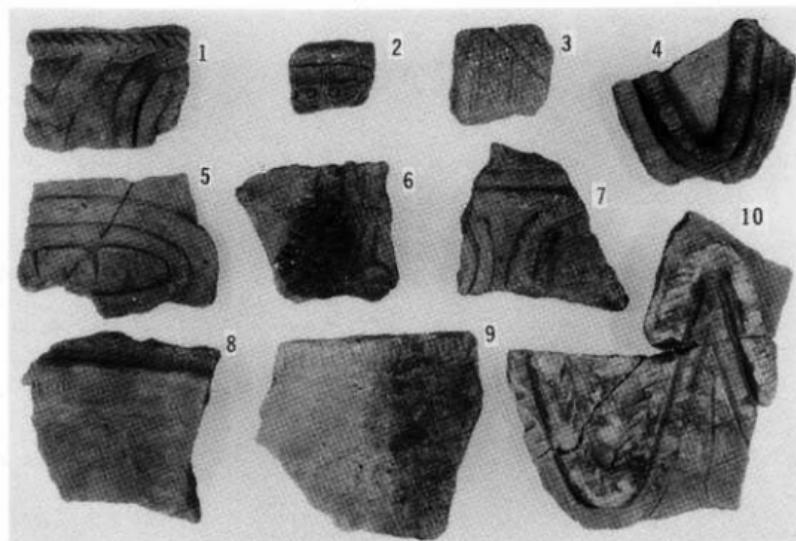
圖版 31 J—2 住居址下層出土土器



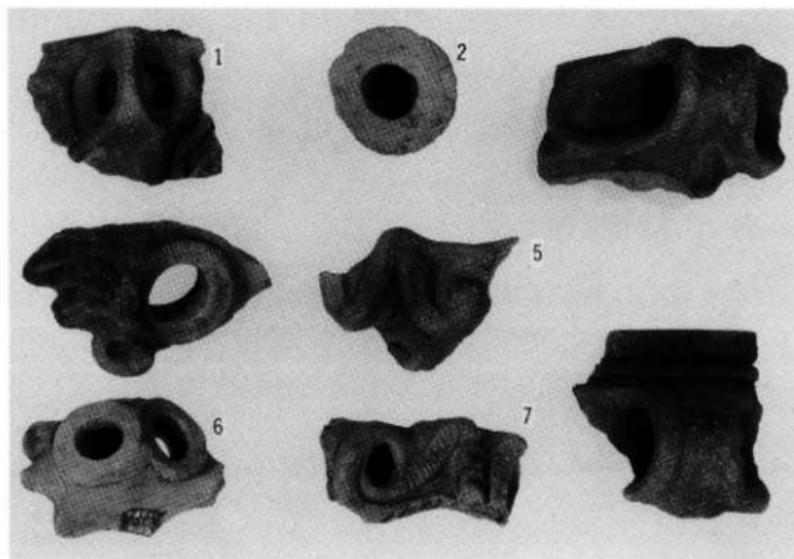
図版 32 J—2 住居址覆土下層出土土器



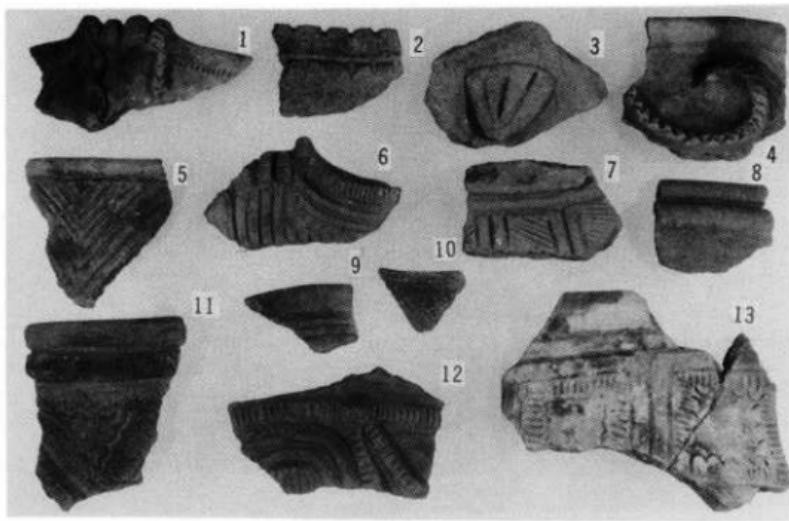
図版 33 J—2 住居址下層出土土器



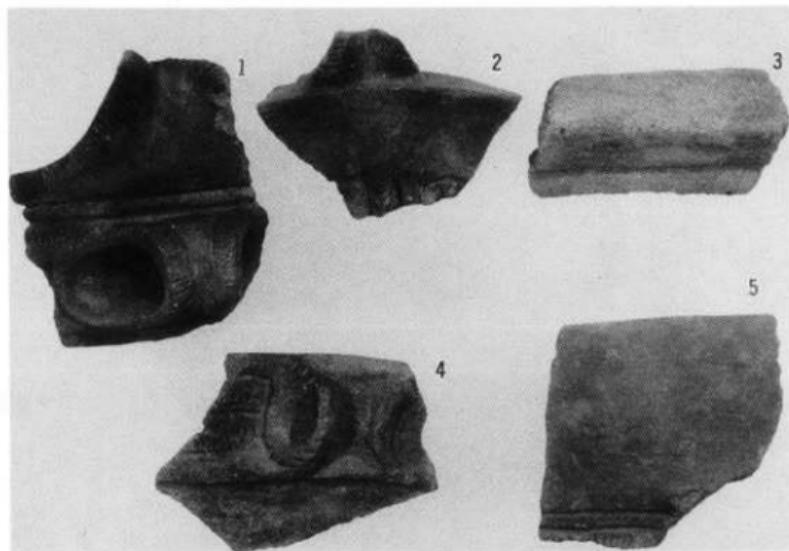
図版 34 B1-1A グリッド、J—2 住居址覆土下層出土土器



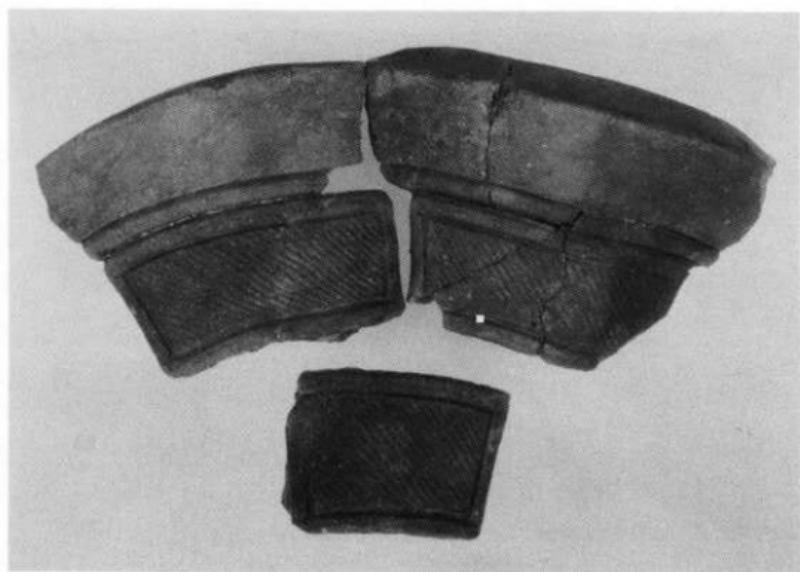
図版 35 C4-26A グリッドの一部、J—2 住居址覆土下層出土土器



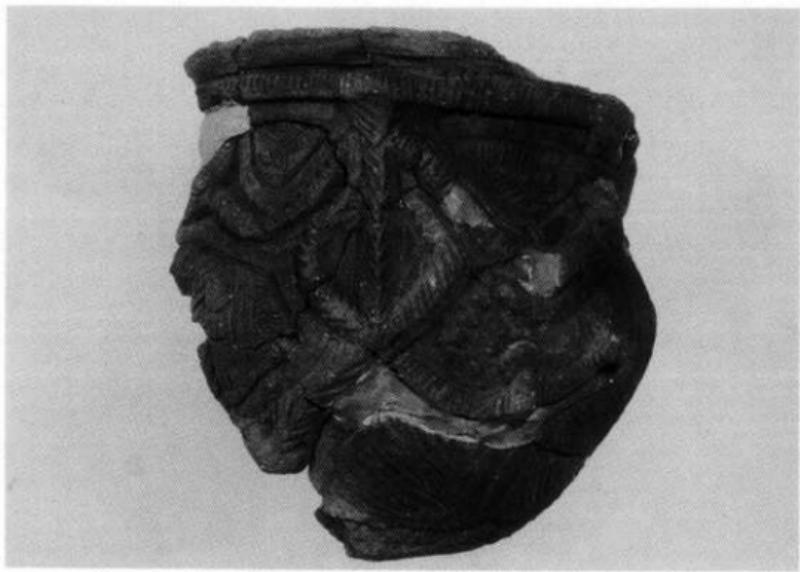
図版 36 C3-22A グリッド、J—2 住居址覆土下層出土土器



図版 37 C4-35A グリッド、J—2 住居址覆土下層出土土器



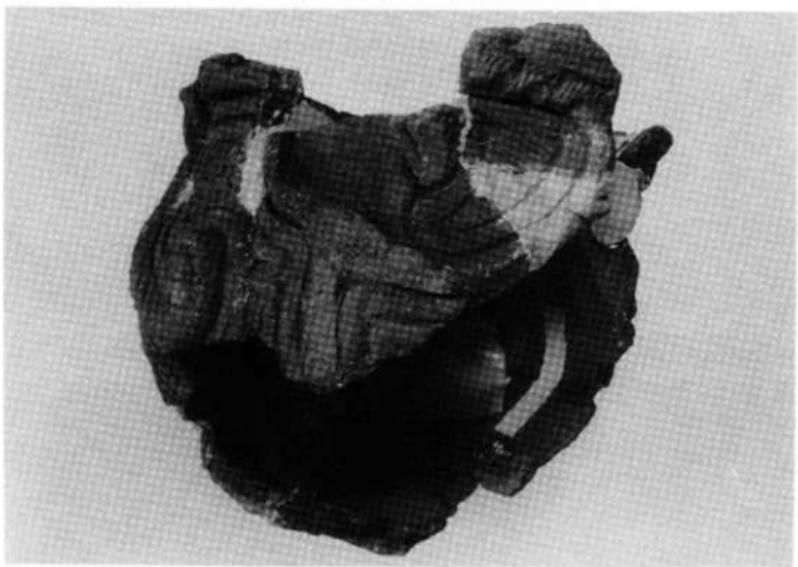
圖版 38 J—2 住居址覆土下層出土土器



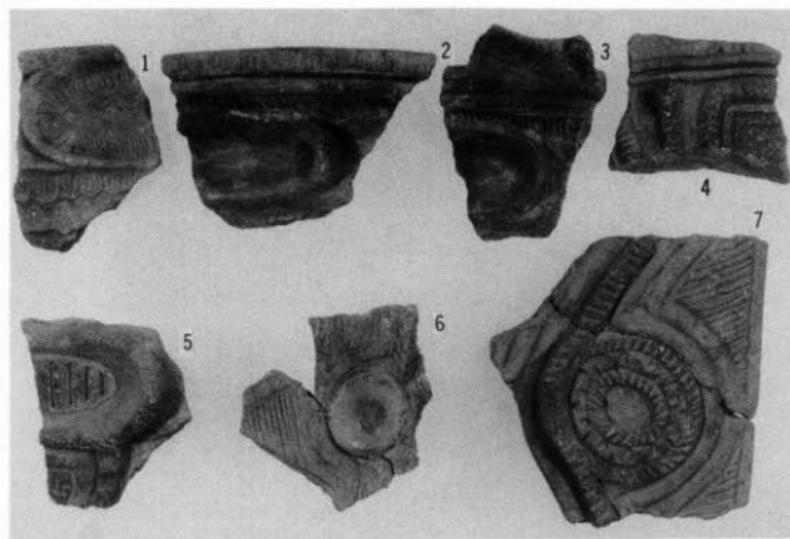
圖版 39 J—2 住居址出土人体文土器



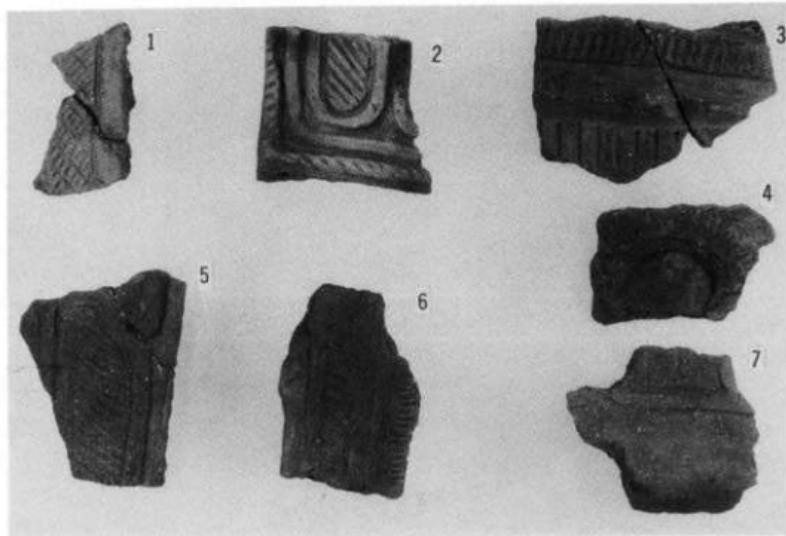
図版 40 J—2 住居址出土人体文土器



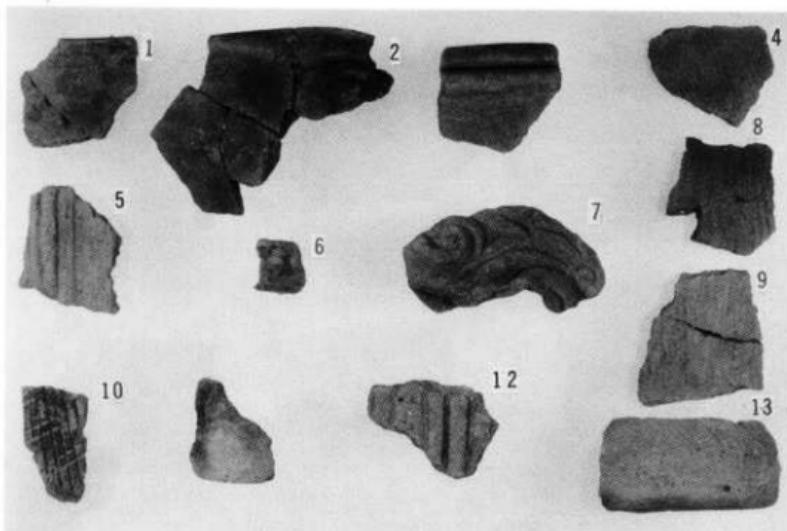
図版 41 同 上



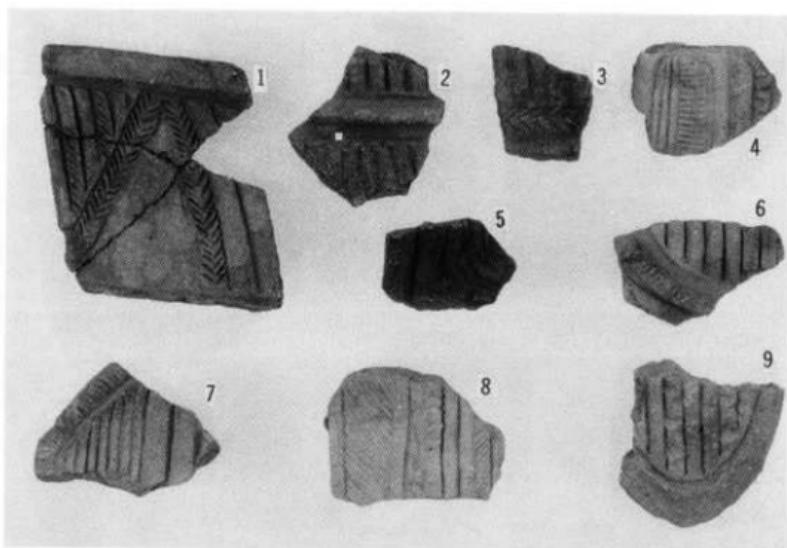
図版 42 J-2 住居址覆土下層出土土器



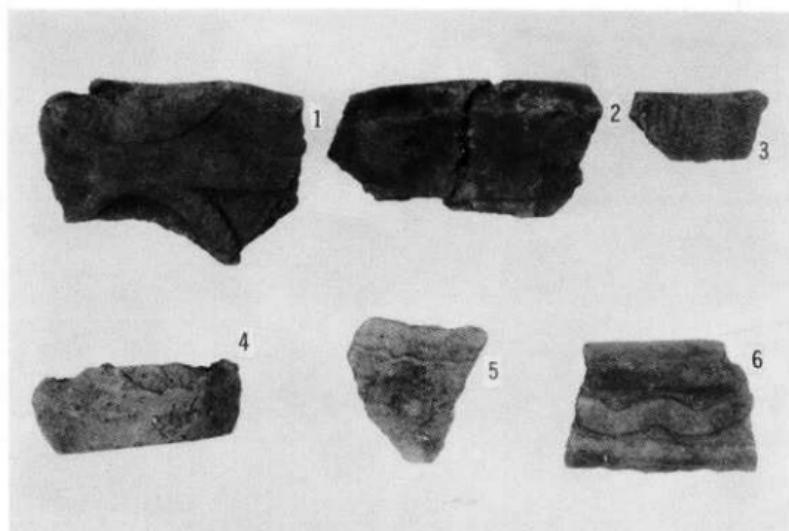
図版 43 B1-3A グリッド、J-2 住居址覆土下層出土土器



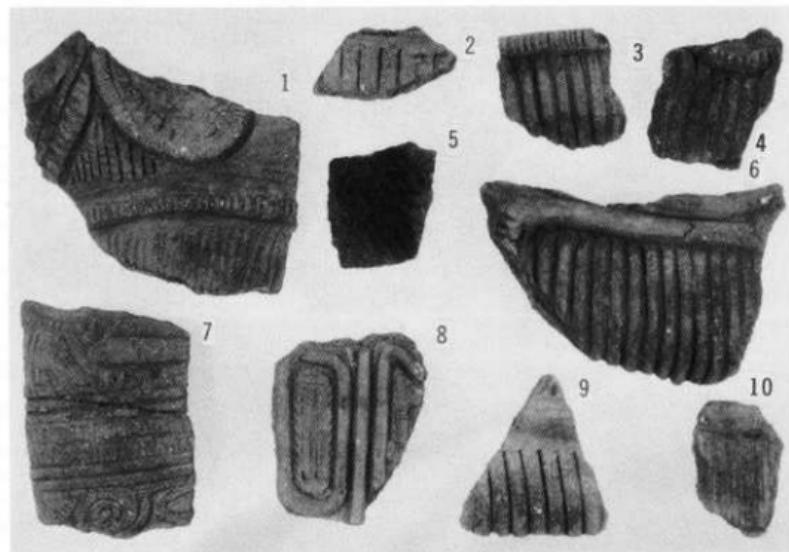
図版 44 J—1 住居址拡張部床面上出土土器



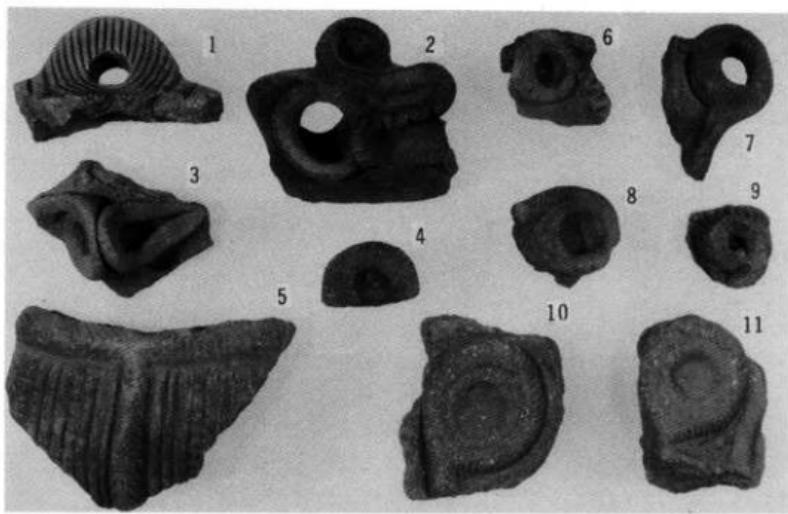
図版 45 B3-31A・A3 グリッド、覆土出土土器



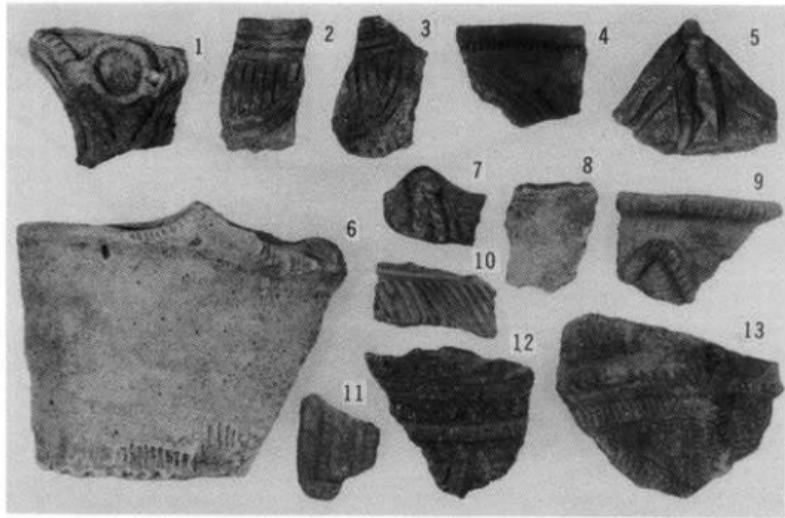
図版 46 B3-28A・A3グリッド拡張部
J-1 J-2 住居址拡張部出土土器



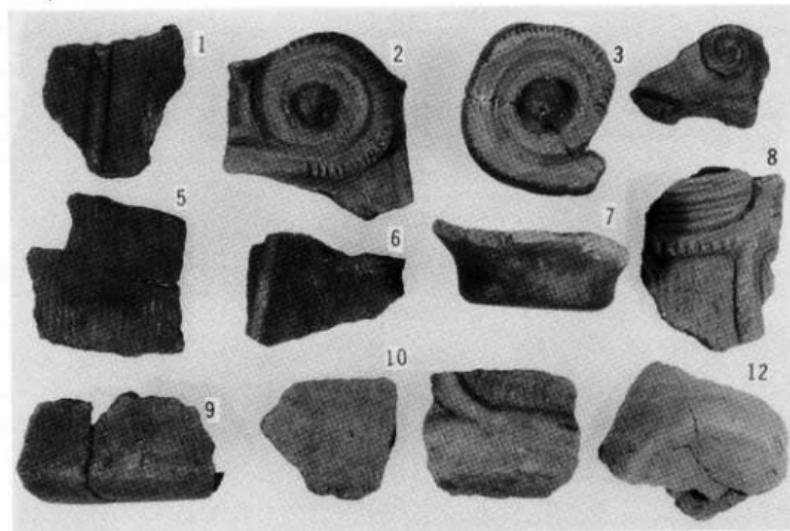
図版 47 B3-29A・A3グリッド拡張部
J-1、J-2 住居址拡張部出土土器



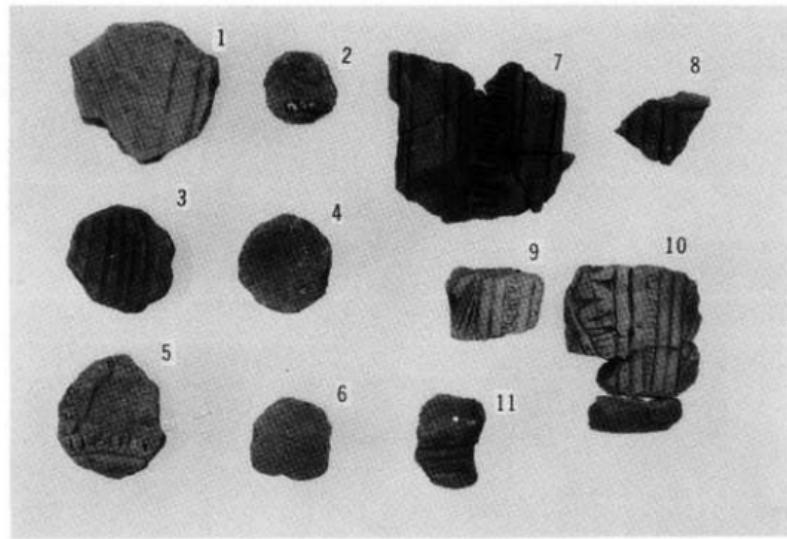
図版 48 C3-20A グリッド、
J-2 住居址拡張部覆土上層出土土器



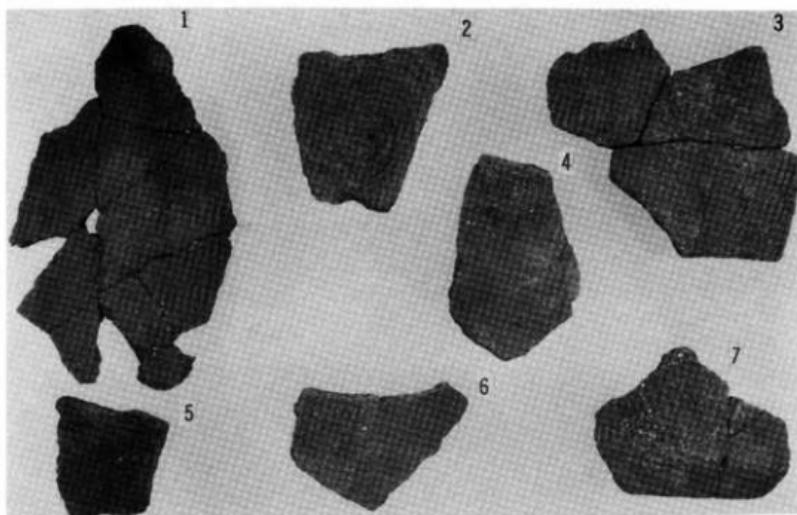
図版 49 B3-34A・A3 グリッド、拡張部
J-1、J-2 住居址拡張部出土土器



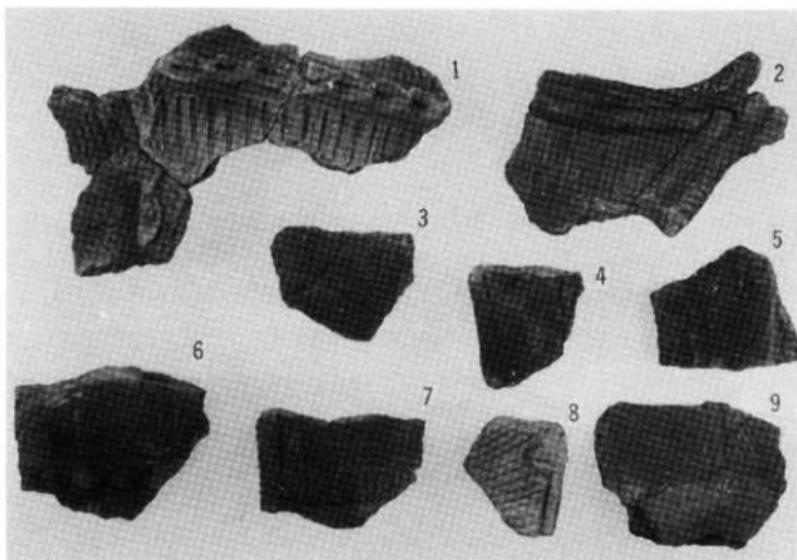
図版 50 B3-35A・A3グリッド、
J-1、J-2 住居址拡張部出土土器



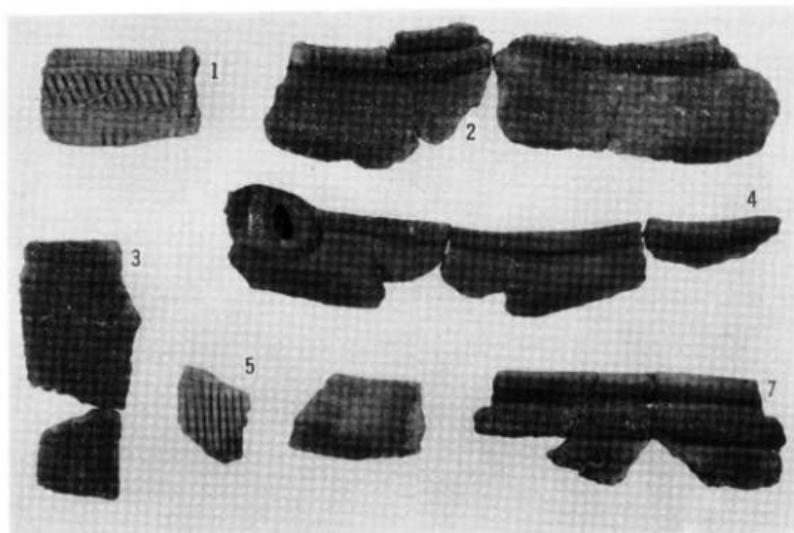
図版 51 B2-17A・グリッド、
J-2 住居址拡張部覆土下層他出土土器



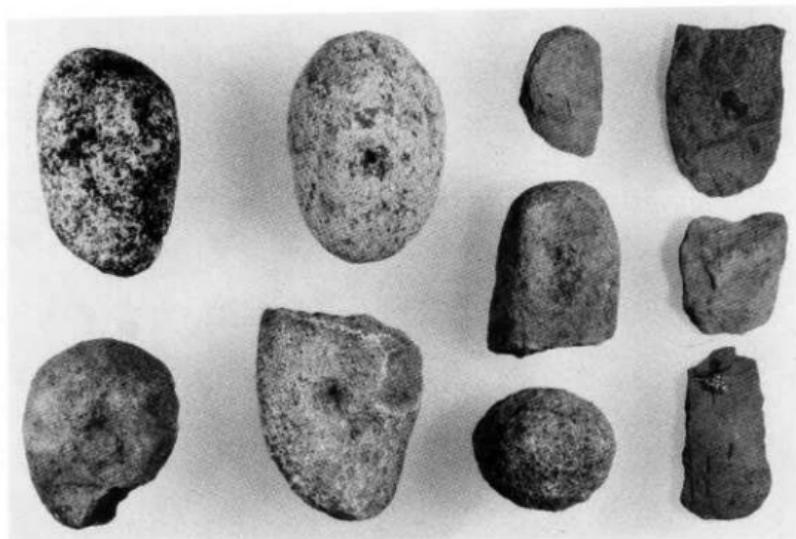
図版 52 B1・9A・グリッド、
J—2 住居址拡張部覆土下層出土土器



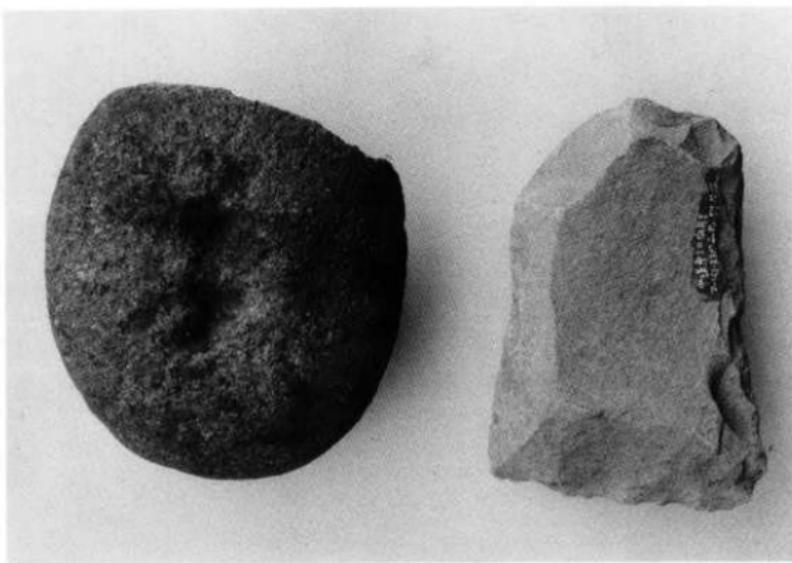
図版 53 B1・5A・グリッド、
J—2 住居址拡張部覆土下層出土土器



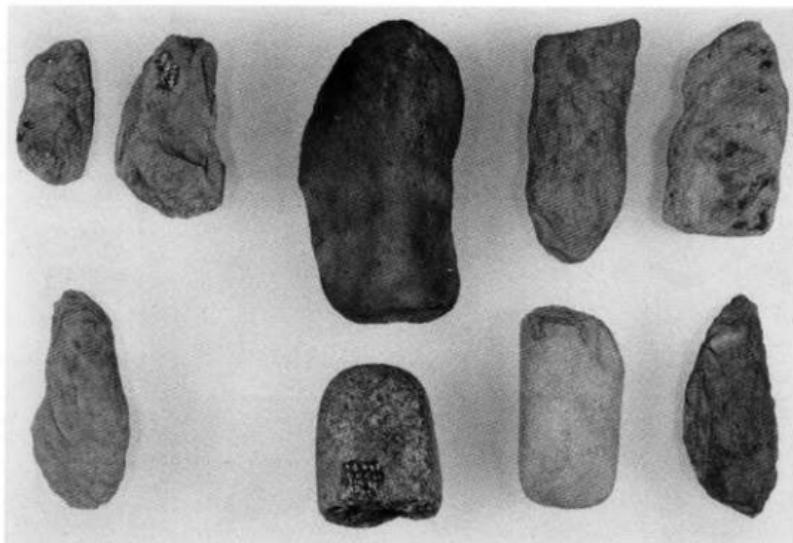
図版 54 J—2 住居址擴張部覆土下層出土土器



図版 55 J-2 住居址覆土出土石器



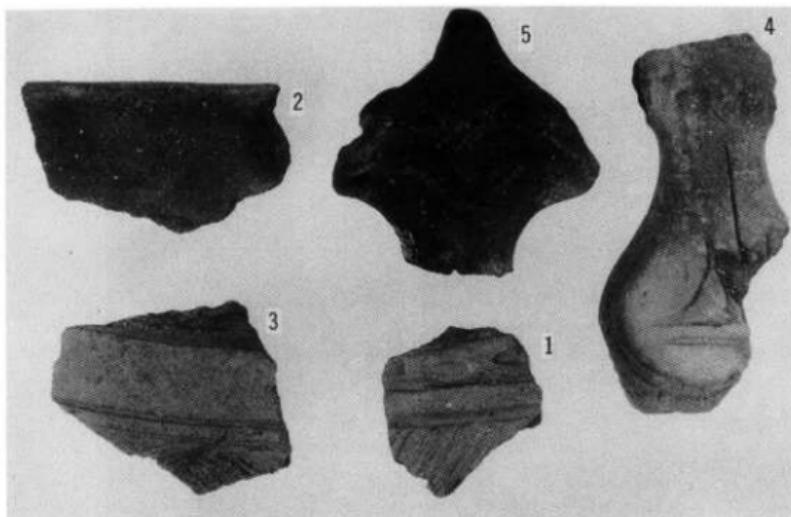
図版 56 J-2 住居址覆土出土石器



図版 57 J-2 住居址出土石器



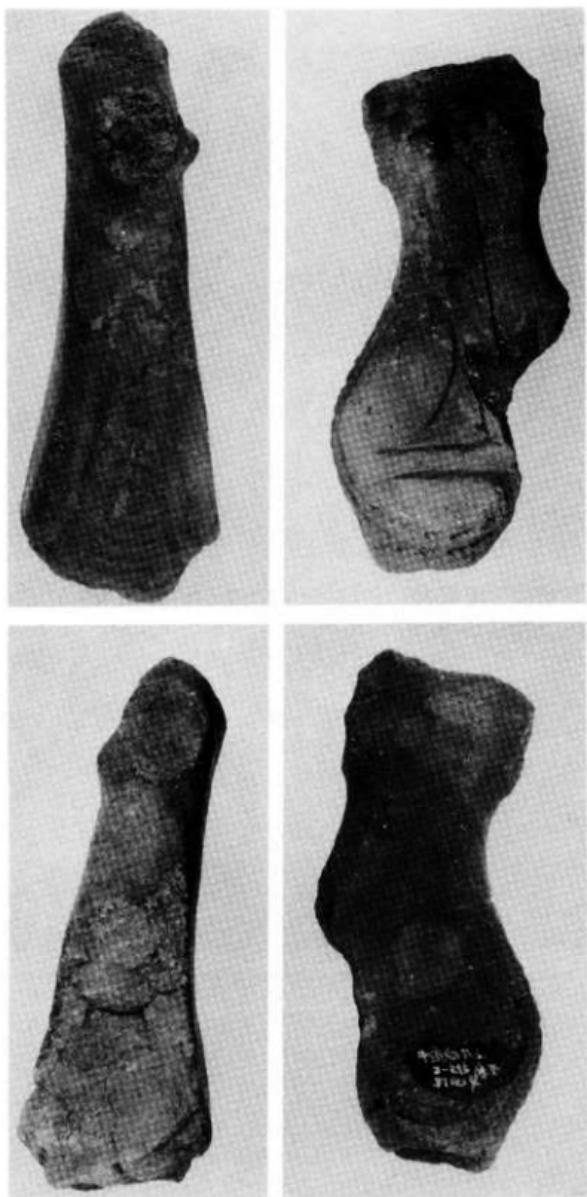
図版 58 J-2 住居址出土石器



図版 59 J—2 住居址床面直下出土土偶・土器



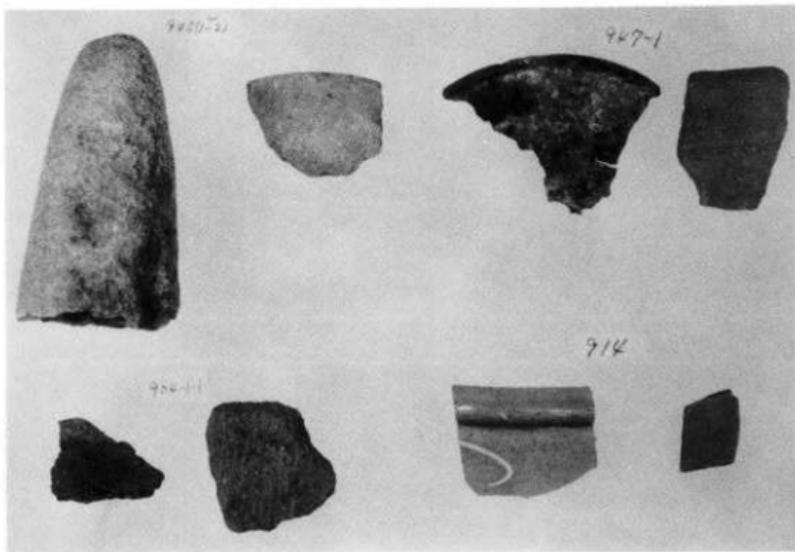
図版 60 J—2 住居址床面直下出土土偶頭部



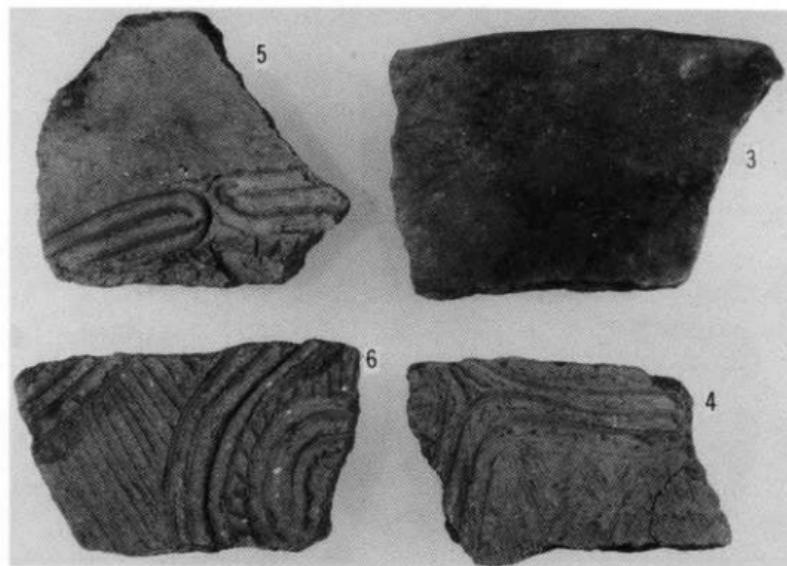
圖版 61 J—2 住居址床面直下出土土偶



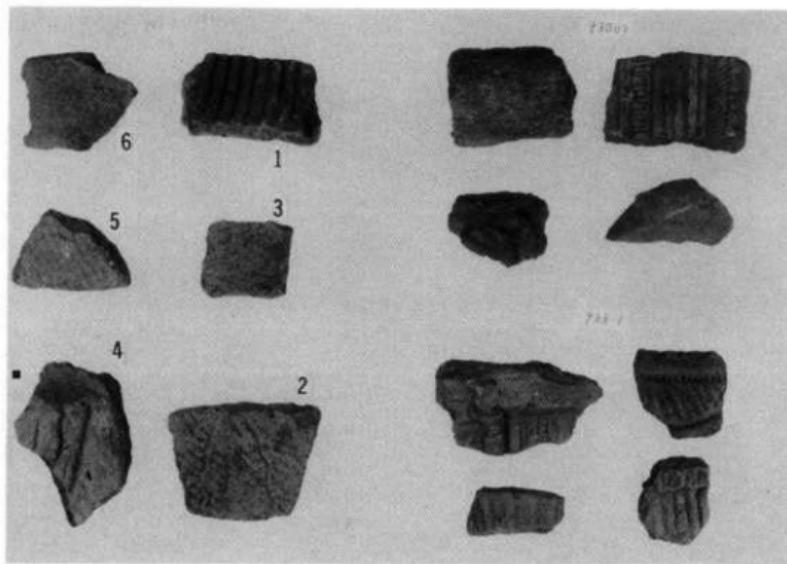
図版 62 平安時代住居址床面上出土土師器、須恵器



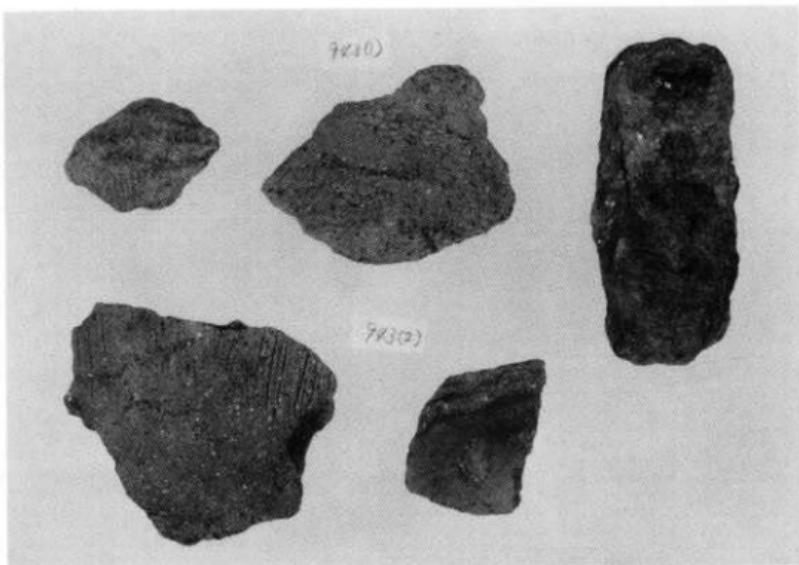
図版 63 小字村上 945(1~3)、947-1、904-1、914番地
表面採集の石器、縄文式土器、陶器



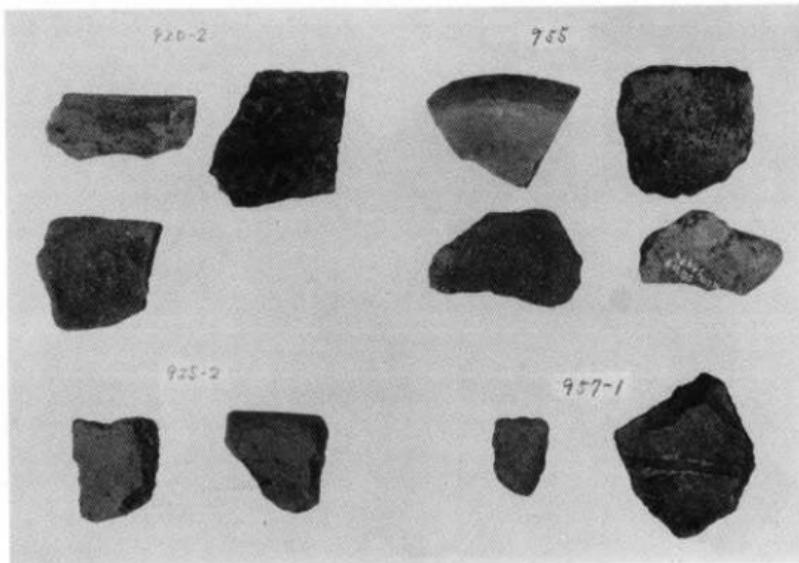
図版 64 小字村上 959—2 番地 表面採集土器



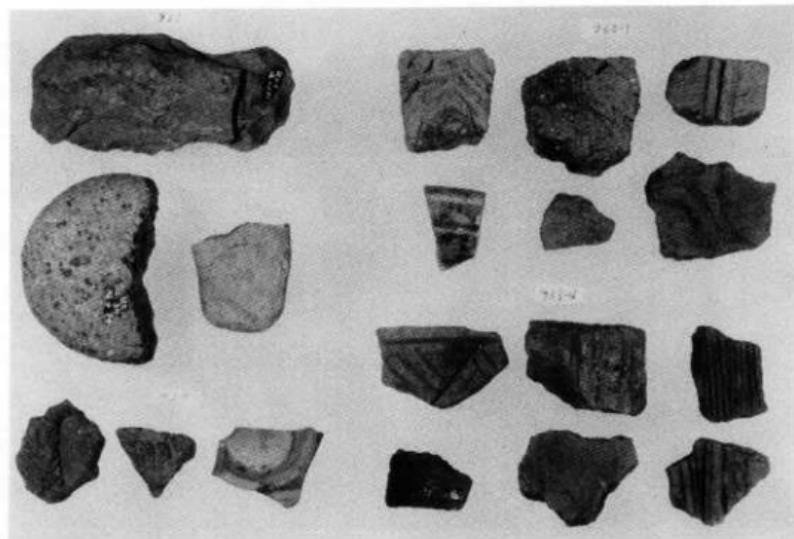
図版 65 小字村上 930、933—1 961—1 番地 表面採集土器



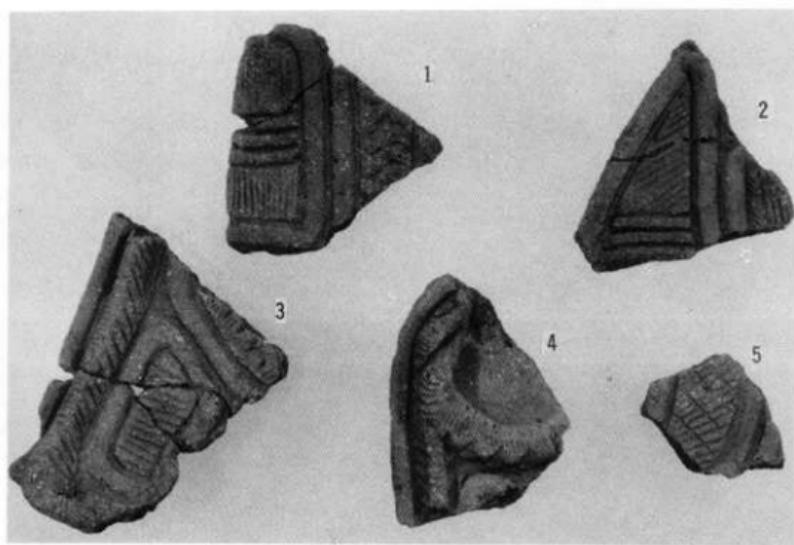
図版 66 小字村上943(1~2) 番地 表面採集土器



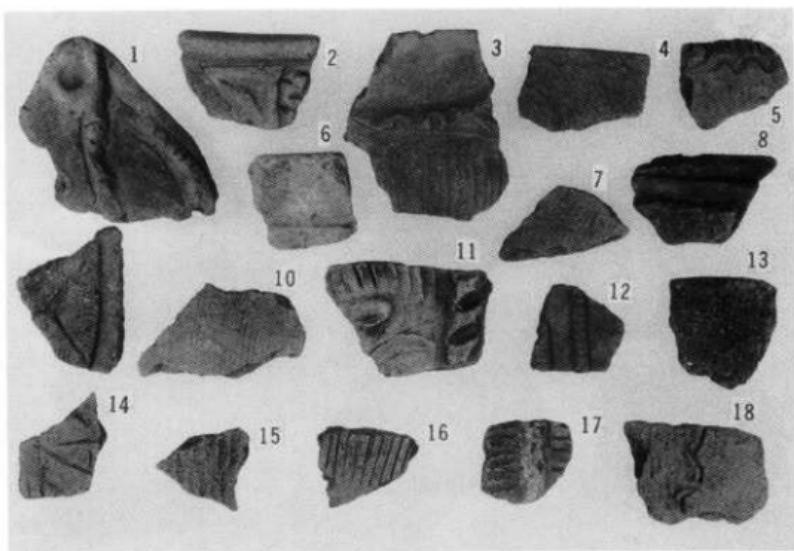
図版 67 小字村上920-2、955、925-2、957-1 番地 表面採集土器



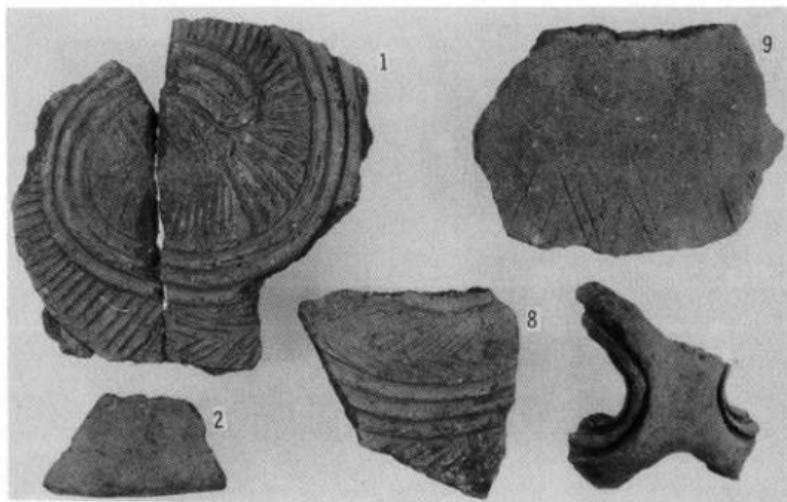
図版 68 小字村上915、929、960—1、933—4 番地 表面採集土器



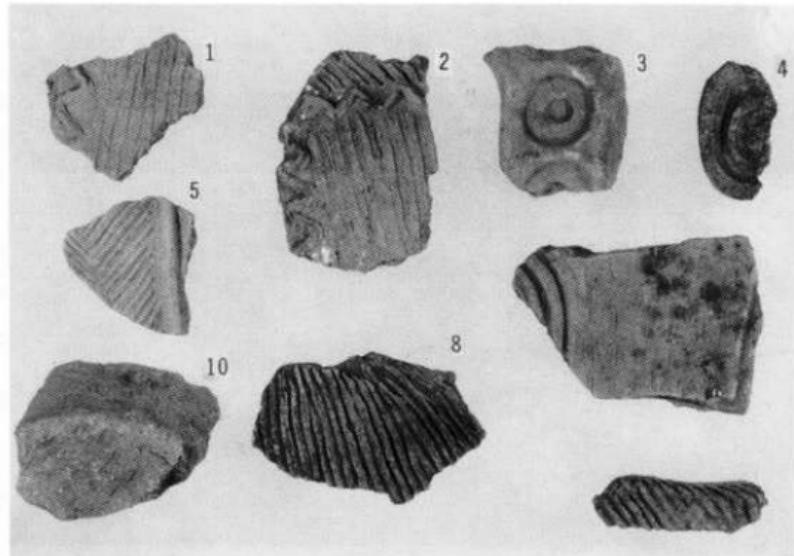
図版 69 4C・31A グリッド出土土器



図版 70 小字村上 表面採集土器



図版 71 小字村上959—2番地 表面採集土器



図版 72 村上遺跡 表面採集土器



図版 73 牧丘町倉科 岡 俊彦(左)と
一宮町国分小字南条215 出土の土器

村上遺跡
—東八代横断広域農道建設に伴う
発掘調査報告書—

発行年月日 昭和55年10月31日
発 行 山梨県教育委員会
甲府市丸の内1の6
編 集 山梨県教育委員会
印 刷 幡映南堂印刷所

